
僕の異世界物語～僕と異常と過負荷と普通と～

KOF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の異世界物語〜僕と異常と過負荷と普通と〜

【Nコード】

N2234R

【作者名】

KOF

【あらすじ】

神城 桜華 二度目の転生。今度はめだかボックスの世界で傍観者を気取った小物っぷりを発揮する！彼の中に立っている三本柱は『葉桜・葉桜・葉桜』。さて、どうなるのやら…… 前作を見てないと分からない！ってなるかもしれないけど、そんな方々を置き去りにしてこの小説儀式召喚！お気に入り件数300キタ！やつべーまじやつべー。これなんだ？めだか効果か？マジパンねえよ！桜華くんも葉桜さんもきつと喜んでおりますです！

ぶるるる(前書き)

読者を置き去りにしてこの小説、儀式召喚!!

では、どいぞー!

ぶろろぐ

真っ白ではなく、どこか薄暗い

そこらへんに本などが散らばっている

また僕は、ここに来たみたいです

「最後は、笑って死ねたからいいかな？」

生き方も死に方も選べた

本当に贅沢な人生だったって、心から思うことができた

「ふむ。幸せな死を選択することが出来たようじゃの？」

この、紅髪ロリ幼女そして、ダルダルジャージに黒縁眼鏡は

「アテネさん……………」

僕を、つまらない世界から連れ出した張本人
全知全能の神、ゼウスの娘さんですね

「はい、笑って死ねましたから」

子供や孫に見守られながら逝けたのが、何とも嬉しかった
大好きな人たちは先に逝ってしまって、寂しかったけど
悲しませることがなくてよかった

「そうかそうか、それは、僥倖じゃな」

ふむふむ、とうなずくアテネさん

「で?どうする?ここにいるか?次の世界に行くのか?」

「次の世界で」

「その即答には少し傷つくぞ?」

「当り前ですよ」

こんな薄暗い所にいたら、本当のもやしになっちゃいますから

「なら、チート減らしてもらっぞ?」

「え?僕に死ねと?」

いや、チートなくしたらただの、もやし……………

いや、普通の世界だったらまあ、すぐに飽きると思うけど
そんな世界には行かせないでしょ?

「他の神々(読者様)からの要望で『勝つと分かってるんだ、盛り上がり性に欠ける』とか、諸々の意見があつてな?」

「ちよつと待てえい!!何?神様って何なの?そんなに暇なの?」

「暇じゃな。世界に直接手を出せるわけでもなく、ただ、壊れないように見えているだけじゃからな。その悠久の時をずっと生きてきた」

「はあ。神様つても大変ですね」

「なら、残したいチートh「セフィロスさんの能力で!!」」

「実は……………」

包み隠さず全部話した

転生者であることも、これからも転生し続けることも

「……………そうなんですか」

「失望しましたか？」

「そんな訳ないじゃないですか。貴方が世界に飽きたからと言って、そんなこと——」

「葉桜さん？」

「そんなことで、私があなを嫌いになる理由にはなりません」

小さく微笑んでそう言ってくれる最愛の人

「……………そう、ですか……………」

不意に泣きそうになったけど

なったけど、我慢できたのは他ならぬ目の前の人のお陰の筈だ

「……………で？どうするんですか？」

「何がじゃ？」

少しは頭をひねってくださいよ

「葉桜さんの事ですよ」

「当り前のこと聞くな。責任とれ責任」

葉桜さんがこの間、頭の上に？が浮かんでいて可愛かった

「じゃあ、……………葉桜さん、ついでに「きますー！」」

うん、元気がいいね。はなまるだあ

「じゃ、見た目はそのままでもいいか？」

「だ、だったら、む、むん」「はい、いいです」

変えるなんてもったいない！これ、万国共通語
けど、なんでガッカリしているんでしょう？

「なら、この三つの世界から選んでもらおう」

あれ？選ばせてくれるんじゃない？

1めだかボックス

2めだかボックス

3めだかボックス

「さあ決めろ」

「最初から決まっているのをさらに決めるのは無理です」

え？行けと？そこに行けと？

「神々（読者様）からの要望じゃ」

「あ、絶対権力ですね？分かります」

それなら仕方がないでしょう

「桜華さん。ふふふ」

すり寄ってくる葉桜さん

「あつあつじゃの〜？」

「はは、嬉しいです」

いや、本当にうれしいです

愛した人と一緒にいられるほど幸せなことはいはず

「けど、その世界だと、異常と過負荷が……」

相手の能力によっちゃ僕即死

「大丈夫。お前ほどの奴が行けば絶対になにかしらがついてくる。
つかんかった場合はつけてやるから」

まあ、いいんじゃないかな？……………って

「アテネさん。僕、基本は真人間……………」

「しらばつくれるなよ？いろいろ調べさせてもらったからな？」

嫌味っぽく言うアテネさん

むむ、人の情報を調べるとは、ストーカーか？

「そっちの方は、大丈夫じゃな」

「私、ですか？」

うん。絶対何か生まれると確信できる

「あっちに行ったらいろいろ困惑するでしょうが、楽しんで過して下さい」

主に幼児プレイ？あはは、あれは泣けた

「じゃ、死んだらまた会おうの」

「葉桜さん、身構えてください」

「え？」

ガチャン

僕らの足元に真っ暗な空間が

「え？」

「はは、葉桜さん。しばし、さよならです」

「え？ええええええええええ！！？」

そうして、僕の意識は途絶えた

「ふう」

桜華もいい顔をするようになった

「けど……………『世界に飽きた男』か」

物理、経済、数学、科学、文学、e t c

芸術も一通り

スポーツも一通り

大事なモノは、家族、か……………

「やるだけ、やったということじゃったんじゃな……………」

神城 桜華 (17) 去

幼児期に親に捨てられ、孤児院で暮らす

それからすくすくと育った

やったことは、一通りそれなりにできた

孤児院で生活を共にしたものを家族と呼ぶ

あの時代にあった事柄のほぼすべてをやった

その成果の全てを、孤児院運営に回す

それ故に……飽きた、か

「笑えるようになって、よかったな？」

本当にいい男になったと、心から感じる

「惚れた、弱みかもしれんの」

神が人に恋をしてはいけぬという定義など、展開にも存在せん
ただ、神が人間に対する興味が極端に個人で変わるだけ

「まあ、よいしようではないか」

ふーむ………さて？

「次は、どんな物語を紡いでくれるのじゃ？」

私たちを、楽しませてくれよ？桜華、葉桜

ぷろろろ（後書き）

僕の心は著しくダメージを受けた

急所だったようだ

次回も、よろしくおねがいします！

1話・初めての………（前書き）

急すぎますかね？

では、どうぞ！

1話：初めての……

目を開けるとそこは

「あぶばぶ？（知らない天井だ）」

はは、アテネさん容赦なく赤ちゃんにした訳ですね？
いや、待てよ？天井が見えるということは捨てられてないんじゃない？
え？まじで？

「おお！元気な子供だな」

「そうでしょう？きつと立派な子供に育ってくれるわ」

……… 今回の両親？生みの親は初めてみますね？
なにか、感慨深いというかなんというか……… いや、これが普通なの
か？

「名前はな？神様からお告げがあつたんだ」

おお！アテネさんと見た！

「君の名前は、桜華。神城 桜華だ」

……… え？名字すら同じ？なんたるGJ！

「綺麗な銀髪ねえ？」

お母さんと思しき人が頭をナデナデしてくれる

美人だ、と思う

二人とも日本人らしく真黒な髪で、僕銀つて劣性遺伝子万歳！ってとこなんだろうか？

「あら？そろそろ、ミルクの時間かしら？」

……え？……え？……いや、え？

おもむろに服を上げ出……す？

ちよ、これでも魂年齢100歳以上だから！

ちよ、やめ……いやああああああああああああああああああああああああ！！

o t z

o r z

o h.....

「はい、げっぷしましうね」

落ち込んでる僕の背中を

鼻血をまき散らして気絶している人を、トントンしてくれるあの
みたいに

トントンしてくれる

.....少し、落ちついた.....

やっぱり、体が赤ちゃんだからだろうか？.....ね.....む.....

「おねんねする前に、げっぷしちゃいましょうね」

それから、げっぷをした後、お母さんが一緒に横になってくれた

「大きく、桜のように、育ってね？」

僕の三度目の人生で初めての.....生みの親の愛だった.....

けど、僕が一歳になったころ

僕は、調子に乗り過ぎていたんだろうか？

初めての親の愛が嬉しすぎて、飛び跳ねすぎたんだろうか？

そう、しなくてもいい事をした

まず、流暢に話し始めた。このころは、まだ、

「おお、すごいわね」

「おお！すごいぞ！」

で済んでいた。けど、これでさらに調子に乗った僕は

二歳のうちに読み書きをしだし始めた

計算問題をスラスラ解き始めた

これも、あの世界だったなら、神童として崇められていた程度だろう

けど、僕は読み違えていた

愛がもらえる、そう、確信していた

けど

「な、なんでだ？まだ、二歳だぞ！？おかしいだろ！」

「それがどうしたの！私たちの子供よ！異常があってもなくても私たちの子供なの！」

「それは、分かっている！けど、怖いんだよ。桜華が、化け物に見えちまう」

こうなっ行って

少し考えれば簡単に分かることだった

この世界では、異常は崇められる存在じゃない。淘汰される側の人間だ

されなかったとしても、利用されてポイツ
まだ、本当に無邪気な子供ならよかったんだろう
けど、僕には考えられる頭があったのに、考えずに行動した

結果……

あの、異常を研究する研究所の様なところに連れていかれた
お母さんは、最後まで反対していたけど、お父さんが押し切った

そして……

『人間は無価値に生まれて』

『無価値に生きて』

『無価値に死ぬに決まってるのにさ』

あれですね。球磨川君ですね。

ああ、これは僕に言っているのではなく、横にいる『黒神めだか』
さんに向かって言ってます

ようするに、僕無関係

とりあえず第一印象は、ウサギがかわいそう

それに、あれだ。別に大して嫌悪感が沸かない

とりあえず、球磨川君に向かって、にこやかに笑いかけた

『うん？君は誰だい？』

「神城 桜華です」

よっしゃあ！なんか名前を知り合つことができた！

ふぁーすとやっぴー　と言って抱きついてやろうか！つと暴走はここまでにして

『君たちはどう思ふかな？黒神めだかちゃんに、神城桜華くん』

なんか原作とか著しく忘れちゃってるけど僕の持論は言っておこう

「そうかもしれませんが。そうです、意味なんか持っている人間なんていません。意味を見つけるのが人生です」

最初から意味があつて生まれる人間なんてどこにもいない
僕は意味が見つけれなかったから、飽きちゃったけど
前は見つけたからな、うん。

そして、球磨川君、にっこり笑う

うん、可愛らしい笑みだ

『まだ言つんだ？』

『へ〜』

『君も大概だね？』

なにがだよ！主語述語をはっきりしよう！！

まあ、そんな馬鹿げたことを考えていると、球磨川君が呼ばれた

『残念』

『もう少し君たちと話していたかったんだけどな』

「球磨川君」

『なにかな？』

「友達に、なれそうですね？」

ふっふっふ、先に言ってやったぜえ！

『ん？どうだろうね？』

『はは、君はおかしいね？』

『僕に向かってそんなこと言ったのは』

『君が初めてだよ』

その時、球磨川君の顔がおかしそうに歪んだのは、ちょっぴり嬉しかった

『けど、桜華くん』

『君は間違ってる』

『世界に見つけるべき目標はなくて』

『人生に目的なんてないんだから』

そういうと、球磨川君は大人の人に導かれて消えていった
そのとき、引きずられているウサギがかわいそうだった

歪んでいるっていうのとは少し違いますね

螺子みたいに捻くれているんでしょう

横でめだかさんが呆然としているけど、まあ、ほっとこう
性格を治してあげるのはたしか……ヒトキチ？まあ、そんな感じ
だったと思う

「次の子、来てください」

球磨川君の検査は終わったんだろうか？

ま、いいでしょう

中に入ると

「こんにちは。あなたが、神城桜華くん？」

えーと、幼女？うん？僕、めだかボックス、よく見てなかったから、
分かんない

「はい」

「よろしく。私の名前は『人吉 瞳』よ」

人吉？んー、ん？ま、いいや

「あなたが異常なのかどうか、調べさせてもらっわね？」

それから、いろいろな機械にぶち込まれて調べられた
それだけ。

「どうでしたか？」

お父さんが恐る恐ると言ったように聞く

「息子さんは……異常ですね」

僕にとっては分かり切っていたこと

両親にとっては聞きたくなかった二文字

はあ、ここでも、両親に捨てられるんだろう
こーゆー時、あれだ。失うぐらいなら、最初からなかった方がよかった

「なあ、分かっただろう？俺たちの息子は異常なんだ。だから！」

「だから、言ってるでしょう？異常だろうと関係ない。あなたがこの子を捨てるって言うのなら、私がこの子を一人で育てます！！」

うん？なんか、変な展開に？

「お母さん、いいよ、別に」

「桜華？」

「僕のせいで、お母さんが不幸になることなんて、ないよ」

「私は、自分から不幸になるつもりはありません！桜華と離れ離れになる方が不幸です！」

きつぱりと、はっきりと、言いきった

「なら、離婚だ」

「ちょ、二人とも落ち着いて」

瞳先生がこちらの方をちらちら見ているが、無視した

多分、頬を伝う温かさは、お母さんがくれたんだろう

そう、感じた

今は、感動に身を任せていたかった……………

その時、僕の中に何かが生まれていたのに気付かなかった

それから、離婚の話があるとかで、僕は託児所につつまれた

そこで見たのが、すごく柔らかい笑みを浮かべた少年と

今さっきのめだかさなんだった

あと、隅っこで固まってるクリーム色の髪を……………？

と、とりあえず、近寄ってみる

「えつとお」

ふっと顔を上げるその人

目に、精気がないけど

やっぱり、この人は

「桜華しゃん？」

「葉桜さん？」

やっぱり、だった……

いきなり、ぎゅっとしてきた

「桜華しゃん……くすん……桜華しゃあん」

泣いていた。僕の大好きな人が泣いていた
ダレダ？ダレダ？ダレダ？

最愛の人を泣かせたのは……ダレダ？

話を聞くと、捨てられるそうだと

唐突もなく、捨てられたそうだと

愛情を与えられず、捨てられたそうだと

愛を知らずに、捨てられたそうだと

両親が笑っているところを見ずに、捨てられたそうだと

最後に見たのは、嘲笑う両親の姿だったそうだと

気づけば、葉桜さんの両手には、手袋がはめられている

直接手で触ると。カミソリで切られたみたいに、モノが切れるそうだ

そんな、理由でか？

そんな、理由で、泣かせたのか？

そんな、どうでもいい、取るに足らない、なんでもない、ことで……

「葉桜さん、手、貸して下さい？」

「け、けどお」

「あなたがどんな異常を持っていたとしても、どんなに歪んでも、人を殺しても、僕が貴女を嫌いになる理由にはなりません」

ただ、繋ぎとめたかった

大地と空のように、決して交わるものがないものを繋ぎとめる、雨になりたかった

握った瞬間、血が噴き出してくる

めだかさんと笑っていた少年が目を見開いている

知るか！ここで引いたら、男じゃない！

さらに強く握り返す

この、素晴らしきこの世界で、幸せも不幸も知らないまま、絶望に沈む人を

最愛の人を！

ファンタジア
【素晴らしきこの世界】

救ったんじゃない、導いただけ

僕が差し出すこの手は、救いの手ではなく、導く手

手から血が止まった

「桜華しゃぁん……」

「クス………ひさしぶりです」

泣きながら、笑った

ただ、それだけのこと………

1話：初めての……（後書き）

どうでしたか？

かなり飛ばしました

桜華くん、葉桜さんともに、かわいそうな感じにしました

では、次回も宜しくお願いします！

とーじょーじんぶつー（前書き）

タイトル通りでございます

とーじょーじんぶつー

神城 桜華

銀髪碧眼 カダージュっぱい

性格：基本めんどくさがり

心におったつ三本柱『葉桜・葉桜・葉桜』
キレると、見境ないよ？

異常：【素晴らしきこの世界】
ファンタジア

詳細は、未定

過負荷：【ああ、無情】
ゼロ

程度 of 能力

秘密♪

お母さん

黒髪黒目 美人だから脳内補完してね？

性格：異常？それがどうした、な人

神城財閥女社長

子供が大好き、食べちゃいたい……え？

年齢は聞いてあげないで！

はるさき はおつ
春咲 葉桜

クリーム色の髪クリーム色の眼 ユフィっぱい

性格：正義感強い

心におったつ三本柱『桜華・桜華・桜華』
ヤンデレです

過負荷：【道化師料理長】
クラウン・シェフ

切り刻むということしか分かっていない

詳細は、未定

2話・ヤンヤンリリリリヤンリリリリ（前書き）

ヤンヤンリリリリヤンリリリリ

では、さっさとー。

2話：ヤンヤンデレデレヤンデレデレ

葉桜さんの名字は春咲さんというそうで

あ、めだかさんは、性格を、生きる目的を掲示されたみたいですね
笑顔です。

「桜華しゃん。大好きでしゅ」

舌つ足らずなのがまた、い、いや、ロリコンな訳ではないんだからね？

か、可愛いというだけですから。

それにしても、葉桜さんいきなり過負荷全開ですね？

手が大根おろしで擦ったみたいになりましたよ？

まあそこは、セフィロスさん万歳。すごい速さで治っていく

葉桜さんがつけていた手袋は、のこぎりでギコギコしても、トンカチで殴っても、ドリルで穴を開けようとしても微動だにしないらしい

葉桜さんの過負荷は、オンオフできないがロウハイは出来るっていう、どこかで聞いたことがある様な設定だ

なので、最大限弱くしたら、ひっかき傷みたいになるぐらいで済むらしい

逆に最大限にすると、軽く手袋は粉々にできるらしい（それはもう、十六分割も真っ青なぐらい）

多分、葉桜さんの両親にあつたら勢い余って殺してしまうだろうと
僕談

それにしても、僕の異常って何だろ？葉桜さんの過^{マイナス}負荷が効かなくなっただけ

よくある異常殺みたいな感じではない気がする

もつと、強制力の強い……………ま、いいや

深く考えたら、悩んじゃうし

それから数分後。お母さんが戻ってきて

「あんなクソ亭主。三行半つけてやったわ」

その時のお母さんの顔、めっさ怖かったと僕談

「ん？その子は？」

葉桜さんを見て、不思議そうに言う
事情を話すと

「そう……………なら、家族になりましょう！ちょうど一人欠員が出たし」

あっけらかんと言うお母さんに僕と葉桜さんは

『ぽかーん』

明らかに擬音が聞こえたのは気のせいだと想いたい
そう！気のせいなんだ！

そんな訳で、葉桜さんが家族になりました……………？

え？

ま、いいでしょうじゃないか

「神城桜華同い年」

なんだ？その、微妙なネーミングは？

「貴様、本当に二歳か？」

「それを言つと、めだかさんも本当に二歳ですか？」

そつくりそのまま返しませよー

「うむ？」

うむ？

「O U K A しゃん？」

ごりっ

万力も笑つちやうくらの強さで肩を握りつぶされる

「やっぱり、大きい人がいいんでしゅか？」

い、いや、まだ、そんなに膨れてないじゃないか！大きかろうと小

さかろうと、葉桜さん一筋だぜ！

「そうでしゅか？」

「そうなんでしゅ」

ヤンデレ回避！僕の技能はまさに一級だぜ！

「はは、みんなおともだちだね！」

……………え〜と、ヒトキチくん？だったっけ？
まあいいや

「じゃあ、桜華と葉桜？今日はお友達にバイバイしてね？」

お母さんがにこやかに
泣いた跡がある、真っ赤な目で
そう言った

『ばいばい』

「うむ」

「じゃあね〜」

これが、僕と、ヒトキチくんと、めだかさんと、葉桜さんの出会い
だった、よ？

帰って知った

お母さん、大金持ち……え？

3話：そうだ、どーぶつえんにいこー（前書き）

この小説を読んで「俺っちも動物好きになりました」と言う人が増える間で書き続けます

関係ないがね？

では、どうぞ！

3話・そうだ、どーぶつえんにいこー

今日は、動物園に来てます

そう、動物園です

つまり、動物たくさんいるんじゃないやああああああ！！

ひゃっほー！めっちゃうれすいー！

飛び跳ねているところを葉桜さんとお母さんに見られた。恥ずかしい

しかし、すぐに疑問点に気がついた

動物、いなくね？

動物園なのに、動物、いなくね？いなくね？いなくね？（えこ）

ちつくしよー！何故だああああ！！折角、動物と触れ合おうとしていたのに！！

葉桜さんに楽しい思いをさせてあげようとしてたのにいー！

僕がorzをしていると

「あー、めだかしやんと善吉くんですよー」

あ、思い出した、善吉君じゃん
ヒトキチて……僕は王野郎か！

ん？め・だ・か？

あいつかあああああああああああああああああああああ
！！！！

めだかさん動物園の中央でプルプル震えてるし
スキル『動物避け』だったっけ？
なんたる不運orz

よし、ならば僕の『動物よせ』と勝負だ（桜華くんトリップ中）

「めだかさん」

「桜華同い年……」

めっちゃ落ち込んでるし
勝負しろと言いにくすぎる

「うーんとね？めだかちゃん、しょうがないって。ね？またこんどにしょ」

ひとく、ではなく善吉君は優しいね

よし、ひと肌脱ぎましょー

うん、ライオンでいいかな？

「みんな、あのケージの前行きましょっ？」

ライオンの檻の方を指さす
何にもいないけど

「桜華同い年。辛くなるだけだ、やめてくれ」

「まあまあ」

ケージの前まで来て息を一吸い、そして……………

「ぴい〜」

れつつ口笛。これはね？獣笛と言って、動物と意思疎通を図ることができるんだ。けど、これは僕が習得した僕だけの技だからね？皆はやろうと思っても、一種類ぐらいしか意思疎通は出来ないんじゃないかな？そもそも動物と言つのは（ryなんだ。分かったかな？

つまり、ほら

ぐるおう

百獣の王ライオンのおでましですー

「おお！おお！ど、どどどどど、動物だぞ！善吉！動物だぞ！ライオンだぞ！カッコいいな！」

「そうだね！」

めだかさん、めっちゃうれしそう

善吉君はめだかさんが笑っているのを見て満足そう

この調子で

「ぴい〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！」

わんにゃんぴーぷーおおんぐるうおっさんぽーん

ん？最後の方おかしくないか？

いや、面白い方の可笑しいではなく、おかしい……のーしんきんぐ！

「猫だ！犬だ！カバだ！キリンだ！麒麟だ！トラだ！ワシだ！鷹だ！ウサギだ！猿だ！オランウータンだ！熊だ！ダチョウだ！ラージャンだ！リオレウスだ！カナリアだ！インコだ！ピカチュウだ！イタチだ！ゴリラだ！ヴァジュラだ！スズメだ！チーターだ！豹だ！動物だあ！！」

ん？途中おかしいのが混ざりまくってない？

いや、面白い方のおかs(ry

めだかさんが善吉君を引きずりまわしながら動物園の奥に消えた

善吉君、君の命運を祈る

「くす！桜華しゃん、お母しゃん、まわりましょ？」

「そうね？」

「うん！」

お母さんを真ん中に三人仲良く動物園の人ごみの中に消えた

「ふう。今日は楽しかったわねえ？」

今日は一日魂年齢をかえりみず、はしゃぎまわった
葉桜さんが笑った。お母さんが笑った。めだかさんも笑った。善吉
君も笑った

うん、それでいいじゃないか

笑えたらそれで、いいじゃないか

人の武器は涙じゃない。笑顔だ！っと今なら胸を張って言えそうな
希ガス

そうなのだ！素晴らしきこの世界で僕は目的を絶対に見つける！そ
して、

球磨川君と、友達になってやる！！

っ
て、
い
っ
て
み
た
り
w
w

3話・そうだ、どーぶつえんにいこー（後書き）

どうでしたか？ とうでした

次回も宜しくお願いします！

閑話：お母さんの日記（前書き）

筆がではなく、指が進む進む

笑っちゃうくらい

やっぱ、原作を持っていると指が進みますね？（いや、今回は関係ないけども）

では、どうぞ！

閑話：お母さんの日記

○月×日

今日から私の愛しい二人の子供について日記を残したいと思います

○月 日

今日は、桜華と葉桜の日常を追った

二人にばれないよう物陰から

見てみると、葉桜がいきなり桜華にダイビングキッスをした

葉桜、恐ろしい子！

○月□日

今日は、二人を仕事場に連れてきた

私がいなくても会社は回るけど、体面として顔ぐらいいは見せないよね

連れて行って皆に紹介した瞬間

「何この子、チヨー可愛い！」

桜華が言われ

「ぐふっ、ロリ幼女萌え」

葉桜が言われ

ちなみに言った二人は、昼休み謎の失踪を遂げた

月。日

今日はみんなで動物園♪

桜華が有り得ないくらい飛び跳ねてた

三メートルぐらい

元気がよろしいね？花丸をあげよう

二人の友達のめだかちゃんと善吉君にあった

黒神財閥とは仲良くやれてるから言うことないな

動物がいなくて泣きそうなめだかちゃんを必死に慰めてた善吉君

かわいいな

そこで、桜華が口笛。動物なう！？

怪獣みたいなのが混じってたけど気のせいだろう

桜華は動物とも意思疎通が図れるみたいだ

桜華、恐ろしい子！

今日は一日楽しかった

月×日

今日は、葉桜に

「料理教えてくだしい！」

おもわず食べてしまいそうになるくらい可愛かった

私も料理師免許一級保持者！完璧に教えてやろう！

葉桜には包丁がいらなみたいだ

ビックリ万国人間ショーww

出来あがったのが

「ヤンデレのヤンデレによるヤンデレのためのザクザクザッくん
ロール」

だそうだ

まあ、ロールケーキの中にザクザクに切った果物を詰め込んだもの
なのだが

包丁で切っていないので、金気がうつっていきなく恐ろしくうまかった

「これで、桜華ちゃんを陥落♪」

葉桜、二歳にして男を落とそうとしている

とりあえず、ナデナデしてあげた

目を細めていて、危うく襲ってしまいそうだった

×月○日

今日はあの異常を調べる病院に来ている

まあ、ただの定期検査だ

結果は異常。それがどうした

まあ、それはいいとして、善吉君のお母さんと仲良くなれた

これがまた可愛くて、うふふ……おつとお、よだれ失礼

×月 日

二人が三歳になり、何かやりたいことはないかと聞くと

『剣道がやりたい』

うん？そんなに剣術が好きなのかな？oh samurai-iみた
いな？

訂正、弟子入りした剣道家を一カ月で引退を決意させた

マジで私の子供さいきょー！食べちゃいたい！つとお、危ない危ない
竹刀を構えてたたずむその姿、GAP萌え！

j r・世界選手権で桜華一位、葉桜二位になった

これは、剣を持たせたら同年代で勝てる人がいないことを意味して
ひゃっほおう！私の子供マジチート！転生して有り得ない能力もら
ってたりしてww

□月○日

中国の古い習慣で真名というものがあるらしい

そこに、楊伯起という人物の真名が桜華であることに気づく

え？生まれ変わり？

その人、白い龍と黒い龍を単身で吹き飛ばしたとか何とか

まじでか！

さらに、その人の生涯の伴侶だったといわれる女性の真名が葉桜
うんめー？なにそれおいしいの？

とにかく、二人はお似合いということだ

□月×日

今日も会社に連れて行ってあげた

相変わらず二人の人気はすごい

「モデルとして売り出したらどうですか？」

との案があったが、どうしよう？

たしかに、二人は将来それはもう、

男が見たなら鼻血を噴き出し

女が見たなら昇天してしまうほどの美形に育つことは間違いない

しかし！この宝物を一般大衆に晒していいのか！いや、よくない！

でも、とりあえず、聞いてみた

「え？モデル？うん？」

「も、モデルでしゅか？ひゃう……………」

桜華は状況把握が苦手みたいだな

葉桜はまんざらでもないらしい

よし！みんなの眼福のために！あえて晒してやろう！

その年の売り上げが十倍になった

「ふう、今日はつと」

ふふふ、今日も楽しかったなあ

閑話：お母さんの日記（後書き）

どうでしたか？二人ともその魅力をいかんなく発揮しております

さらに、モデルデビュー！。世界一位と二位

やりすぎた！

では、次回も宜しくお願いします！

閑話：確かな（前書き）

えーと、葉桜さんがかわいそうです

では、どうぞ！

閑話：確かな

私は、生まれながらにして、母親を殺しかけた

生まれ落ちるときに、母の体をスタスタに切り裂いたそうだと

血まみれの中があざ笑うかのように泣いていたそうだと

赤ちゃんのころから記憶があつた

いや、意識があつた

そのせいで、知らない方がよかった事まで、覚えてしまっている

記憶してしまっていた

両親が私に対して、笑顔を向けなかったことを

笑顔の代わりに暴力を向けられた

赤ちゃんのころから、手袋をつけられた

周りは知らない人

周りは分からないもの

支えてくれる人もいず、笑いかけてくれる人もいず

私の存在を世界が嫌悪しているように思えた

それでも、自分の能力で死のうとは思わなかった

それは、あの人がなにより死を、無駄な死を嫌うからだ

生まれてから、嫌われてきた私が、目の前にいなくても支えてくれた

その人といつか会う日まで、絶対に死にたくないと思った

けど、現実は無情だった

親に捨てられた

そう、現実は無情だった

その時親は嘲笑っていた

もう、現実は無情だった

その時私は、笑ってしまった

笑っちゃうくらいの絶望だった

絶望すると、涙も出ない

新しくて、どうでもいい発見だった

私は、それでも死にたくなかった

沈みたくなかった、絶望に

けど、絶望は底なし沼みたいに私を引きずり込んでいった

「えつとお」

顔を上げるとそこには、銀髪碧眼の私と同じぐらいの少年がたっていた

「桜華ちゃん？」

まだ、舌っ足らずだった

ちょっとした希望で言ってみた

「葉桜さん？」

私の名前を言い当てた

その瞬間、涙があふれ出した

これでもかってぐらいに、本で読んだノアの箱舟のお話しぐらい出たんじゃないかってぐらい

思わず、ぎゅっと抱きついてしまった

そして、恥も外見も考えず泣き喚いた

「桜華しゃん……くすん……桜華しゃあん」

胸の中で泣いた

小さな胸のはずなのに、大きく感じた

直に手で触れ合いたかった

けど、愛している人を傷つけない方が強かった

桜華さんに全部話した

全部、全部！

桜華さんの眼を見た

虚ろだった

少し、怖いと思ってしまったんです

けど、すぐにそんな思いは吹き飛んだ

「葉桜さん、手、貸して下さい？」

いきなり、なんでもないように言い放つ桜華さん

ふっとほほ笑みながら言われたけど

「け、けどお」

やっぱり、傷つけるのは嫌だった

大好きだからこそ、傷つけたくない

愛しさ余って憎さ百倍になんかならない

愛しさ余って愛しさ無限大だもん

私は弱いから

人に嫌われるのが怖い人間だから

愛しい人に嫌われて世界を生きていけるような強い人間じゃないから

けど

「あなたがどんな異常を持っていたとしても、どんなに歪んでも、人を殺しても、僕が貴女を嫌いになる理由にはなりません」

それは、私も一緒ですと言おうとする前に、手袋を外されて手を握られた

ブシュー

血が噴き出す、噴き出す噴き出す

いつもなら、コントロールできる強弱も、焦れば焦るほど、出力が上がっていった

一瞬辛そうな顔をする桜華さん

後ろでめだかちゃんと善吉君が目を見開いている

それでも、もつと力を込めて握られた

もつと噴き出す血

もう、イヤ……………

『愛してます、葉桜さん』

何故か聞こえた、私と桜華さんが結婚する時の声

手を見ると、噴き出る血が止まっていた

顔を桜華さんに向けると

「桜華しゃぁん……」

自然と、名前がこぼれた

「クス……………ひさしぶりです」

今と昔、二つのモノ

見比べてみても、形は違うけど

形を変えて眼の前にいてくれるその人は

『確かな一つのものだった』

閑話：確かな（後書き）

葉桜さん、書いてて泣きそうになった

葉桜さんを愛でる会を設立したら、桜華くんに細切れにされそうなのでやめときます

次回も、よろしくおねがいします！

4話：幸せの価値観（前書き）

とりあえず、いまだ立てられたことのない人にフラグ建て

桜華くんは特級フラグ建築士なのだ！ふっはっは！

では、どうぞ！

4話：幸せの価値観

僕、五歳なう

いや、お母さんの話をちゃんと把握しておけばよかったと後悔している

え？なに？モデルって？くそ忙しいじゃん！

寝る暇は、あるけどもだよ？寝るまでが分刻みってなんだよ！

いや、別に嫌な訳ではないけど。

こつ、なんて言うんだろう？は、恥ずかしいといえますかね？」

その、ポーズをとったり、笑顔で写真を撮ったり、なによりも！

人気なのがさらに恥ずかしい！！

まあ、それは、置いといてだよ？

今日は、定期検査に来たんですよ。あの病院に

いろんな人と知り合いになれたなめがとんぱんち

腕折ってもすぐに治る人とか、地割拳めがとんぱんち使える人とか

今日は、葉桜さんはモデルの仕事がある様で、こちらをつるつるした目で見つめながら

「ばいばい」

って言ってました。危つく理性がサラダバーして、本能がコニチハするところでした

だ、だって、あの舌っ足らずなしゃべり方！ぷっくりと膨れた下腹

部。寸胴の様なボディ。

葉桜さんにつき、ロリコンが爆発してしまいそうですよ！っとお、失礼でした

（桜華は現段階シヨタっぱいです）

さらに、お母さんも今日は珍しく仕事でいないし

暇ですねー。僕、平和なのは好きですけど、暇なのは嫌いなんです
よー

まあ、いい。とりあえず、素数を数えよう

3	5	7	11	13	17	19	23	31	37	41
43	47	53	59	67	71	73	79	83	89	97

ん？違うか？よく分かんなくなってきた

「おい」

「ふえ？」

いきなり声をかけられ素っ頓狂な声をあげてしまう
だれだ？この将来ヤンキーになりそうな絶賛美少女は？

第一、めだかボックスのキャラ印象として気になったのが、美人と普通の差があまりないw

ようするに全員美人？いや、全員美人だったら美人じゃなくなるな

「てめえ、なめてんのか？」

「なめてませんよー。考え事中だっただけですー」

こーゆー時は、瓢々とした態度で臨むと相手の興味がそがれるから、

効果的

ゴスっ

思いつきり釘バットで殴られた

イタイな……イタイ？誰だろう？痛みを僕に与えたのは？

こんな、幼稚な痛みを与えたのは？

「あーごめんなさい。もう二度としません。許して下さい」

釘バット振り下ろした姿そのまま表情を変えずに言うその人

「はあ、痛かった、泣きそう、どうしてくれる？黙るな、行動しろ、お前の反省になんて一円の価値もない」

魂年齢百歳超えたからと言って、理不尽を許す気にはなれませんよ
我慢は出来るけど

その人は、僕がけろっとして立ちあがったのに驚いたんだろうか？
啞然としている

とりあえず、殺してやろうか？つとあ、危つい危つい

殺しちゃダメ！絶対！

そついや、正宗どこにあんだろ？
どうでもよくはないけど、いいか

「今回は我慢してあげますよ。思い違えないでください？許した

のではなく、我慢したんです。次やったら、あなたの全身が一京三千兆分割されると思ってください?」

どうやってやるかはその時に決めよう

「お、おう」

うむ、分かってくれたのならよろしい。ナデナデしてあげよう
なでなで

「な、なにしてやる!」

ふむ、意外とうぶなようで。顔が真っ赤です
僕、いつの間にナデポテクを? (最初からです)

「いや、聞き分けのよい子にはナデナデせよと、昔からの諺ですよ?」

「ねえよ! そんなの!」

「では今からですね?」

ないのなら作ればいいんですよ
それが人類の歴史です

「うん? そちらの男の子は?」

ピコピコDSやってるよ
DS面白いからね? 分かるよ

あ、そのソフト、お母さんが作った奴だ

その時、口の悪い少女が釘バットを振りあげる

咄嗟に、正宗がある体で振る

スパパパパパパパパパパパパパパパパパパ

右手に正宗なう！？。。（ ㇏ ）<<<<！？

いや、なう！？

目が飛び出すぎて逆に驚いたわ！？

「て、てめえ、それどうやって」

「あいどんとのー」

るーらるるー！今日もいい天気だなー！あ、雨だった。あははっ！
現実逃避やめい！

お母さん、今、僕は、超能力者になりました……………最初からか

「あーえー。アナタハコレヲミテイナイ。ボクモコレヲミテイナイ。OK?」

「お、おk?」

む、なんか、妙に可愛いな『死にますか?』ゾクッ
いえそんなことはありません。貴方こそが一番であり最上であり至

高です！一瞬でも気移りしそうになんかなっておりません！ハッ！？なんだ？今の声は？って、政宗消えてる！？

「一人百面相して面白いか？」

「え？全部、表情に表れていたんですか？」

「うん」

「orz」

我ながら見事な形だと思うよ？まさに、平行にorzだからね

「これも、アナタハミナカッタ。ok？」

「ok」

おお、ノリがいいな

「うん？お前、よく見たら最近売れてる幼児モデル神城桜華じゃん」

「あれ？なんで分かるの？あなた、そーゆーことに興味なさそうなのに」

「あ、あたしだって、そーゆーのにぐらい、興味あるし！」

そこまで強くおっしゃらないでもよろしいではなかですか……

「幸せそうな奴だな？反吐が出る」

うん？また幸せが嫌いとか幸せが俺を嫌ってるって感じの人ですか？
ノンノンですね？

「どうして、幸せが嫌いなんですか？」

「幸せが嫌いな訳じゃねーよ。幸せそうな奴が嫌いなんだ」

うん？難しい表現をしますね？僕馬鹿ですからそーゆー表現いまいちわからないですたい

「あなたは、幸せになりたくないんですか？」

「さあな？幸せになったことないからわかんね」

ふむ、困ったな。ほんと、こーゆー僕のお節介焼きな性格困った

「幸せの味を覚えてください？やみつきになりますから」

分からないというのなら

「僕が、幸せにしてあげましょうか？」

「ふ、ふん！」

あう。そっぽ向かれた。そんな顔真つ赤にして怒んなくてもいいジヤマイカ？

「名前、教えてくれませんか？そっちの少年も」

「……………志布志 飛沫だ」

ぼそつと言ってくれる、飛沫さん

「蝶ヶ崎 蛾ヶ丸です」

蛾ヶ丸君か。個性あふれる人たちだなー

それから三人でぽつぽつと言葉少なに話していたら

そこで、僕が呼ばれる声がした

「あ、飛沫さん」

「んだよ」

ーつ言っておこうと思う

「幸せを知らないって言ってましたけど、僕は今、二人と話していた時間は幸せでしたよ？」

「ふ、ふん！」

あう。またそつぽ向かれた。いいもん！気にしてないもん！
すみません。自分で言っただけで気持ち悪かった、おえ……

「じゃねー？」

「……………じゃな」

「さよなら」

うん、あの人たちはモブキャラなのだろうか？存在感違つような……ま、誰だろうと関係ないな

そのあと、あの病院は、怪談の似合う廃病院になったらしい

4話：幸せの価値観（後書き）

へっへっへ！桜華くん万歳！

え？僕、過負荷勢大好きですけど何か？

では、次回も宜しく願いします！

5話・暇に暮らすな。平和に暮らせ（前書き）

セフィロスさんパネー

では、どつぞど！

5話：暇に暮らすな。平和に暮らせ

僕、六歳なう。

葉桜さんも、六歳なう。

お母さんは××なう。

平和だー。いいね、平和って。ほんと、なにがあるでもなく、なにがおこるでもなく、ゆつくりとしたなかで、平らに和むってのはいいもんですな〜……………って、見方変えたら暇……………

現実逃避終了しようか？

今、くそ忙しい

平和と思ったら、平和に思えるかなって思ったけど、思い過ぎてよく分からなくなってきました

なんで忙しいかって？

モ・デ・ル。今だ勢いとどまること知らず爆走中

なんか、超新星だか、銀閃だか、厨二乙みたいなのをつけられたそれに、銀閃で、そんなに速く動いたことないよ？今回は

葉桜さんは、いつつもつんけんしているのに、ツンデレ最高！だそうだ。実際ヤンデレなんだけど

そんなわけで、忙しい
分刻みなんて生ぬるい、秒刻みだ

お母さんは

「やめたいならやめていいよ？」

って言ってくれるけど。葉桜さん

「ほら、自分で稼げるようにならないと」

だそうです。なんで！？モデルで一生は無理ですよ？

「はい、本番始めます」

今から、撮影だ……気が、重すぎる

今日は、僕が剣道で試合をすればいいらしい
相手も、同年代のさいきよーな子を連れてきたみたいです

「はーい、始めました。桜華のさいきよー伝説！今日のお相手
はこの方！」

ばばーんという効果音と共に現れたのは

め・だ・か・さん？ほわっと？あいどんとのー！ぎぶみーへるぶー！
へるぶみー！

「黒神財閥の娘さん！黒神めだかちゃんだ！」

おーぱちぱちー

じゃねえよ！僕の命の危機が！今まさに！

「ふむ。貴様と戦えると聞いてやってきたぞ」

「いや、来なくてよかったんですけど？」

負ける気は、ない

勝つ気も、あんまりない

ようするに、どうしよう？

よし決めた！勝っちゃお！

僕から剣術とりあげたら精神破綻者しか残りませんし

本気には本気、全力には全力、死力には死力です

そして、愛には愛、憎しみにも愛です

二人で向き合う

観客席から

『めだかちゃんがんばれー！』

と、善吉君の声が聞こえた
僕も、がんばろつと

「始め！」

その合図とともに、めだかさん分身なう！？
ま、

『面』

パン

全部に攻撃をするっていう選択肢があるんですけどね？

別に本当に増えているわけではないのなら、攻撃点は一か所

最後まで待つて、相手が攻撃した瞬間に、相手より速く竹刀を振ればいいだけの事

つて、なんだ？このハイクオリティな六歳は？ま、いいんですけど

それに、めだかさん、剣道を本格的にやってるわけではないんだから、手ぐらい抜きますって

「い、一本！」

わああああああああ！！

歓声、慣れてないからなあ。すつごく恥ずかしい

「い、今のをスローモーションで確認しましょう」

解説の人、僕と葉桜さんが引退させた剣道家の人だ
元気そうだなによりです

めだかさんの方を見ると

硬直なう

ですね。

「た、たしかに、素晴らしき速さで、面を打っています」

当り前です。そこは急所ですから。打ち違えるはずがありません
外したら、死にますからね？そんなどじ踏みませんよ

「勝者、神城桜華！」

めだかさん、硬直なう

善吉くんも、硬直なう

スローモーションを見た人、硬直なう

めだかさんの分身にも驚いているが

そのすべての分身に、的確に面を打ちこんでるのにも驚いてるんだ

ろう

セフィロスさん万歳！

そんなこんなで、今日も異常に暮らしてます

そのあと

「桜華同い年！もう一度勝負だ！」

負けず嫌いな、めだかさんだった

余談ではあるが、めだかさん止めるのに大人が二十人がかりぐらい
だった

凄まじい………

5話：暇に暮らすな。平和に暮らせ（後書き）

セフィ能力あつたら異常いらなかったかもしんない

次回も宜しくお願いします

6話・サイコロ振って、振り回されて（前書き）

今回は、原作ぶち壊すぜ！

では、どつぞー！

6話：サイコロ振って、振り回されて

僕、小学校に入学しました。もちろん、葉桜さんも入学時は、お母さん泣いてたし、笑ってたし僕たちが異常でも普通に接してくれる、お母さん

異常にうれしくもなく、特別うれしくもなく

普通にうれしかった

小学校はめだかさ人たちとは別々だった

代わりに、飛沫さんと蛾ヶ丸くんと同じ学校に入学しました何か知らないけど、葉桜さんの飛沫さんに対する目が凄まじいレッツマリッジとか言いださなきゃいいんですけど

二人は、なんか特殊な能力を持っているとか何とか

飛沫さんは相手の傷口を抉る様な過負荷で

マイナス

蛾ヶ丸くんは、物理的精神的ショックを全て自分以外に押しつけることができるマイナスらしい

どんなチート！？ま、いいんだけど

そんなこんなで、仲良く？やってます

飛沫さんは、なんかこつちをちらちら見てはそつぱを向くし、蛾ヶ丸くんはゲームやってるけど

二人とも個性あふれる楽しい人です

時々、見境なく人を殴ろうとするのはよくないけど

殴ろうとする

←

僕、正宗なう

な感じで、毎日止めまくってる

それにしても、僕の異常って何だろ？

まさか、【セフィロト片翼の天使】とかじゃないだろうし
うん？わかんないや

「おい、桜華」

「ふえ？」

飛沫さんどした？そちらから話しかけるとは珍しいんジャマイカ？

「あのな？えつとお……」

もじもじするその姿！まさに萌神！ふっはっは「ヒュオン！」ひ
や！？

く、空間が、バツサリ……南無南無

「ど、どうした？」

おっかしいな？葉桜さん、今は仕事が入っていないはずなのに
いや、いないからといって他の女性に手を出すわけではないですけ
ど（小学生です）

「あたしたち、トモダチか？」

「うん？え？いや？え？逆に聞きますけど、トモダチじゃなかったと？酷く傷つくorz」

「いや、そういうわけじゃねーんだ」

うん？わっかんないやー。

「なら、いんだ」

いいらしいです。自己完結はだめですよ？とりあえず、周りに話してみよう

そんなこんなで、時は流れていった

僕、小学四年生になりました
え？はしよるなつて？僕は普通に過ごし過ぎてただけですよ？見ても絶対つまらないと思います

四年生になった時、なんかなんちゃら学園の理事長の不知火袴と言
う人がやってきた

なんか、教育方針がどうやらこうやらの話らしい

ok。現実逃避はやめよう

今、僕、葉桜さん、蛾ヶ丸くん、飛沫さん、理事長に召集なう
悪いことやってませんよ？いや、本当に（銃刀法違反）

「ははは。あなた方に来てもらったのはですね？昔、ある病院で異常を研究していたでしょう？」

ああ、あの怪談が似合うような廃病院になったところですか？いや、どうしてつぶれたんでしょうね？すごい技術建築だったように思えたんですけど
ん？飛沫さんと蛾ヶ丸くん、どしたんだ？

「あなた方は、そこで異常判定を受けている。ですよね？」

三人沈黙。ここは、大人な僕がww

「そうですね。それがどうかしましたか？」

少しだけ棘を混じらせて言う
理事長、にっこり

「私も、教育者としていろいろなことに興味があるのですよ」

理事長、悪どくにっこり
うわ、絶対黒幕顔だこりゃ

「ここに、八つサイコロがあります。これを同時に投げてもらえませんか？」

サイコロ八つって、どんな場合に使うんだよ……

あ、桃鉄で新幹線カード使ったときとか？いや、あれは何個だったかな？確かキングボンビーが（ry

っていうか、今さっきからなんか理事長の後ろからイタイほど視線

を感じる

よし、頑張って脅してみよう！

【コロスゾ】

ばたッ

よし、気絶させるのに成功
周りの皆にも少し被害被ったけど、まあいいとしよう
これで、落ちついて話ができる

飛沫さん投げ

←

蛾ヶ丸くん投げ

←

葉桜さんが今から投げる

「よっ」

綺麗なハート型が形成
まじでか！？

次、僕か

「投げますよー」

ポイっとな

カランカラカラカラ……ピタ……ピキ

「こ、これは……」

理事長、びっくり

僕もビックリ

サイコロが真ん中から綺麗に割れて、どれ一つとして目が出ていない
ようするに

「零、か………」

どうでもいいけど、すごいね？この世界の秩序

「もう、いいでしょうか？」

「え、ええ………」

用がなくなったらさっさと退散。これ、鉄則

まあ、余計なことに巻き込まれたいなら別ですけど

「ほら、三人とも？行きましょう」

すたこらっさっさーってね
そのとき、理事長がめっさあくどい笑みを浮かべていたのを気づかなかった

桜華達が去った後の待合室

「神城 桜華君ですか……まさに、逸材ですね」

「あひゃひゃ、そーお？」

袴の横には、水色の髪をした寸胴ボディの幼zyゲフン、少女がいた
ドーナッツを五本指全てに差して瞬時に食べるのを繰り返している
この身体のどこに、そんな体積が収まるのか、不思議でしょうがない

「袖ちゃん。どんな印象を受けましたか？」

「ん？普通の男の子なんじゃない？異常なのは、違いないけど。普通に異常だよ」

「普通、ですか……」

「あひゃひゃ！そんな区切り、無意味だけどね」

ただ、と付け加える不知火

「あの男の子とハート出した女の子は、なんか普通ではないような気がするんだよね」

「まあ、何はともあれ、立派な収穫ですね。さ、帰りましょうか？」

「そーだねー」

あひゃひゃと笑い、袴と共に学校から去った

6話：サイコロ振って、振り回されて（後書き）

すでに、しづきーがなんかキャラちがくね？

蛾ヶ丸くん喋ってないし

いつから蛾ヶ丸くんは原作みたいに饒舌に話したすんだ！

そんな感じの一話でした

最後の不知火ちゃんの登場は断言します。無意味です

今後のストーリー展開に何ら関係はないです

では、感想待ってます

次回も、よろしくおねがいします！

7話：なんだ？これ？（前書き）

なんだ？これ？な一話です

では、どうぞ！

7話：なんだ？これ？

みなさんは、2月の14日という日をご存じだろうか？

リア充にとっては天国極楽パラダイス

作者の様な人間には、ただの無限地獄な日である

ようするに、バレンタインデーである

恋人が恋人に日ごろの愛を伝える日

今年は彼氏持ちを目指す女子がやけに張り切る日である

それは、小学生でも例外なく適用され、人気の男子には甘い匂いが
ぷんぷんするわけである

そうでない男子もやけにそわそわし、もしかしたら？な幻想を抱い
てみごとにたたき壊される日
地獄である

そこに、桜華君である

モデルやってる桜華くんがもてないわけがない

「桜華きゅん！」

「チヨコ受け取ってー！」

「はあはあ、○×小学校の女子は化け物か!？」

既に放課後になって一時間は経過している
ちなみに、蛾ヶ丸くんは何人かにチヨコもらってた

理由は可愛いからだそうだ

無表情だったけど

嬉しい感情も相手になすりつけているんだろうか？

「と、とりあえず、逃げないと」

どうしてチヨコを受け取らないのかって？約束、いや、契約おじされた
んですよ

もちろん、葉桜さんに。

「私が最初に渡したいので、渡されないでくださいね？もし渡されてしまったら、殺して解して並べて揃えて晒して、ミンチにしてスライスにして活けづくってペーストにして三枚おろしにして肉団子にして鼠の餌にしてあげますから。あ、気にしないでください？あなたのことはなく渡した方の事ですから！去年はなんだかんだで忙しくて渡せませんでした、今年は私の『愛』をたっぷりこめますので、期待しててください！あれ？どうしてそんなに青ざめた顔をしているんですか？まさか、すでに渡されている!？そんなことありませんよね？ね？そんな空前絶後荒唐無稽なことないです

よね？私以外のチョコレートを受け取るなんてないですよ？ああ、
だめです。どんどんネガティブな思考になってしまいます。こんな
に病んでしまうほど愛しているのに！はやく、大人になって既成事
実を作って桜華さんを一人占めしたいです。ね？桜華さんも私の事
一人占めしたいですよ？レッツマリッジ！」

久々のヤンデレ全開だった

いや、過^{マイナス}負荷を得てから、いや、失ってからシャレになってません
からね？

僕は見た！葉桜さんがおろし金を使わずに大根をおろしているのを！
金気がうつっていなく、ぐちゃぐちゃになっていなかったので恐ろ
しく美味しかったけど

葉桜さん、料理うまいんだよなー。鼻屑目なしで
普通じゃなく、異常にうまい
過負荷を利用しているあたりがまたすごい

まあ、そんなわけで逃走中なんです
リアル鬼ごっこ？生ぬるいな
リアル修羅ごっこ……あれ？すべった？

「桜華くん！みっつけ！」

『きやゝ、桜華くゝん！』

何故だ！？僕はただ生き延びたいだけなのに！
それに周りの気配に完璧に同調しているのに見抜かれるって何事だ
よ！

(ふ、桜華よ)

(その声は、アウストラロピテクス!?)

(そうじゃ)

(そうなのかよ!?)

(一つ助言を与えよう)

(ここを切り抜けるための?)

(ポケモンのサトシは無闇にフラグを乱立しすぎている)

(しるか!)

それがどうしたってんだよ!?!ここを切り抜けるヒントが隠されているとでも?

そうですよね。無駄にアウストラロピテクスが話しかけてくるわけ……ある

(ふぁ、ところで飯はいつかの?)

(今さっき食べたでしょおじいちゃん)

(そうか、おやすみ)

（おやすみ）

もう、あてにするのはやめよう
って、アウストラロピテクスって誰だ？

「あわてず、あせらず、あきらめず、レッツエスケープ！」

無駄な考えはやめて、逃げよう
数分ほど本気でかけずり回っていると
まだ帰っていなかったのか、蛾ヶ丸くんを姿を視認した

「おk。蛾ヶ丸くん。一緒に帰ろう」

「いいですね。帰りましょう」

このまま学校にいたって寿命が縮むだけだ
って、久しぶりに蛾ヶ丸くんの声を聞いた気がする
って、なんで今まで帰らなかったんだろう？え？作者の都合？知る
か！？

まあ、そんなこんなで校門に向かって歩いて行くと

「びりーぶ、俺お前びりーぶ、それってとうるーす………あ
り？」

「飛沫さんですね」

校門にはよりかかっている飛沫さんの姿が

カッコいいと思った僕はなさけないだろうか？小学生の立ち姿がカッコイイと思った僕は情けないでしょうか？

「おい、これ」

僕と蛾ヶ丸くんに差し出されたちっちゃな小包
なにやら、ビターなおいがる

「これって、チョコですか？」

「み、見たら分かんたろ！」

そ、そんなに顔真っ赤にして怒らなくても

「と、トモチヨコだからな！勘違いすんじゃないぞ！」

「有難く受けとります」

「ありがとうございます」

二人でぺこりと頭を下げる

あ、受けとってまったあゝ、とつつあゝん！これぐらい見逃してく
「くく、くくくくくく、くははははははははははははああ！いい
だろう！ならば戦争だあああああああ！！」

ぽとりとおかれた桜華に渡されたチヨコには

手作り感マックスのチョコにホワイトチョコレートでそう書かれてあつた

「ふ、ふん！トモチヨコだからな！勘違いすんじゃないぞーぞー！」

誰に言ってるの？しぶきー？

7話：なんだ？これ？（後書き）

シンデレ？しぶきー！やっほっ可愛いぜい！

次回も宜しく願います！

8話・泣いてください（前書き）

では、どうぞー！

8話：泣いてください

ぽーっと空を見上げる。あ、僕六年生になりました。
身長も伸びて、ほんと満喫してます。

今日は仕事もないし学校も休みだし、平和に暮らしてます

「桜華さん！遊びましょうよー！」

訂正、たった今家族三人で遊園地に来てます

たしか、my storyランドだったっけ？日曜日なので人でぐ
つちやぐちゃになっている

あ、余談ですが、僕の異常少しかめました

「何乗りますか？」

葉桜さんすっごいワクワクしてます

僕もよく考えたら遊園地なんて修学旅行以外行った事ない
なので結構ワクワクしている

「じゃ、アレ乗りましょう？」

ジェットコースターを指さしながら僕の手をぎゅっと握る葉桜さん
ああ、僕このまま死んでしまっても悔い残らないかも……

「笑っちゃうほどの、幸せですよね……」

思わず笑みがこぼれちゃうほどの幸せ
なんか知らないけど、笑っちゃうんだよなあ

「そういえばここのジェットコースター、世界で最速らしいですよ?。」

「え?。」

「心臓発作を起こして亡くなった方がいるとかいないとか」

いや、そんなことが起こったら普通に閉鎖されてるでしょう? 経営者が作者? なんてことだ!?

「あゝあゝあゝあゝあゝ!!?。」

乗った瞬間意識が飛ぶかと思った

横では葉桜さんが楽しそうに笑ってるから男として見栄を張らない訳にもいかず、頑張ってひきつった笑みを浮かべてた
そのあとトイレでひそかに泣きながら吐いた
乗り物酔いしやすいんですよ僕は
トイレから戻ると

「うちの葉桜を返してもらえますか?。」

見たことがない男女と、すごいおびえている葉桜さんが
どうしたんだろう? ヤンキーか?

「勝手なことを言わないでください! この子はもう私の子供です
! 勝手に見捨てて今更よく顔が見せれましたね?。」

僕、状況把握苦手なんだよな。

「な? 葉桜もうちに戻りたいよな? もうあんなひどいことしない

から、戻っておいで」

なるほど流石に状況把握できた

僕が見たら咄嗟に殺したくなる候補ナンバーワンの方々だ
ようするに、葉桜さんの両親

「なにか、用ですか？」

「ん？君は？」

.....

「なにか、用ですか？」

「この子の、父親だよ」

「帰れ」

「なにをいって」殺されなくなったら帰れ」

睨む。殺す殺す殺す殺す殺す

刺して切って殴って打って蹴って斬って落として吊って撃って

コロシテコロシテコロシテコロシテコロシテコロシテ

殺しつくしてしまいそうだ

「二次被害としてあなた方の親族やらなんやら全滅するかもしれません。あ、葉桜さんは別ですよ？あなた方と同じにしないでください。要するに禍根を断つんですよ。面白いぐらい消えてなくなり

ますよ？ほんと全部なかったことになりますから。うん、気にしないでください。あなた方が消えたところで大した騒動にもなりませんよ。だから安心して下さい、あなた方は立派な背景モブキャラとして死ぬことが出来るんです。どうですか最高でしょう？死にたくなかったらさっさと目の前から消えろって言っただよ、このクソカスが。てめーらなんていねえほうがいいんだよ。葉桜さんを傷つける？お前らにそんな権利はない。あんたらの存在が葉桜さんを傷つけるというのなら喜んで笑いながら拷問をして最後に慈悲として殺してやる。だから、殺されなくなったら僕と葉桜さんとお母さん、この家族の前、いや、半径二百キロ以内にその存在を現わすな」

「……チツ……おい、行くぞ」

あのクソカス、舌打ちしやがった

それにしても僕こんなキャラだったか？いけないいけない

「葉桜さん、あの人たちのところに居たかったのだとしても、僕はあなたの意見を無視してここに引き留めます。何をしてでもです」

おっとお、僕ついに病みだしたか？

今ならヤンデレにもなれそう

「……何を言ってるんですか？あの人たちのところに戻りたいなんて思いませんよ」

にこやかにほほ笑みながら気丈にそういう葉桜さん
目が、泳いでる

「葉桜？少しの間、気をつけなさい？お母さんの仕事の経験上、あーゆー目をした人間はなににするか分からないわよ？」

「大丈夫です。一般の人に簡単にとらえられる私じゃないです。私を捉えられるのは桜華さんだけです」

「そうですか……………よし！遊びましょう！」

今度は僕が葉桜さんの手を握って引っ張っていく
プニプにしてて気持ちがいい

「あゝら？ラブラブね？お兄ちゃん？」

あ、そっか。葉桜さん、僕の妹になってる

「……………」

なにか考え込みだす葉桜さん

「桜華さんはこういうの趣味じゃないかもしれないけど…………お兄ちゃん！だ〜いすき！」

だきっ

……………

「僕、死んでもいい……ぼふん」

僕の思考、ブラックアウト

心の中に、葉桜さんの愛がしみわたる。恐るべし、妹キャラ

「よし、桜華さんに妹キャラは効果抜群と。猫耳を装着して今度
検証してみよう」

なに！？そんなことしたら僕の血液が足りなくなる！

「ふふふ」

「くすくす」

「フフッ」

家族三人で笑い合う

こんな幸せは、少しの間、崩壊させられた

みなさんは人身売買を知っているだろうか？

外法中の外法だ。そして葉桜さんのその値段

あの両親、最初は葉桜さんを使って、モデルで儲けた金で遊ぶつもりだったのだろう

けど、失敗した。だから……………

葉桜さんを、誘拐した

モデルの仕事帰りのところを数人の人間が現れて、襲ってきたそうだし、そのどれもが、特異な能力を有していたそうだし、ようするに、異常、か

葉桜さんを、売るつもりなんだろう

なんで？僕たちは幸せに暮らしたいのに

なんで？僕たちはちゃんと暮らしていたのに

お母さんは泣いた

僕も泣いた

葉桜さんは、絶望過ぎて笑っちゃってるかもしれない

クロス

【あ^ぜあ、無情】

言ったよな？根絶やしにするって

言葉の重み、感じるよ？

発見。現在地東京。裏新宿
周りを数十名の人間で囲んでいる、そう、僕の過^{マイナス}負荷で分かる
取引の最中だ

「僕が言つた事、憶えてますか？」

「な！？お、お前は。や、雇つたんだ！さつさと働け」
数十人の人間、この際人間だろうとなんだろうと関係ない
等しく、平等に、皆殺しだ

「最初は、殺さないよ？殺さない。ちゃんと恐怖と絶望で笑わせ
てから殺してやる」

安心しろ。約束は護る

「ガキが！死ね！」

おおよそ人間が体現できる限界の速さなのだろうスピードで突っ込んで来る人間^{カス}

ズバンッ

絶対に人を殺さない絶対的な攻撃力を持つ程度の能力

ようするに、心臓を刺そうが、頭を刺そうが、絶対に死なない
現状は人間^{カスども}が地面に這いつくばってる
こいつらよりも先に、殺しつくさないと

「ひ、ヒイ！？ば、化け物めえ！」

「化け物？違うよ……………人外だ」

圧倒的苦しみを死んだ後も永遠に転生後も与え続ける程度の能力

「ぐ、ぐがあああああああああ！？」

苦しみもだえる、両親^{カスども}
まだ、甘い

手を刺す、足を刺す、頭を刺す、胸を刺す、刺していないところがないってぐらい刺しまくる
原形を保っていない。それでも死んでいない
これぐらいで、これぐらいで、これぐらいで

死ねると思うな？

拷問と攻め句を朝まで続けた結果。精神的に死んだ
よだれを垂れ流す口が元あった場所から、唾液がこぼれおちる
涙が出る場所は、どこへやら

脳みそは頭がい骨から所々は見出し、脳髄はこぼれ出している

「葉桜さん……」

倉庫の中で、震えている葉桜さん
笑っている。笑いながらつぶやいている
所々聞こえる僕の名前

「葉桜さん……」

「……………ぶつぶつ……………ぶつぶつ……………」

「葉桜さん、僕はここに居ます。だから、泣いてください……………」

「桜華……………さん……………私、もう」

涙がこぼれおちる。綺麗な涙だ

「もう、絶対に一人にしません。だから、今は笑わず、泣いてください……………僕も、泣きます」

「うう、うわああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

そのあと、普通に家に帰り、お母さんとも泣けた

僕の、過^{マイナス}負荷が覚醒した瞬間だった

8話：泣いてください（後書き）

感想お待ちしております

閑話：お母さんの日記²（前書き）

日記です

こんな感じで話がたまると書いてきます

では、どうぞ！

閑話：お母さんの日記²

○月×日

葉桜がどんどん可愛くなっていく

桜華がどんどんカッコよくなっていく

そんな二人も今ではうちの会社の看板モデル

二人がモデル稼業を初めて、ビックリするぐらい売り上げが上がった

黒神財閥と肩を並べれるぐらいに

そんなことはどうでもいいとして、ヤバイマジでヤバイ。

二人が可愛すぎる

気を抜くと食べちゃいそう[♪]

○月 日

二人に友達ができた

飛沫ちゃんと蛾ヶ丸くんだよね

またこの二人がビックリするぐらい可愛くて[♪]

会った時の事を聞くと

「釘バットで殴られて友達になりました」

釘バット？はは、面白いジョークだね？

「その釘バットがばらばらに……」

うん？どうしたんだろうね？怯えちゃって

月○日

今日は桜華のテレビ番組「桜華のさいきょー伝説」

私が来ていると知って緊張しちやいけなからお忍び♪

今日の対戦相手は、さいきょーな女の子らしい

葉桜？そう思っていたらめだかちゃん登場

なるほど。可愛いけど、葉桜の方が可愛いわね！

そう思っていると善吉くんも来てるみたい。可愛いな♪

試合が始まるとめだかちゃんが分身

既に剣道じゃない

けど、なんかわからないうちに一本取られてて

リプレイをスーパースローモーションで見ると

桜華が分身全部に面を放っていた

あれ？桜華動いてた？

それにしてもハイクオリティな五歳児ね

そのあとめだかちゃんが大人二十人がかりで止められてた

めだかちゃん、恐ろしい子！

月×日

我が子、小学校に入学する

思わず泣いちゃって、二人に笑われちゃって

ほんと、嬉しかった

ランドセル背負ってる二人はほんと食べちゃいたいぐらい可愛くて
え

飛沫ちゃんと蛾ヶ丸くんも同じ学校みたい

めだかちゃんと善吉くんは少し離れた小学校みたい

何はともあれ、おめでとう！

×月○日

今日はバレンタインデー

葉桜が今年こそは渡すと息巻いていた

前日に飛沫ちゃんから

「ちよ、チョコの作り方教えてください」

って、慣れてない敬語を頑張って使って頼んできました

チョコをぶっかけてそのまま食べちゃいそうになった」

完成した時、ホワイトチョコで『食べ』って書いてたけど。それも方っばだけに

桜華も愛されてるわね。このままハーレム形成かしら？

その時は一人か二人借りちゃお」

×月□日

今日は世界的に影響力のある不知火財閥から、黒服の人たちが何人か来た

二人を預からせてほしいとのこと

知っている。世界的研究・フラスコ計画

それに参加させるつもりなんだろう

そのままお帰り願った

うちの子供は研究させるものじゃない

異常だとかなんだとかそんなのに縛られてるから、弱いんだよ

人間だよ？人間ってのはもっとすごいもん持ってたんだよ！つとお失礼

□月○日

今日は、遊園地に行った

二人とも今年で小学校は最後

思い出を作りに行った

そこで葉桜の両親と名乗る者が現れた

二人を見た瞬間葉桜が震えだした

その時桜華がトイレから戻ってきて

「二次被害としてあなた方の親族やらなんやら全滅するかもしれません。あ、葉桜さんは別ですよ？あなた方と同じにしないでください。要するに禍根を断つんですよ。面白いぐらい消えてなくなりますよ？ほんと全部なかったことになりますから。うん、気にしないでください。あなた方が消えたところで大した騒動にもなりませんよ。だから安心して下さい、あなた方は立派な背景として死ぬこと

モブキャラ

ができるんです。どうですか最高でしょう？死にたくなかったらさっさと目の前から消えろって言ってたよ、このクソカスが。てめーらなんていねえほうがいいんだよ。葉桜さんを傷つける？お前らにそんな権利はない。あんたらの存在が葉桜さんを傷つけるというのなら喜んで笑いながら拷問をして最後に慈悲として殺してやる。だから、殺されなくなったら僕と葉桜さんとお母さん、この家族の前、いや、半径二百キロ以内にその存在を現わすな」

有り得ないぐらいの冷たい目で二人を睨みながら、冗談じゃない殺気を放ちながら言った

もし、あと少し二人が渋っていたら、二人がどうなっていたのか分からない

その時の二人の眼が気になったけど、杞憂だろう

少し葉桜に注意を促して

そのあとたつぷりと楽しんだ

今日も楽しかったなあ！

□月×日

葉桜が誘拐された

もっと、もっと注意しておけばよかった

桜華も泣いていた

葉桜は絶望的すぎて笑っちゃってるかもしれない

こんなときに、私が超能力者だったらと思う

そんなことはない。ただのノーマルな私は

祈るだけ

葉桜

□月 日

葉桜が戻ってきた

桜華は血まみれだった

そんなことどうでもいい

戻ってきた我が子

愛しいわが子

血は繋がっていなくとも

血以上の愛を注いだ

この子たちと一緒に居られるなら悪魔にでも魂を売る

その悪魔が桜華だったのかもしれない

桜華が助けてくれたそうだ

その時少しやり過ぎちゃったと言っていたけど

そんなことはない。我が子を傷つける奴に手加減は無用

ただ一言

『おかえり』

「さうってとお！今日も楽しかったなあ！」

私の、愛しい子

ずっと、一緒だよ？

閑話：お母さんの日記2（後書き）

どうでしたか？しぶきーがお母さんにチョコの作り方聞いてたんで
すね？驚きです

桜華ちゃんと葉桜さんのいるところに母あり（キリッ

では、次回も宜しく願います

9 話：大嘘憑き（前書き）

お久しぶりです

では、どうぞ！

9 話：大嘘憑き

僕が中学校に入学する少し前の春休み

「桜華、もうすぐ中学生だな」

僕と葉桜さん、飛沫さんと蛾ヶ丸くんが空を見上げながら話す
飛沫さん、小学生らしからぬ……いや、なんでもないです
ただ、葉桜さんの妬みの視線が痛いほど突き刺さっているとだけ言
っておきます

「なあ、お前らはあたしといて楽しかったか？」

「逆に聞きましょう。楽しくなかったですか？」

「いや……多分だけど、楽しかったな」

そう言いながら笑ってくれる飛沫さん

蛾ヶ丸くんも少しながら笑っている

葉桜さんがいて、飛沫さんがいて、蛾ヶ丸くんがいて、そして僕が
いる

なんだか、思い出すとあったかい感じになる

最初は、釘バットでドスツなものな

ビックリしましたよ。ほんと、正宗がいつの間にかあるし

「……よし！帰るか！」

パンツと手を叩いてその場をまとめる飛沫さん
その姿はどこか寂しそうで、黒々しいものを何故か感じた

蛾ヶ丸くんも最近は元気がない

「じゃあな？二人とも」

「さようなら」

二人が手を振る。こちらも振り返す

この時二人が、またな、と言わなかったことに気づくべきだったのかもしれない

二人は、中学校入学する直前にどこかに消えてしまった。

お母さんが全力で、財閥の力を使って捜査したが、影も形もなかった蒸発してしまった。ちゃんとさよならぐらい言わせてほしかったけど、また会える事を願いながら、普通に中学に進んだ。

中学ではめだかさんたちと同じ中学になった

久しぶりに見ためだかさんはおかつぱ頭からツインテールになっていた

けど、善吉くんの姿が見えない

まさか、中学デビューでも狙っているのかな？

「桜華同級生。葉桜同級生。久しぶりだな」

「お久しぶりです、めだかさん」

「……胸、おつきい……」

おお！？猛烈な病気が！いや、今度はレベルを超えて瘴気が！

「葉桜さん。落ちついて。そうそう、すってーはいてー」

「ひっひっふー……お、桜華さん！産まれそうです！」

「違うでしょうが。まあ、落ちつけてよかったです」

「相変わらず仲睦まじいようだな？」

「ええ！それはもう！」

断言できる！僕と葉桜さん、一生のうち一生全てが絶頂期であると！

「それは何よりだ。では、私は馬鹿を探しに行ってくるからまたな」

「はい、また」

「……今度は、胸を分けて……」

こら！手を伸ばさない！

「む？葉桜同級生は胸の事で悩んでおるのか？ならば、揉むとよ

いらしいぞ！」

「……………え？そこ、親指をグツて立てて言うところなのだろうか？
そんなこんなで、凄まじい速さ、新幹線も青ざめそうな加速で消え
ていくめだかさ
ほんと、いろんな意味で凄まじいな。普通あんなこと臆面もなく言
えるかな？」

「桜華さん？揉むといいらしいですよ？」

「へ、へ、そんなんですか。すごい発見ですね」

「さらに男性に揉んでもらうとさらにいいらしいです」

僕の耳腐ったらしい。言っていないよね？僕の耳腐っていないよね？

「では、今夜部屋で待つてまゝす」

「ダメ！絶対！不純異性交遊ダメ絶対！」

まだ中一ですよ？その、まだロリータと呼ばれる時期で、愛でて
もいいが手を出すなど言われている時期なのですよ！
一線を越えるような人ではなかくです！

「え」

ブーたれてもだめです。

「分かりましたよ。なら私の胸で桜華さんの手を揉みますので」

「うん？ああ、僕たちと同じ病院に通っていた、球磨川 楔くんです。只今、受験生の中学三年生だと思われます」

『よく知ってるな』

『もしかしてストーカー？』

『そんなわけではないか』

『僕じゃあるまいし』

「球磨川君はストーカー！？マジでか！」

『あはっ！』

『うっそでーす』

『それと僕は楔じゃない』

『双子の弟の雪ユキだよ』

「マジでか！って、さっき自分でみっちーと呼んでよって言うってし」

『あはっ』

『ばれちゃあしょうがないねー』

「ばればれですよー」

話してて楽しいな。この人は

『じゃ、僕は新入生の取り締まりに行ってくるからねー』

『バイバイ』

『神城 桜華くん』

「はい、また」

そのままゆつくりと普通の足取りで去っていったけど、周りの人がやけに球磨川君を避けていたのは気のせいだろうか？

気のせいではなさそうですね

「ん？どうしたんですか？葉桜さん？」

「あの人、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないですね」

大丈夫が大丈夫じゃないかと聞かれれば、絶対に大丈夫じゃない大丈夫じゃないとしても、避ける理由にはならないんですよそれに、僕だって ヒトゴロシ なんですから。嫌われる理由はあるっても、本当は好かれる理由なんて微塵もないんですよ。この世界では ヒトゴロシ はどんな理由があってもですね？

やめておこうかな。言っただって、意味がないし

僕の罪が消えるわけでもない。ま、消えて欲しいとも思っただけだね

「信用は、まあ、できないでしょうけど。信用してあげることができますよ」

嘘憑きさんですからね。それ以外はお茶目な中学三年生ですよ。ジャンプ愛読者のね

「まあ、そんなこんなで中学生生活スタートです」

「青春ですね！」

「僕たちは一生青春ですよ。絶対」

「ふふ。さ、教室行きましょう？」

中学校は普通に入学できた。あとは、普通に暮らせるかどうかですよねー

ま、できそうにもないけどね！

9 話：大嘘憑き（後書き）

どうでしたか？ここは、めだかさんと一緒の中学に入ってもらいました

ま、作者の力量不足で書けなくなったら転校してもらうんですけど
ww

さてはて。桜華くんは球磨川君の凶行に対してどんな風なアクションを取るのか

作者にも分かりませんよー

では、次回も宜しくお願いします

10話：破壊臣（前書き）

お久しぶりですからのすみませんでした

では、どうぞー！

10話：破壊臣

中学と言えば部活！部活と言えば中学だあああああ！

そんな感じで剣道部に入部。モデルの仕事も続行するので大忙し。そもそも、この忙しさを生活が成り立っているのが逆に恐ろしい。

授業各種が終わり、いよいよ部活動の時間。

葉桜さんも入ってますよ？時々葉桜さんを見てにやにやしている人がいるので、その時は

【O H A N A S H I】

しているんですけどね？それ以外はいたって健全な中学生です。

それをやっている時点で健全じゃないと？いやいや、嫉妬するのも中学生の性ですよ。

「桜華さん！勝負だああ！」

ニコニコしながらやってくる葉桜さん。なるほど、じゃれあいをお望みか！

喜んで受けて立とう！

剣道はルールのなかですからね。それなりに動きが阻害されるんですよ。

たとえば、背後から攻撃するのはずいとか。竹刀を素手で受け止めてはいけないとか。

竹刀をたたき折ったらお前は化け物かと言われるし。逆に竹刀をすっぱり切ったらいいのかと思ったら、全然違うし。そこらへんになれるのが大変でした。

あ、それと。審判の人が見えない速さで面とか打つても、判定がつかない。

ちゃんと打った筈なのに。けど、大体その時は相手が気絶しているんですけどなんででしょう？

ま、不戦勝扱いですけど、勝ち勝ちですよ？

それから、一通り打ち合うと

「ダメだあ。全然攻撃が当たらない」

葉桜さんギブアップww

いや、こちらからは攻撃しないで葉桜さんの雄姿を視かnゲフンモとい、観察していたわけですよ

いやはや、可愛い可愛い。畳の上で大の字になって寝ていますよ。

「……………桜華さん」

「なんですか？」

「部員、入るといいですね」

「そうですね」

最初に言った入部というのは少し語弊がある。

語弊というより、説明不足。僕たちが創部して、入部したんだ。

けど、ね。剣道やりたい人が剣道部ないところに入学するはず無いよね。

「最低八人！男子四人、女子四人です！明日から、頑張りましょ

う！」

「はい！」

ニツコリ笑って敬礼する葉桜さん。

ガラッ

ん？誰だ？あの金髪ロン毛のイケメンは？

そのまま黙々と僕の方に。ああ、なるほど！入部したいて

ガスッガッガッ

「……………な、んで？」

僕、鉄パイプで殴られるようなことしたっけ？ああ、いてゝ

「はい、終わり」

「…………ダレダ。桜華サンヲ、傷ツケタノハ……………」

ヤッバ！？葉桜さん久々にトランスモード。ちょ、手袋外すのはやめい！

「葉桜さん。これぐらい、猪が振るう斧に比べれば何でもありません」

「…………そう、ですか」

目に精気が宿る。うんうん、虚ろな目も可愛いですけど、この可愛

いくりつとした眼もいいですね」

「壊しそこねたか。まあ、また壊せばいいだけだ」

「クス。面白いと言いますね？僕、自分では壊れるんですけど、他人からは壊されませんよ？」

ああ思い出した。球磨川君支配下時代の阿久根 高貴先輩ですね。たしか、仇名は破壊臣。

「うーん。球磨川君の気まぐれかな？」

歯にはドリルを。気まぐれには悪意を持って。

まあ、これは敵に対してですけど。

「さうて？やりますか？引きますか？殺されますか？晒されますか？裂かれますか？」

葉桜さんにやめるとかいつといて僕も大概だつたりするww
理不尽は許せるものじゃないんですよ。我慢は出来るけど。あ、これ前にも言ってたわ。

「……フンッ」

おお。退いてくれた退いてくれた。ラッキーですね。

「桜華さん。痛い痛いのとんでけーのちゅーをしてあげますね？」

「……………」

いや。無言と言つのはおkという意味じゃ……………なくもないんですけど

「チュッ」

あ……………

「へへへ」。続きはウェブで」

続きて！？いや、気にならなくもないけど

いや、僕の方が背が高くて葉桜さんのうるんだ目での上目遣いが可愛かったからです！

ほんとですから！可愛いチートは正義！世の中の常識だ！さらに言つと葉桜さんは存在可愛い。

「けど、ほんとに頭大丈夫ですか？」

「え？」

「あ、いや、そっちの方ではなく、外傷の方の意味で」

「あ、ああ。そ、そうですか」

やばい、一瞬地獄に落ちたかと思った。

「大丈夫です。葉桜さんの笑顔のお陰で吹っ飛びましたよ」

僕ってホントにバカップルww

「やゝだも」

照れながら素手でパシン……

ブシユウ

「ぶしゅ」

背中がブシユ。血が、ブシユ

「ひゃ、ひゃわわ！？だ、大丈夫ですか！？」

ピシャ

あ、葉桜さんが、血を浴びちゃった

「……ふ、ふふふふふふふふふ。どこかにいい獲物はいないかな。ばらばら。肉団子。スライスミンチ、ペースト。ふふふふふふふふふふ」

強制ヤンデレ化……。春咲 葉桜の真骨頂『ヤンデレ』。何のひねりもないですね。

それとも『鬼デレ』？うん。血を浴びるところなっちゃうのは治ってないみたいですね。

いや、これはこれで可愛いんですけど。

「はい。大丈夫ですからね」

「はれ？私、なにを？」

可愛らしく首をかしげて僕のOPは0おつかほいんと近いよ！

「大丈夫ですよ。何も無かったですから」

あの状態で他人を見たら、敵味方友達関係なく、僕以外だと血祭りに上げようとするからな」。

ちなみに、僕の血だと葉桜さんの戦闘能力が飛躍的にアップするww

「うゝん。今日はもう帰りましょうか？」

「そうですね。何故かしらないけど、桜華さんの傷が増えてるよ
うな気がしないでもないですから」

やっぱり、前後の記憶が……。

「かえろゝかえろゝかえりましょ」

そんな馬鹿な言葉を残してその場を後にした

阿久根side

なんだ？こいつは？全然壊しやすそうじゃないか。

球磨川さんも

『桜華ちゃんと会ってみなよ』

『面白い子だから』

『きつと、高貴くんを■■てくれるよ』

最後のは聞き取れなかったが、まあ別に支障はなかった

手に持った鉄パイプで殴りつける

はい終了。今回もすぐに終わった

「……ダレダ。桜華サンヲ、傷ツケタノハ……………」

横にいた女がゆらりとこちらに歩み寄ってくる

問題はない。こちらも壊せばいいだけの話だ

「葉桜さん。これぐらい、猪が振るう斧に比べれば何でもありません」

男がゆらりと立ち上がって女を止める。これぐらいと言われるのは、少しいらったきたがまあ、問題ない

「壊しそこねたか。まあ、また壊せばいいだけだ」

「クス。面白いこと言いますね？僕、自分では壊れるんですけど、他人からは壊されませんよ？」

不敵に笑う

「うーん。球磨川君の気まぐれかな？」

球磨川さんを知っている？

とにかくこいつは……ヤバイ……

今さっき殴りつけた傷が既になおっている

「さうて？やりますか？引きますか？殺されますか？晒されますか？裂かれますか？」

冗談じゃない、と思ったが、それもいいかもしれない。俺には、何も無いから。

少し疲れてきたところだ。命令されるがままに壊すのは疲れてきた

「……フンッ」

とりあえずは撤退だ。

球磨川さんの言った事が思い出される

『きつと、高貴くんを■■てくれるよ』

『きつと、高貴くんを“壊し”てくれるよ』

フン。どうでもいいよ。俺には、な。

10話：破壊臣（後書き）

どうでしたでしょうか？

球磨川君、気まぐれを出してみました

あとどれくらいで本編に入れる？よく分かんなくなってきた

まあ、だらだらと続けていききたいと思いますが

よろしくおねがいします！

11話：人攫い、奴隷商、ついでに貴女（前書き）

めだかを読みながらの執筆になりました

桜華くん、歴史的敗北です（マジ話）

では、どうぞ！

11話：人攫い、奴隷商、ついでに貴女

よし！部員集めるぞ！

午後の授業も終わり、今からさて部活！それよりもまず、部員集めが先だった。

けど、今からだとの生徒も部活に入ってるよな。ああ、団体戦とかしてみたいよな。

そんなことをぶつくさと言いながら、部員集めのために歩きまわっている。

あれ？ここ、どこだ？気がつくで見知らぬところについていた。
まいったな、ここでスキル『ロストマン迷い人』発動しちゃったか。
いや、学校内で迷うとはこれいかに。

「どうしよう？とりあえず、どうしよう？」

こういうときは、どうしよう？じっと佇んでおくかな？動くとな度は南極とか行ってしまうそうだし。へたしたら、地獄への直通便に……。

「ん？君は？」

「ん？だれですか？」

僕の前にいきなり現れたのは、誰でもなじみやすそうで、誰からも一線を引かれてそうで、誰からも一番遠そうな、美人の女性だった。僕の勘が言っている、この人はヤバイ。

「ああ。現生徒会長を補佐してる、副会長の安心院あじむなじみだよ」

なんともまあ、安心させられる名前だな。

「では、先輩ですね？僕は神城 桜華です」

「……へえ。君が、ね」

君が、とは？

「いや、生徒会長が君の事を言ってたよ。『僕に友達になろうって言ってきたのはあの子が初めてだ』ってね」

うん？えっと、ああ、球磨川君か。え？生徒会長？そうだったわけ？もっ、遙かなる過去においてきたからね原作知識は。名前ぐらいしか覚えてませんよ。

「へえ。ふうん」

こちらをジロジロ観察しだす安心院さん。

「君は、特殊だね？凄まじいほどの異常と過負荷だ」

「ッ!？」

この人、なんだ？本当に、人間か？いや、僕も人の事言えた義理ではないけど。

「相互作用と程度の能力ね？随分と、おぞましいものを体なかみに飼ってるみたいだ」

「……おぞましいとは、酷い言い草ですね？僕の嫌いな人種が増えましたよ。人攫いと、奴隷商と、ついでに貴女です」

ベギゴギゴギッ

体中の骨が碎ける音がした。既に痛みを消している。

「うん。これからも球磨川君と仲良くしてやってくれよ？」

「は、はは……。貴女に言われなくても、ね」

「またね？」

そう言つて手を振りながら去っていく。なんだ？あの人。ああもう、骨がバキバキじゃないか。

とりあえず、ケアルガをかけて、と。リユニオンでもしとくかな。回復能力が爆発的に上がるし。

そうして、額に手をあて右手を横に振る。すると、漆黒の大翼が右肩だけから出てきた。

「ああ。負けちゃったか」

くそ、もう。歴史的敗北だよこれは。気づいたら体中の骨が砕けてんだから。僕もうびっくり。

「ああ、とりあえず、寝よつかな」

エネルギー消費が異常に高いこの状態。今、昼過ぎということもあってかなり眠い。

はあ、負けちゃったよ。どうしようかね。まあ、負けた気はさらさらしないんだけどね。

「次、殺せばいいだけの話ですよ」

今度僕に対して危害を、いや、僕の周りに対して危害を加えようとするなら、もう、惨殺してやる。

「ふつ。殺してバラして並べて揃えて晒してやんよ」

零崎、言っちゃった。今、999万9999人だから、栄えある1000万人目だね？嘘だけでも。ああ、思考回路回らないや。けど、

もうすぐで一千万なのは、本当だよね？

「最初から回ってないとか、言わないで」

ヤバいな。電波を受信し始めた。

とにかく、眠い。こーゆーときは、寝るか……。あ。あれは、ハオ
……さん……。

「お……さん！？おきて……さい!？」

そ、それは、無理……。おや、すみなさ、い。

??? side

「ほんと、皆頑張るよな、しょうもないことで」

学校の屋上に上り、小さくつぶやく影が一つ。

「まったく……自分以外は全て平等にカスなのに……」

ただ一言を残し、ふわりとその場から消失した……

11話：人攫い、奴隸商、ついでに貴女（後書き）

どうでしたか？桜華くん、実質的に一対一の勝負？（今回は勝負にすらなっていないですが）で負けたのは、お母さんとの鍛錬以降初めです。

歴史的敗亡ですね。作者もビックリしましたww

まあ、負けっぱなしは桜華くんの趣味ではないので、いつかゴッスゴスにやることでしょう

では、次回も宜しく願います！

12話：『愛しき子達（マイワールド）』（前書き）

目。連様！あれ、出させていただけますです！

では、どうぞー！

12話：『愛しき子達（マイワールド）』

ああ、負けたのだな。そんなこと、すぐに理解できた。

あの人が、どんな聖人君子だろうが、善行善幸しか生み出さない善人だろうが、全ての人に慕われる偶像性を持つていようが関係ない。僕はあの人が嫌いだ。何が嫌いとかではなく、全部嫌いだ。

人に好かれるあの感じも、につこりとほほ笑む筋肉の躍動も、全てを包み込むをふりをして、全てを囲ってるだけのあの人が、僕は嫌いだ。

「はっ、嫉妬ですかね？」

ついさつき、目が覚めた。全身の骨が折れているのはもう今は昔、既にほぼ完治状態だ。

薬品の匂いなどがすることから、ここは病院か薬局なのだろう。

「意識失う前に葉桜さんが来たから……。なるほど、運ばれた訳ですか」

なんのことはない。見つけられて運ばれただけ。問題は救急車を使ったどうかだけど、大丈夫だろう。葉桜さん、走ったら普通に車より速いし。

「まあ、目が覚めたら死んでた、ってことになってなくてよかったです」

そんなところで入口の方に少しながらの気配。汲み取れる感情は『心配』『動揺』、うん、葉桜さんだろうね。

「葉桜さん……」

「あ、お、起きてたんですか」

自分がいるとばれたので少し動揺しているようだ。
それもそうだろう。何がそうなのか分からないけど。

「け、喧嘩でもされたんですか？」

「……いえ、ただのおしゃべりですよ」

喧嘩も何も、喋ってただけですからね

「全治、一年だそうで」「うん？もう、治りましたよ？」「え？」

なるほど。顔が暗かったのはそういうことか。

全身骨折ぐらい、通常時でも一時間、リユニオン時だと十分ぐらい
でしょうかね？

葉桜さんに見せるように体を動かす。

「ほら、ね？」

「……桜華さんの馬鹿あ！」

パンツ

……？この、頬を伝うひりひりした痛みは？手袋だったけど。

「は、葉桜さん？」

「なんで、なんで、なんで？どうしてこんな、こんな危険なことを……」

葉桜さんの眼に大粒の涙が。……ああ、心配されてたわけですか……。女の子泣かせるとか僕マジサイテー。

こういう時はあれだ、えっと、えっと。そう、ハグだ。

「葉桜さん、心配かけてすみません。僕は、ここに存在してます」

「うう、ヒッグ、えぐう……」

背中をポンポンと。頭をナデナデ。うん、泣きやんでくださった。剣呑剣？。ん？使い方が違うような希ガス。

「桜華！？」

あ、お母さんだ。

「桜華ああ！」

グワシッ

おっふ！？これは、なんだ？万力が泣いて叫ぶような力でギリギリと力ぎやあああああ！？

「ちょ、今度は、マジで、死ねる」

「桜華さん！？いったい誰がこんな酷いことを！これは陰謀に違いない！」

「そうね。私たちが少し力を入れたぐらいじゃびくともしないもの！誰かの陰謀だわ！」

この、二人は……。本気で言ってるのか？
まあ、本気なんだろう。

「……桜華」

お母さん、マジモード。え？いきなり？

「……貴方がなにをしようと構わないんだけど、お母さん、貴方が何かをされるのだけはいやだからね？もう、お母さんや葉桜を心配させないと、まあ、この場凌ぎでいいから約束しなさい」

「……………はい。約束です」

「じゃ、三人でゆびきりですね！」

ふふ。なんか約束の多い人間だな僕って。そのたびに破っちゃってるんだけど。

『やあ、桜華くん』

『大丈夫かい？』

『お見舞いに来てあげたよ』

『災難だったね』

『何かの陰謀に巻き込まれたのかい？』

「あ、球磨川君」

お見舞いに来てくれたとか、マジでうれしすぎるぞ。いや、嬉しす

ぎるぞマジで。

「桜華？この子は？」

「ああ、先輩です。生徒会長もやってますよ」

『ああ、桜華くんのお母さんですか？』

『今回は災難でしたね？』

「……ちゅ……」

……ちゅ？……へ？

『な、な、なにを！？』

あ、球磨川君顔真っ赤。これはレアだぞ。

「ぶれぜんでいっどばいませー」

『お、桜華くんのお母さんは珍しいね』

「そうですねー」

『じゃ、じゃあ、これ、花束ね』

『体、お大事に』

背中を向けて手を振る球磨川君。うん、よくあるっていうか古風だな。

お母さんも見境なく愛情を振りまくし、まあ、それこそがお母さんなのだろうけど。

お母さんも異常なのだとい最近分かった。異常と言ってもまあ、あれです。

溺愛に次ぐ溺愛。博愛をして博愛と成す。親愛を以つて親愛を尊ぶ。慈愛と友愛と善愛。

[illegible]

目も当てられぬほどの愛を以つて、愛を生みだす。

僕たち二人を中心とした全ての子供に上限なく愛を贈る。

子供にあだなすものはすべて排除する。

愛を以つて愛を創る。

愛至上主義者。

『マイワールド
愛しき子達』

なんか、善吉くんのお母さんとおしゃべりしてたら分かったらしい。
なんとアバウトなことか。

そんなわけで、
こんなわけ。

球磨川君もたじたと云う訳。僕ビツクリ。球磨川君もビツクリ。けど、最近それにかこつけて、愛情表現が過剰すぎるような気がするけど気のせいだろうか？

「どうしたの？」

「あ、ああ、大丈夫です」

「それにしても、可愛らしい男の子ね？あの子」

「お母さんから見たら皆可愛く見えるんじゃないですか？」

「そうね。けど、一番は二人よ！」

「えへへ。お母さん」

「子離れ、できるんでしょうかね？」

「何言ってるの？ できるできないんじゃないわよ？ やらないのよ！」

は、はは。この人真性だわ。

とにかく、安心院さんにはいつかりベンジ……いやまてよ。女の子相手にリベンジとはいかなものか？ 男女平等！ ok？

「ようし！ やったるぞ！」

この後、二人からイタイ人を見る目で見られた。
o r z

12話：『愛しき子達（マイワールド）』（後書き）

どうでしたか？目目。様のアイデアをカリパクもとい参考にさせていただきました。

とりあえず、感じとしてはめだかさんの感じを、数億倍濃くした感じだと思ってください。逆に分かり辛いですね。

では、次回も宜しくお願いします。

13話：凶行？ふうん。（前書き）

いや、まだなんだけど。

ひさしぶりです

それで話の続きですけど、えっと、球磨川君って安心院さんの顔、剥がしたわけですよね？ぶちいっと。

それって、殺人……。え？じゃ、じゃあ、球磨川君って選挙終わったら検挙？

まじでか！すみません、一人語でした。

では、どうぞ！

13話：凶行？ふうん。

「葉桜さん……」

「桜華さん……」

何故いつにもまして僕たちが瞳を潤ませているのかというと

『やったあああああ！！』

二人の声が重なる。苦節数週間。

「部員、八人げつとうーーーーー！！」

「やりましたね桜華さん！」

二人でハイタッチ。新しく入部して下さった方々はこの勢いについてこれていない様子。

いいんだ、それでいいんだよ。それが、その対応こそが僕たちの間に足りていなかった常識キャラ

「よし、目指すは全国優勝です！やったるぞ！」

「……いや。俺らは別に」

「うん。球磨川から逃げてきただけだし……」

うん？何を言ってたんだこの人らは？

「球磨川君がどうかしたのですか？」

「知らねえのかよ？」

「生徒会長の球磨川禊君でしょう？知ってますよ？」

「じゃ、そいつの凶行は？」

「知ってますよ？」

「そうだな。知ってたらもつと引いたり慄いたりするもんな。だつてあいつがこの学校の生徒会長になった時だつて支持率0%だったし。あいつを支持する奴なんかこの世にいなえし……つて、知ってんのかよ!？」

おお、まさかの無名キャラがノリツツコミを使うとは。恐ろしい子！

「だから、それがどのような問題に？」

「いや、だから、その……」

「その程度の事で、見放す理由にも、見下す理由にも、拒絶する理由にも、嫌悪する理由にもなりませんよ」

所詮はその程度。球磨川君も球磨川君で頑張つてんだし、いいじゃん。それで何が起るわけでもないし。何か起こったとしても、別にどうでもいいがね。

「とりあえず、練習です。あ、練習は凄くキツイですから。途中

で死んでも文句は言えませんか？まあ、血へと吐くぐらいは当たり前ということで」

「え？」

「とりあえずは、その腐った根性をたたきなおして差し上げますよ」

ニツコリほほ笑む。さぞかし悪魔の笑みに見えたことだろう。

「では、まず……」

「ぎゃあああああああああああ！？」

ふむふむ。まあ、これぐらいじゃ人は死なない……あれ？おい、おいおい！？誰か！？AEDを持ってこい！今すぐにだ！

ピーポーピーポー

つとお、妄想はここまでにして。

ガラッ

ん？なんだ？あの時代遅れの不良は？オールバックとかマジないわ
ww

「桜華、であつてるよな？」

「その名を呼ぶとあなたは三日後に死が！訪れないでしょう」

「うん。桜華だ。久しぶりだな」

ごしごし。ん？眼が腐ったかな？こしこしこしこし。うん？あれ？この輪郭、どこかで見た覚えがあるような。でもその人は髪が黄色いし。

それに、こんなしゃべり方でもなかった気がする。ヘタしたらシヨタ……いや、なんでもないです。

「え」と、誰？」

「善吉だよ！人吉善吉！」

必死に自分を指さすヒトキチくん。なるほど、僕の間違った予想が当たってしまった訳か。

中学デビューか。古いな。古めかしすぎるよ。

「ああ、善吉君ですか？どうしたんです？その恥ずかしい格好？時代に反抗期ですか？瞳さんも泣いておられるでしょう。たとえばそれが可愛い可愛い幼なじみの為だとしても今のうちにやめておく方が身のためだと僕は思いますけど？」

「う、ウッセーな。こっちにも考えが」

「で？用事はなんでしょう？僕は今、激しく絶望しているので」

「な、何があつたんだよ？」

「何も無いからこそその絶望ですよ」

「ああ、桜華だな。で、昔からのダチとしての頼みだ」

む。それを言ったらよほどの事でない限り断れないではないか。こいつ、心得てやがる。

「阿久根高貴ってやつは知ってるよな？」

「ああ、そうですね。つい先日襲われました」

「そうだよな。アイツ危険だからなりふり構わず誰だろうと関係なしに壊すからな……って、襲われたのかよ!？」

本日二回目のノリツッコミ。ノリツッコミでもはやってんのかな？
今度研究してみよう。

「けど、あいつに襲われたらもう人間として再起不能になるんじゃない……」

「へーそうなんですか！初めて知りました」

「なんともやる気ない返事だなオイ。で、その生き残りに頼みだめだかちゃんの仇打ちだ」

「頑張れ善吉くん！めだかさんにアピールするチャンスだ！チャンス逃すな、恋運掴め！」

「一緒に頑張ってくれと頼んでいる！」

「ああ、無理ですね。そんなことやったらめだかさんに殺されてしまいますよ」

チラッと葉桜さんを見る。相変わらず女子を指導しているようだ。
なんか女子の葉桜さんを見る眼さえも、色目になってきているのは
気のせいかな？

「ほら、それに集団でいじめはよくないですよ？やるならガチン
コですよ」

「で、でも」

「でももへったくれもありません。それでもというのなら、どう
ぞ。これは友達からの忠告です。間違いなくめだかさんに回し蹴り
を喰らわせられます」

「な！？お前は預言者か！」

「助言者ですよ」

やめんか！という声が脳裏に響き渡る。おかしい、脳味噌までおか
しくなってきたか？

「とりあえず、突っ張るのは良いですけど、正直、似合っていない
って言うww」

「う、うるせいやい！もういいぜ。とりあえず俺の意思は変わん
ねえから、またな」

「いやですよ。冥府の底になんて行きたくありません」

「死ぬ前提かよ！」

「ん？死ぬ覚悟じゃなかったんですか？それとも？ん？口だけだったのかなあ？」

「いや、死ぬ覚悟とか言ってねえし！もういいや。じゃあな」

「命運を祈ります。骨は拾ってあげますので」

「うるせい！」

ガラッ

ぴしゃりと閉められる扉。ふむふむ、とりあえず、似合ってたな。

「た、助けて……」

「ほら、立って立って。まだ練習は始まったばかりですよ？」

『ひぎいあああああああああああああああ！！？』

ここから、中学剣道界最強と言われる部の始動だった（笑いだけどホント

それにしても

「それにしても、めだかさんがぼこぼこですか。最近会ってないからな。気づかなかった」

今度お見舞いか何かに……いや、学校にいるんだったな。今度会いに行ってみよう。もちろん葉桜さん同伴で。そうしないと僕の内臓

が主に葉桜さんの的な意味で危ないことに。

「ん？もうこんな時間ですか。ああ、練習終わりですよ。ほら、起きてください」

床にくたばっている人たちを起こす。うむ。良い顔つきになったよ
うな気がしないでもない。

「僕、これからもガンガンやりますので、耐えられない方は早々に立ち去った方がいいかと」

『やめるか馬鹿』

馬鹿だって。ひどい。けど、ま、あれですね。熱血最高。若いって良いっす！

「桜華さん、行けそうですね？」

「もちです。人ってのはすごいですね。無限大の可能性ってやつを持つてる」

まるで自分が人間じゃないみたいな言い方。まあ、そうなんだけど。

「突きつめられた可能性よりも、突き詰められない可能性の方がかなり、とても、すさまじく、素晴らしく、すごいです」

「ふふ。桜華さん、帰りましょうか」

「ええ」

けども、葉桜さんを色目づかいで見てた方はお話しさせていただき
ましたよ？体的な意味で。

大丈夫、無限の可能性ってやつが……え？息してない？うつそお
ん。嘘です。

どっかside

校舎裏、そこには無数の不良の姿と、金髪のこれまた不良の姿が。

「俺の幼なじみをさんざんなぶってくれたことについて
何かいうことはありますか？阿久根先輩」

不良たちを先導する少年が切れかかってそういう。

壁にもたれかかっている金髪、阿久根と呼ばれた少年は

「ねーよ。俺には何もねーんだ」

既にかかなりの手傷を負っているらしく、所々傷だらけだ。

「……………あつそ」

おおよそ常人では繰り出せない速さで拳を振る善吉

そこに乱入する一つの影

思いつきり体をしならせ、そして

「やめんか馬鹿者！！」

黒神ローリングソバット！！そんな擬音が確かに聞こえた。

端的に言うともものっそい回し蹴りである。

ケツタ。自分を護ろうとした幼なじみを足蹴にした。

いや、もう、解説口調は良いですか？桜華です。

いやはや、面白いですね？あの人たちは。

「たとえどんな理由があろうとも！弱い者いじめは許さんぞ！」

いや、いやいや、その人が弱かったなら、全人類が弱いことに。いや、これは心理的なことも言っているのでしょうか？

確かに、心は酷く脆そうですが。空っぽすぎてカラカラですよ。

「あと髪戻せ！なんだそのオールバック！！！」

うん。善吉くんがorz状態に。仕方ないよ、まだ子供だもん。僕は例外だと考えてください。

「阿久根高貴！」

阿久根先輩のもとにめだかさんが歩み寄り

「貴様もかつては弱い者を慈しむ

優しき心の所有者だったに決まっている。

比類なき恐怖に満ちた幼年時代を過ごしたがゆえに
そのような壊し屋になってしまったとしか考えられん」

出た。『上から目線性善説』

とりあえずここは外国じゃないから、年上の方には敬語を……無理
か。

「安心しろ！貴様が人間らしい心を取り戻すまで

貴様の破壊衝動に私がいくらでも付き合ってやる！！」

今確実に『凜っ！！』っていう擬音が。

ま、僕は、ここで失礼させていただきますかね。

まだ、まだまだ。

ここで僕の異常にある人物が引つ掛かった。あの人だ。

「やあ、安心院先輩」

「ん？ああ、桜華くんか。元気？この前は勝手に崩れ落ちちゃっ
てみたいけど？」

「ああ、朝飲んだ牛乳が賞味期限が一年ほど過ぎていて、お腹を
壊しただけですよ」

「ふうん。けど、どうしてそんなに殺気立ってるのかな？僕はも
っと友好的に話したいんだけど？」

「気の所為ですよ。それともあなたは人の気配を感じ分けられる

ほどの達人だとしても？」

「そうだね。うん、達人だよ」

「へえ。それは初耳ですね」

「そりゃもちろん。初めて言った上に、嘘だからね」

「知ってますよ。いや、分かってますよ」

はんつ。

「ま、貴女の事が嫌いなのは変わりません？」

「へえ」

指をピツと指す

「ん？何かしました？」

「ん？何もしてないよ？気のせいだよ気のせい。それとも君は人の気配を感じ分けられるほどの達人だとしても？」

野郎、じゃない。意識返しのつもりかよ。

「滅相もない。僕はどこにでもいる普通で普通な………人外ですよ？」

「自分で認めちゃうんだ」

「僕が人間だなんて言ったら、人間の皆さんに失礼ですからね」

「ふふ。やっぱり君は面白い。じゃ、僕はこれで」

「さようなら。そして、さようなら」

「ん。君が未長く幸せでありますよーに」

はあ。あんな口叩いても可愛いつてんだから始末の悪い。ホント、これだからガキはま、帰りますか。

「桜華同級生。そこで何をしている？」

はは。これまた、めんどくさいことに。

「いえいえ、部活帰りに不良たちがたむろっていたので、何事かと思い覗いていたら、善吉くんが似合いもしない「うっせえ！」オールバックで登場して阿久根先輩を襲っているところに出くわして、

ぼーっと眺めてただけですけど?」

よし、言いきったぞ!よくかまなかったな僕。

「そうかそうか。貴様もこれは似合わぬと思うよな?」

「め、めだかちゃん!」

「まあいい。これから二人で美容院だ。なにやらツインテールが不人気なのでな」

それはあなたがロリ体形ではないからですよ。

葉桜さんがいたら「おっぱい」っていいながら、手をぬうつと伸ばしているところですよ

「ここで桜華同級生も一つ、さっぱりしてみてはどうだ?」

「否、断じて否!僕の個性が、個性があああああ!」

カダージユくんっぽくなかったら、僕の個性が、アイデンティティが!

あれか?ロツズとかになれと?無理無理。体格も違うし。まあ、マザコンなのは一緒なんだけど

「じゃ、桜華同級生も気をつけて帰るように」

「お前の助言、ちゃんと聞いておくべきだったよ。じゃあな」

「はい、また」

阿久根先輩の方を見る。

「……黒神、めだか」

はい、あの顔は惚れてますね。ぽーっとした顔していますすはい。

「桜華さーん。帰りましょー？」

「あ、ちょっと待っててください。今行きます」

今回も傍観。さて、いつから原作介入しよっかな？原作の知識さえうる覚えなだけどね！

そうして、僕と葉桜さんは手をつないで仲睦まじく帰ったとさ。めでたしめでたし。終わらないけどね！

13話：凶行？ふうん。（後書き）

どうでしたか？そうでしたね。

あと少し、あと少しだけ中学生編が続きますので。でもあと少しなので！

飽きないでー。見捨てないでー。うにー。いーちゃん見捨てないでー。

はっ！？途中でキャラが変わってしまった。玖渚友、恐ろしい子！？

そんなこんなで

次回も宜しく願います！

14話・何故、こうなった？（前書き）

今回から、文頭に厨二語を入れてきたいと思います

いつまで続くやら

では、どうぞ！

14話：何故、こうなった？

——人とはかくも美しく、醜い生物だ——

『ねーねー桜華くん』

『君は好きな子がいるかい？』

『僕はね？』

『好きで好きでたまらない子がいるんだ』

ある日昼休みの事。そんな、球磨川君の衝撃発言が繰り出された

「マジでか!？」

『うん』

『マジマジ』

「けど、それを後輩に相談するのはいかなものかと」

『うん？そうかな？』

『桜華くんはそういうのに精通していると思ったけど？』

いや、いやいやいや。僕ほど疎い奴もいないですよ。

「その、好きなこと言うのは？」

『安心院さんさ!』

「ぶほッ!？」

いや、それこそ衝撃発言だし!？いや、マジで？

『汚いなあ』

『何ふいてるんだよ』

「いや、何も口には含んでいませんでした」

『ふうん』

『で？アドバイスとかは？』

「……当たって砕けろ？」

『なるほど』

『振られる前提か』

『それならいいかもね』

『……なにやっても』

「う、うゝん。なんかやったらボコボコにされるんじゃないですか?。」

『この学校のアイドルだぜ?』

『おしとやかだし』

『綺麗だし』

『凄く好きなんだ』

『けど、外面だけが好きかどうか知らないんだ』

「だったら、顔面をはがして、それでも好きだったら、あなたは本当にその人の事が好きってことなんじゃないですか?。」

かるゝい、ジョークだった。ほんと、呼吸をするかのように軽すぎるジョーク。

『あはっ。』

『それは名案だねえ』

『実行あるのみだね』

『じゃね』

『桜華くん』

「ん、また」

まさか、しないだろう。いや、されてもあの人なら死なないかもしれない。痛いだろうけど、顔面の皮剥がされたぐらいじゃ人死なないもんね。

何故、こうなった？

今、めだかさんの下で球磨川君が組み伏せられている。

下のコンクリは歪な罅が入り、球磨川君が叩きつけられている。

それを、僕と、善吉くんが見ている。動けずに。

葉桜さんは夏バテでいない。

球磨川君がやったことは……あれ？思い出せない？

何を、やったんだっけ？

何で、こんな状況になっているんだっけ？

思い、出せない。

『僕が悪かった』

『許して』

『僕の負けだよめだかちゃん』

球磨川君が息も絶え絶えにそういう

『今までの事

全部謝るから

許してよ』

『まだ

死にたくない』

中学生で殺し合いつて……どこぞのたけしだ？

『お願いだよ』

『これ以上

僕を殴らないで』

髪が逆立ったままの状態で、拳を構えて止まっているめだかさん。
怒りと言う感情しか見えない。憤怒、怨怒、色々だ。

『二度と人の心を

傷つけないって

約束する』

『この中学校からも

出て行つて』

『二度と

君たちの前に

姿を現さない』

『僕は

反省したんだ』

『お願いだ――

僕に罪を償う機会を

恵んでくれ』

罪？本当に、何をしたんだっけ？

「……本当だな？今度こそ

今度こそ今度こそ今度こそ

今度こそ今度こそ今度こそ――本当だな？」

なにか、敵対でもしていたのだろうか？分からない

分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない

――ワカラナイ――

『うん』

『めだかちゃんだけは

僕の事

信じてくれるよね』

「…………わかった。信じよう――許す」

御しがたい気持ちが顔ににじみ出ている。

そのとき、薄っすらと球磨川君が笑った。

どうして、こんなことになっているのだろうか？

こんなこと？って、どんなこと？

やっぱり駄目だ、思い出せない。

ふと、視線を横に向けてみる

彼女（彼）がいた。

顔が真っ赤だった。

それはもう、真っ赤っか。

怒っているのだろうか？

どうしてそんなに怒っているのだろうか？

ポトリと、顔から赤い液体が滴り落ちている。

涙？彼女（彼）は泣いているのか？

顔全体から、血の涙を滴り落としている、彼女（彼）がいた。

別に嫌悪感はない、吐き気もしない。

ただ、顔を失くした彼女（彼）が、静かに静かに横たわっていた。

そこで球磨川君がゆらりと立ち上がり、こちらに近寄ってくる。

『あはっ。』

『気持ちは、変わらないね』

全て、理解した。

理解したうえで、理解が出来ない自分がいた。

理解できないんじゃない。

理解したくない。

自分の軽い冗談で

球磨川君がこのような事をしてしまったことに

球磨川君の手が汚れてしまった事を

彼女（彼）が死のうが関係ない。

もう、誰だったか思い出せない。

ただ、そのことだけが、僕を苛んだ……。

「
—
クス」

そんな、笑い声が、赤から聞こえた。

そして

さまざまなモノを忘れ

さまざまなモノを失い

さまざまなモノを得て

箱庭学園へと、進学する

14話：何故、こうなった？（後書き）

どうでしたか？

よく考えたら、西尾さんはあじむさんが死んだとは一言も書いていない。

これはまずい。まずすぎる。なので、こんな中途半端ーになりました。

まだ中学生編でギャグを書いてこうかと思ったけど

もう、箱庭学園に入りたくなってしまったので。

すみません。でも、それでも見てくださる方に最大級と最上級の感謝を。

では、次回も宜しくお願いします

閑話：赤き征裁と人間失格（前書き）

閑話です

修学旅行ですよ

時系列は、クビシメロマンチストらへんです

では、どうぞ！

閑話：赤き征裁と人間失格

——戦う理由はなんのため？正義？好きなあの子？否、自分の為——

あの事件の事も、何故かほとんどの人が忘れていた。

被害者の名前すら思い出せない。憶えているけど。

そんなこんなで中学二年生、世の中で一番馬鹿な生物になり恒例のあれに行くことになりました。

「これから明日の朝まで自由時間だからな」

修学旅行だ。先生、なんともアバウトだな。

行先はベタな京都。今話題の京都だ。

宿泊地は、どこにでもありそうな旅館。

「桜華さん、どこか行きますか？」

「そうですね。新京極あたりにでも行きますか？」

「なら、めだかさんたちも誘いましょう！めだかさ〜ん」

うちのアクティビティと言ったら葉桜さんだ。
異論は認める。

「うむ？新京極か？なんだそれ？ヤクザの組の名前か何か？」

「め、めだかちゃん。観光名所の名前だよ」

「ふうん。よし、ならば行こう。行きまろう」

「よっし行きましょう」

移動は徒歩ですよ？うん？なにか？

このメンバーだと。タクシーで渋滞に捕まるよりも歩いて移動した方がかなり速いんですよ

いや訂正。いきなりめだかさんが全速力で駆けだすものだから、タクシーと一緒に移動した方が楽だった。

そんなこんなで新京極。他の学校の修学旅行生もたくさん来ている。

「詠ちゃん。こっちこっち」

「もう。月はほんとに」

「！？？」

今、ものすごく懐かしい声が聞こえた気がしたが気のせいだろう。
いる筈がないから。

「桜華さん？」

「ああ、大丈夫ですよ」

「でも、郷愁の顔をしていますよ?」

「あはは。大丈夫です大丈夫です。行きましょう」

「???」

大丈夫空耳だから気にしないで相槌しなくてもいいよそもそも大したこと考えてない、ってね。

「何をしておるのだ?早く楽しむぞ!」

『おっす』

それから。

めだかさんがクレーンゲームで奇跡の技(笑)を繰り出したり、めだかさんがパンチングマシンでアリエナイ記録を出したり(そもそもマシンが耐えていなかった)、プリクラをとったり、葉桜さんとめだかさんが芸者の格好を試みたり、お土産を買ったり、ぬらりひょん(笑)と出会ったり

真っ赤な最強の方と出会ったり……。

突然だった。何か見られている。いや、自意識過剰ではない。

たしかに、舐めまわすように見られている。スキを図るように。じつと、じつと。

子供でも分かるように「今からお前を殺す」とでも言わんばかりに。そういえば、そういえば、京都では今連続殺人鬼がどうやらこうやららしい。

記録は前代未聞の12人。これからも増え続けるだろうと予想。

じゃあ何故、僕たちの学校は修学旅行を取りやめなかったんだ？不思議だ。

法治国家では、異例だよね。

こういう時は、あせらずあせらず。これは僕を狙っている感じなので、あれだ。あれ。

おびき出そう。テヘ

「ちょっと、トイレ行ってきますね？」

「む？そうなのか？」

「じゃ、あそこのベンチで待ってるからよ」

「はい」

そこからすすつと抜けだす。
空き地でいいかな？うん、やっぱりつけてくる。
うっひゃあ、怖い怖い。

「で？出てこないんですか？」

「……」

出てきたのは、一見、華奢で頼りなさそうな人物。男としては結構低身長であるだろう。

タイガーストラップのハーフパンツ、安全靴。上半身は赤い長そでのフードつきパーカー。

あとは、ご存知の通りの、ハーフフィンガーグローブに、ナイフ。

【コイツだ！】

思つくそヒトゴロシな感じのあれ。

わああ。マジでか。

「

」

何か言った気がした。それどころではない。

見るも鮮やか、人間の動きはここまで流麗にして優美。

その動きは全て、僕の頸動脈を、心臓を、脳を、全ての急所を狙った動きだった。

久しぶりに感じる。コロシアイ。

さあて、じっせん「伏せろ！」え？

伏せろと言っておきながら、吹っ飛ばしたあなたはだあれ？

印象は紅。異常終了。

「追い詰めたよ。零崎くん？」

「よし、逃げよう」

零崎と呼ばれた男性は一目散に逃げる。なんとも鮮やかな引き際だった。

それを追いかける紅い人。

追うものと追われるもの、さあ、どっちが力関係的に強いだろうか？もちろん、追うもの。ただの力では、だ。

追いかけてきた者の力が自分の力より弱いなら、ここにある死体の数が一つ増えるだけだ。

逃げるのは、相手が自分より強いから。その他状況云々は、置いておいてだ。

「あばよ」

「逃がすか！」

しかし、誰からみても、それがたとえ初対面の人であったとしても、その紅い人の存在感は圧倒的だ。

一見してすぐに終わると思われた捕り物劇は、殺人鬼の方が逃げ切る形で終わった。

自分のスキルを逃げ一つに絞り込んだ末に、逃げ切った。

ふむ。新たな発見だな。逃げることに、力関係は関係ないと。

「ちッ。逃がしたか」

今さっきの髪型は、カリスマ美容師に切ってもらい、前髪パツン

になった紅い人。

手傷も負っているようだ。まさか、ねえ？

「しゃあないか。いーたんでも意地悪しに行こう」

その、いーたんって人、かなりドンマイ。

「おい、その君。大丈夫だったか？」

心配していないような顔で、まったくもって心配していない口調で、自信満々な口調で。

「ああ、はい。大丈夫です」

「ああ、それと」

ゴスツつと言う音と共に、吹っ飛ぶ僕。あれ？僕？

「イチチ。何すんですか」

「お前、わざと集団から外れたろ？自殺志願者か？もう、世界には飽きたって口か？」

後者は少しの射でいて、少し痛かったが

「いや、トイレに行こうとしただけですよ？」

「ふうん。そうやって嘘をつくとおねいさん、おこっちゃうぞっ。」

シニカルに笑う紅い人。うん、紅い人。

「すみません！紅い人さん！わざとでした許して下さい！」

超ウルトラクアトロスピント下座Ver.2。

「よし、許そう。あと、紅い人じゃない。哀川 潤だ」

「えっと、哀川さん？」

「名字で呼ぶな。あたしを名字で呼ぶのは敵だけだ。それともなにか？お前はあたしの敵になりたいっつー敵か？」

「滅相もございませんです。潤さん」

怖かった。恐かった。強かった。

「じゃ、あたしは行くから。困った時はいつでもこの 人類最強の請負人 にお任せを、ってね」

潤さんが指をパチンと鳴らすと、消えた。催眠術か何かだろうか？現に潤さんはそこら辺を闊歩している。

「はあ。何で殴られたんだろう？」

いや、見えなかったからもしかしたらケットバサレタのかも。どっちでもいいか。

結果として、フットバサレタんだから。

「 人類最強の請負人 か。ヤバいな。惚れそう」

これは、会うことのない、人類最強と人外の、ディンディア異説。

ただの、戯言だ。

閑話：赤き征裁と人間失格（後書き）

どうでしたか？紅い人の喋り方分かんない。

まあ、閑話ですんで。気にしないでください。

では、次回も宜しく願います。

15話：いろいろ（前書き）

色々詰め込み過ぎて、よく分かんなくなっちゃった

では、どうぞ！

15話：いろいろ

—— 忘れない。刻み込んだから ——

『世界は平凡か？』

まったくもって平凡ではないです

『未来は退屈か？』

いいえ、希望に満ちあふれております

『現実 is 適当か？』

毎日が死ぬ気でございます

『安心しろ』

『それでも』

『生きることは 劇的だ!』

僕の人生、劇薬だ。

『そんなわけで 本日より この私が 貴様たちの生徒会長だ』

『学業・恋愛・家庭・労働 私生活に至るまで』

『悩み事があれば 迷わず目安箱に 投書するがよい』

それは最早、生活相談センターと同義なのでは？

『24時間 365日』

『私は 誰からの相談でも 受け付ける!!』

もはや、インテル入ってる。この人のエネルギーはどこから湧いてくるのか？

僕は葉桜さんからだから、善吉くんか？全人類か？もしや空気中から？

ないな。

「え、え、ありがとうございました。素晴らしい演説でしたね？次は、新入生代表の挨拶にうつらせてもらいたいと思います」

[illegible]

なにそれ？何この超展開？笑えないんですけど？
何も知らされてないんですけど？え？何が起こった？何を起こらせ
た？僕が一体何をした？

「（お、桜華さん。手紙、渡すの忘れてました！すみません）」

マジでかああああああああああああああああああ！？
オワタ。これはオワタ。ジンセイオワタ。
悲惨すぎるぞこれは。あ、泣かないで葉桜さん。葉桜さんは悪くない。どっちかって言うとな僕の方が全面的に悪い気がする。

「神城桜華くん？どうしたのですか？」

ぐ、万事休すだ。これは、行くしかないのか？
もついい、演説には慣らされている。このぐらいの人数へっちゃらだもんね！

そう言いながらも、足がガツクブルすんぞお！

ついに、着いた。

「あれって……!？」

「うん！中学生モデルの神城桜華くん!？」

「マジで!？やっほおおっつい!？」

なんか知らないけど、知名度は結構高いみたいだ。
なんでだ？

『え、え〜っと』

マイクで拡張される自分の声。これ、マイク握ると緊張度が高まりまくる。

『皆さんの未来は、希望はいくつありますか？』

『そのどれも捨てきれない未来だと思います』

『けど、世の中には二兎追うものは一兎も得ずという言葉がありますね？』

『それでも、二兎追うものにしか二兎は得られません』

『未来は変えられません。だって、最初から決まってなんかいないから』

やっべーこれやっべー。マジはズい。

『無理はしないでください』

『けど、無茶ぐらいはしてください』

『以上、終了です』

「素晴らしい演説でしたね。次は、風紀委員長……」

オワタ。オワタ。オワタ。入学式も終わってた。

わいわいがやがやという雑踏と共に席から離れる新入生の僕たち。好奇の視線が僕に突き刺さる。イタイ、痛いよ。

「桜華さん！クラス見に行きましょう！」

「ええ、行きましょう」

そんな僕を変わずの眼で見ってくれる葉桜さん。かあいいよ。葉桜さん。

そんなこんなので、クラス表。

僕は、え〜っと……………だよ。やっぱり、だよ。

この学校に来て思い出したのはこの学園の理事長があゝの時の不知火袴さんだ。

さらに思い出したのは、あのサイコロ振ったの、異常を調べるための試験ではないか。

この情報から導き出される答えは、一つ！

十三組だ……。やつべーこれやつべー。

普通に死ねる。

異常なのに普通に死ねる。死ねる。死なされる。

特に、雲仙風紀委員長の委員長挨拶はヤバかった

『え〜新入生の皆さん。俺が正義だ。風紀を乱す奴は迅速に死亡しろ。以上終了、ケツケ！』

だった。やつべーこれやつべー。

なので、目立たず、奢らず、乱さずで行こうと思います。あ、もう目立ってる？

まだ、死にたくないんだ。自殺行為は紅い人に殺される。ok？

「葉桜さんは？」

春咲 葉桜 13組

あら？葉桜さんもだよ。てっきり十一組かと思ってた。

「一緒ですね！」

「やったですね！」

真似てみた。自分でやって気持ち悪かったおえ。

「めだかさんも十三組で、善吉くんは一組か」

思っんだ。善吉くんは少なくとも十一組じゃないとおかしいって。

「あれ？善吉くんたちは？」

「善吉なら、不知火と一緒にどこか行ってたぞ？」

あなたはだれかね？

「あの、どちらさまで？」

「俺は、日向だ。お初目におかかります、全国覇者様？」

ああ、剣道の話しか。僕はこの人知らないけどね。

「まあ、またどこかで会うと思うよ。じゃあな」

「はい？」

それを肯定の言葉と受け取ったのか、去っていつてしまっ日向くん。

「まあいいや。ふむ、善吉くんも隅に置けない男の子ですねえ」

めだかさん一筋ではなかったのか？ふむふむ。
む？ふむふむ。

「さてと」

最近、なんでだろうか？

僕、何かしたのだろうか？何もしてないからこそなのか？
どうして、毎回つけられるんだ？

「葉桜さん。先に教室に行ってくださいですか？」

「何か用事でも？」

「あ、はい。ただのトイレです」

「分かりました。行ってますね？」

ふむふむ。聞きわけがいいですね。
よし、おびき出せ

校舎裏に回る。

「出てきたらどうですか？」

「……驚いたな？いつから気づいてた？」

「そりゃもう、あなたがこの世に生まれ落ちる前からですとも」

えーっと、名前は確か、ひのかげ ぐうろう日之影空洞
ミスターアンノウン前生徒会長『知られざる英雄』

見た目は、とにかく、KYODAI
どこをとっても巨と文字がつきそうなぐらいのビッグスケール。

「何故気づいた？」

「僕の異常を応用すれば、半径200メートルほどだったら、蟻でも、塵の様な埃でも認識できます。認識できないとしても、そこには存在するでしょう？僕にはそれが手に取るように分かるんですよ。意識しなくても、ね？」

「……探知能力か？」

「いえいえ。これはただの副産物。本当の異常はもっと別にありますよ」

「お前は、この学園に対して害なすものか？」

巨手を握りしめる空洞先輩。恐ろしすぎるぞそれは。

「滅相もないです。僕は、普通に暮らしますんで」

「そう、か……」

握り拳をほどく空洞先輩。よかった、話し合いが通じて。まだ死ぬのはご免だよ。

「えっと。もう行ってもいいですか？」

「おう。悪かったな、こんなジジイの自己満足につきあわせちまうて」

「いえいえ。それでは」

怖かった。ほんと、怖かった。

あれだろあれ。戦闘フラグ回避。

僕は、まだ死にたくないんだあああああ！

十三組教室

そうだよ。誰もいないよね。学校は楽しいところなのに、登校義務がないからと言って、来ない理由にはならないような気がするのだけれど気のせいかな？

「桜華さん、誰もいませんよ？」

「十三組は、登校義務がないって言う馬鹿げた制度があるんです。まあ、別に良いんですけど」

折角、楽しい高校生ライフを築こうと思ったのに……もじもじ。

「いや大丈夫だ。葉桜さんがいれば楽しい高校生ライフなんて夢じゃない！」

「桜華さん！」

「葉桜さん！」

ひしっ

……悲しくなってくるな。こうも突っ込んでくれる人がいないと。どうしよう？帰ろつか？あ、そうだ。理事長に頼んで授業は普通に受けさせてもらおうようにしよう。

うん、それがいいよそれが。
勉強するのが学生の義務だ。異論は認める。

そんなわけで、理事長室。僕の行動理由がよく分からなくなってきた。

「理事長。黒幕面。目がヤバい。どこですか？」

「ちょ、酷いと言いますね？」

「ああすみません。つつい本音が……」

「で？用はなんなのですか？」

「僕たちに普通の授業を受けさせてください。でないと、水槽学園に転校する所存でございます」

「わ、分かりました。手配しておきましょう。なので転校の方はどうかやめてくださいね？」

「分かってますよ。ただの脅しです、じゃ、クラスは一年一組で」

「一組ノーマルでいいのですか？」

「この世に異常や普通といった概念を求める方がおかしい。多い方が普通で少ない方が異常です。なので、この学園では普通こそが

異常なのは？」

「さあてね？それはどうでしょう？異常だからこそその異常なのですよ？」

分かりあえねー。分かち合えねー。分かりあいたくねー。

「じゃ、さようなら」

「はい」

目がヤバかった。絶賛黒目。
そして、一年一組へ。

ザワ……ザワ……

なんだ？このざわめきは？カイジか？

「ねえ聞いた？新しい生徒会長の噂————私たちと同じ入学したての一年生のくせに 冗談みたいに態度がエルな奴なんだって

————」

「引くほど美人なんだけど やることなすこと滅茶苦茶に型破りでさ 先生もビビって手エ出せないそうだぜ————」

ふむふむ。なかなかの知名度になったようですねめだかさん。

善吉くんは……、死んでる？いや、寝てるだけか。

それに近づく水色の髪のロリイな女の子。アホ毛がチャームिंगだ。

「しっかしあのお嬢様 全校生徒を前によくあんな啖呵が切れる

もんだよ。人前に立つのに慣れてるっつかさー」

「カツ　ありゃあ人前に立つのに慣れてんじゃねーよ　人の上に立つのに慣れてんだ！」

爆弾発言。黒神めだかは生まれながらにして暴君説。

「んー　あー　そりゃそうだね。そーでなきゃ　一年生で生徒会長になんかなれっこないか」

さあ？なれるような気がしなくてもないよ？

「善吉くん善吉くん」

「善吉くん善吉くん」

僕と葉桜さんですずいと詰め寄る。

「キミキミ」。めだかさんというものがあらながら、ロリィな少女にも手を出してるのかい？このこの」

「善吉くんはロリィが好きだったんですか。このこの」

自分でやって思った。鬱陶しい。

「だー！？鬱陶しい！」

「葉桜さん。あれが自分の事を棚に上げて逆切れする人間の図です。よく覚えておきましょう」

「そうしましょー!」

「この二人って、全国区モデル、神城桜華と春咲葉桜じゃん! え? 知り合いだったの? 善吉」

「ダチだよ。ダチ。幼なじみだ」

「へへ。なんともまあ、幅広い交友関係だね」

こちらをちらりと見てにやりと笑うロリイな少女。あれだね、うん。不知火さんだね。

「で? お前十三組だったんだろ? なんでここに?」

「いや、授業はこちらで受けることになりました」

「ふうん。モノ好きだなお前」

「いいですか葉桜さん。あれが自分もモノ好きなロリコンだということを棚に上げて、こちらをモノ好きな人間と言う図です。よく覚えておきましょう」

「そうしましょー!」

「だああああ! ? 違う! 断じてロリコンじゃねえええ!」

シーーーーーン

「善吉くん善吉くん。教室の中でいきなりロリコンなどと発狂してはいけませんよ?」

「おめえの所為だろが！」

ふむふむ、ツツコミの腕は落ちておらぬようだ。

「麗しき姫様はなんでいつも手袋してんの？」

「そ、それは……」

「取るに足らない理由ですよ。聞いてもくだらないです。まだ、聞きますか？」

「いや、やめとこーかな」

「それは結構」

「じゃあさ、二人は恋人関係？」

「まさか。運命的な関係です！」

「なるほど、これはいいネタが」

「ゆすつてはダメです。ダメ、絶対！」

さもないと貴女の首と胴体と魂がおさらばするぜい？嘘です。

「で、話しが流れ過ぎたんだけど、とーぜん人吉も生徒会に入るわけ？」

「カツ！なわけねーだろ！これ以上 あいつに振り回されてたま

るかったの」

ガタツと立ち上がる善吉くん

「俺は絶対！生徒会には入らない！」

ビシ×2

君の願いは、届かなかったようだ善吉くん。ただ一言、しゃあないよ。

「まあ そうつれないことを言うものではないぞ善吉よ」

ガツシイ

凄い、凄いよめだかさん！頭を握って引きずってるぜ！マジパネエ！

「善吉君の冥福を祈って、黙祷」

シーーーーーーン

僕は、君のことを忘れないよ。心に刻み込んだから。

「王子様の方は部活動はやっぱり剣道部？」

「当たり前ですよ。剣道以外に取柄はないですから」

「ふうん。嘘だね」

ホントですよ。神に誓って本当です。

「だったら、無理かもしれないね。剣道部、今は休部中だから」

「それだったら、あれでしょう?」

「あれって?」

「もちろん——目安箱ですよ」

「あゝ。なるほど」

そうとなれば早速投書だ。

内容は

『剣道部、復興を望む 匿名希望』

よしできた。完璧だなこれは。ん? 葉桜さんも何か書いてる? 何々?

『あなたの胸、私に下さい 匿名希望』

……葉桜さん。

「み、みみみみ、見ないでください!」

「もう、見ちゃいました。えっとお、その、ドンマイ!」

「桜華さんはどっちが好きなんですか? おっきいほうとちっさいの」

「それはもちろん、って、何を言わせるんですか!」

危ない危ない。危うく変態のレッテルを貼られるところだった。そんなものいらぬわ!

それから無事、目安箱に投書する。

「どうします？帰りますか？めだかちゃんだったら、明日になったら全部片づいてそうですけど？」

「いや、ここはこっそり見に行きましょう。楽しいものが見れるはずです」

それと

「葉桜さん。まだ、腕は衰えてませんよね？」

「何言ってますか。若さが売りの十五歳ですよ？」

「ですよね。なら、行きますか」

「はい」

少し後

剣道場剣道場、あった。なぜだろう、休部中だというのに僕たちの中学時代より良い施設を使っているのは何事だ？
まあいいか。とりあえず、屋根の上に飛び乗ってと。

「さあて、見せてもらいましょうか？原作の、始まりです」

剣道場を屋根の裏から覗いてみると酷いものだった。不良の溜まり

場だ。たむろつてゐるたむろつてゐる。

あ、めだかさんだ。善吉君もいるぞ。

ちようどいいところだったらしい。あの名言を言い放つところだ。あれは、爆笑した覚えがかすかながらにあるんですね。

「哀れなことだ」

始まつた。

「貴様たちもかつては真つ直ぐな剣道少年だったに決まっている」

「何か重大な理由があつて挫折を経験し 道を踏み外してしまつたとして考えられん」

そうそう、その通り。世の中に何となく反抗したくなって、このようになるのだつて重大な理由だ。

「親に見捨てられたか？よき師に出会えなかったか？ともに裏切られたか？」

「安心しろ 私が貴様たちを更生させてやる 剣のこと以外何も考えられないようにしてやる」

「矯正してやる 強制してやる
改善してやる 改造してやる」

先生！強制と改造はいけないと思います。

「二度とだらけようなどと思えぬよう 泣いたり笑ったりできなくしてやる」

それは最早、人殺しと同義です先生。

ザワ……ザワ……

またもやカイジww

「まずは素振り1000回からだ！貴様達 今日歩いて帰れる
と思うなよ！！」

どうやって帰るんでしょう？あ、走って？

大丈夫、それ位なら十分もあれば終わる。めだかさんも甘いな。 1
00000回は普通でしょうに。

「さくで、帰りますか？」

「はい」

葉桜さんもウケたようだ。口元を押さえて涙目だ。

「ぷっ！イナバウアー、ハートマン軍曹」

何やら思つところがあつたらしく、笑いが止まらないらしい。

実のところを言うと僕も笑いが止まらないwww

その夕方、一組の男女が腹と口を押さえて道を歩くという珍妙な姿
が見られたらしい

誰だろ？

15話：いろいろ（後書き）

どうでしたか？

もう何が言いたいのかわからない一話となりました

テヘ

では、次回も宜しくお願いします

16話・三倍段？知ってるに決まってるでしょ（前書き）

今週のジャンプ・・・—w・？（

では どうぞー！

16話：三倍段？知ってるに決まってんでしょ

今日も一日爽やかに登校！しているはずです

昨日はやばかった。腹筋が崩壊しましたよ。笑い過ぎて。そんなこんなで、学校に登校です。

「おはよー桜華くん」

「お、イケメン桜華だ。おつす」

「きゃー！握手してください！」

……なにやら、違うような気がします、気のせいではないですよ
ね。

「桜華さん。握手、しませんよね？」

「も、もちですとも」

僕的にはご厚意を無下にはしたくなかったですが、これは自然の摂理と同じですからね。すみませんです。

僕の存在意義は葉桜さんですから。……重いか。

昼休みにもなると食堂がすごく混む。何とか席をゲットして葉桜さんと座っていると。

「隣いいか？」

「お邪魔〜」

善吉くんと不知火さんがやってきた。

「いいですよ、どうぞ」

断る理由もないので隣に座ってもらった。

葉桜さんは不知火さんと仲がいいみたいだ。なんせ、エアおっぱい。あ、隠せなかった。

ん？それにしても、善吉くんボロボロだな？うん、めだかさんのしごきに巻き込まれたと見える。

「昔つからどつかずれてんだよあいつは。自分の優秀さにまるで自覚がなくて そのくせ周囲には自分と同じレベルを強要しやがる」

めだかさんと同じレベルか。それは少々きついですね。

ん？なんで二人とも僕を見るんですか？え？お前も同類だって？何言ってるんですか。僕はセフィ様の能力がある以外は、ただのパンピ―ですよ？

「『ワルい奴やつつけてめでたしめでたし』あれがそんな簡単な女だったら あんたもそんなに苦労しなくてすんでるでしょ？」

それもそうだ。めだかさんは、やつつけるのではなく、改心させる。相手が悪人であっても、嫌いな相手でも、改心させる。その、真っ直ぐなところに好感が持てますよねー。あ、ちよ、葉桜さん、心の声聞くのはやめて。

「冗談じゃない めでたくなってもらわなきゃ 困るんだよ」

ぼそりと、けど確かに、聞こえた。

振り向いて見るが誰もいない。けど、いた筈だ。

「んん？今 後ろの席に誰がいなかったか？」

「え？」

そうだ、対岸に居た二人なら

「うん 同じクラスの日向がうどん食べてたよ」

「日向？」

えっと、日向日向。日向ミカン？

そうだ。入学式に話しかけてきた、ちょっとウザめのイカした剣道少年だ。

ふむむ、それは、どうしてだ？一緒に食べればよかったのに。
もむもむ、あ、このスパウまい。

「それがどうかしたの？」

「……………いや 別に……………」

む？むぐぐ！？つまっひゃ！？

「むぐぐぐ！？」

「お、桜華さん！」

バンバンと僕の背中をたたく葉桜さん。ちょ、今度は出る！？

「……ごくり。むう、よかった出なかった」

何とか飲み込めました。恐るべきスパ！可愛らしき葉桜！あれ？二人ともいつの間にかいなくなってる？

「二人なら、喋りながら出て行きましたよ？」

ふむふむ、そうなのか。

さうて、どうしよっかな。

1、葉桜さんといちやいちや

2、葉桜さんとむふふ

3、原作介入

さあ、どれだ！

一番一択にしたいな。二番も捨てがたいんだよね。三番は泣いてもらうしかないのかな。

むう。これを葉桜さんに持ちかけたら、絶対二番選びそうなんだよな。

原作介入しようかな。なんて贅沢な悩み！

それには、放課後まで待つ必要がありますね。

それまで、一番だあ！

「葉桜さん！いちやいちや」

「桜華さん！いちやいちや」

皆「（仲が良過ぎて気持ちが悪過ぎる）」

ん？何か聞こえた気がするけど、いちやいちや。

・ ・ ・ ・ ・

いちゃいちゃ(ry

む？あ、授業出るの忘れてた。いけねいけね。

「ふう、さて、原作介入と行きますかね」

「ん？原作？」

おっと、口が滑った。葉桜さんにはないしょ。

「剣道場にれつつごー！」

「おー！」

あ・る・こ・ご・あ・る・こ・ご・私は、元気い・。
歩くの、大好きい・。どんどんゆ・こ・お・。

不良に、異常に、で・て・お・い・で。

探検し、よお。世界の果てまで。

友達沢山、うれし・い・なあ。

着いたあ！

「なんか力が沸いてくる！はっ！これはまさか、イチヤイチヤしたお陰だろうか！？そ、そんな効果があつたなんて……」

気持ちの問題だね。今なら地球も破壊できる気がするよつな気がする。

スーパードヴァア！ってね。

???side

グシャアッ

「つたく……」

ある中庭

「ホント！アテにならねえ生徒会だよなあ」

その木刀をもった青年は

「僕は追い出せつつって頼んだんだぜ？」

血塗りの木刀にかえ

「雑草育ててどうすんだよ」

後頭部から血を流して倒れている青年を見下しながら

「アホが！」

そう、言い放った

side out

桜華 side

あれは……、みかん？そっちじゃなく、日向くん？
なんでその下で不良さんたちが血まみれで寝てんだろ？

「ったくよ」 高校じゃいい子ちゃんを通したかったんだけどナ
」

なるほど、理解した。

あの人数を相手取って、手傷一つついてないとは、まあ、普通ですね。

それなりの剣士といったところでしょう。あのみかんくん。

だが甘い。狩るつもりなら、木刀じゃなく真剣を……時代が違うか。

「……桜華さん、あの人、殺してもいいですか？」

「ダメです」

何恐ろしいことを。

僕が殺すんでダメですよ。

「勝手なこと吠えてんじゃねえよ！ たった今思い出したわ 俺は昔 剣道少年だったんだよ！！」

まあ、ここで諦めてたら助けなかったんですけどね

やるか

「剣道三倍段って知ってつか！？ 僕はあんたらの3倍強いって意味だ！！」

ガシィ

みかんくんの木刀を二つの手が、あれ？二つ？

「ああ、善吉君ですか」

「おお、桜華じゃねえか」

「頭は大丈夫そうですね」

「大丈夫に見えるか？」

「見えます」

「なら、そうなんだろうぜ！」

二人でみかんくんを見据える。視線で射抜く。突き刺す。決る。

「ひつ…人吉！と神城！」

おお、名字で呼ばれるのなんか新鮮。

まあ、今からこの人はキズものになるけどね

「へっ…やっぱ お前は妨害すんのな、寝てりゃいいのに」

「…別に その連中が立ち上がらなかつたらほっとくつもりだったんだけどな」

「奇遇ですね。僕と同じです」

「ああ！？だったらスツこんでろよ！学園施設を不当に占拠してる雑草どもをむしってやったんだ 僕は正しいだろうが あアン！？」

「ああ…日向 お前は正しいよ」

「そうですね。不良が悪いという点は認めましょう」

『だけど めだかちゃん（さん）はもっと正しい』

「めだかちゃんのやることはいつも正しいんだよ 俺は2歳の頃からその正しさをずっと見てきた」

「みかんくんがなにしようと思手だが、いらついたんでぶっ飛ばします」

「あいつのことは俺が一番よく分かってるんだ 無茶苦茶だけど意味不明だけど」

「キスしようしたりキスしようしたりするけど」

「あいつの正しさは俺が一番よく知ってる！」

「ちなみに僕は二番だ！」

「って、さつきから桜華うるせえよ！」

「しょぼん……」

いいんだいいんだい。どうせ僕なんか、うるさいですよ。

「ああ、締まんねえな。

他人のためだの

人助けのとかだの

高尚な気持ちなんて

俺は持ち合わせてねーが」

「僕は少しながらもってます。
こだまでしょうか？いいえ誰でも」

「もしも お前が

めだかちゃんの正しさを否定しようってんなら
そいつは俺が許さねえ！！」

……かつこいいぜ善吉くん！主人公やつてるぜ！

「……………ケツ」

あ、唾吐いた。ばっち。

「お前が許さねーからなんだっつーんだよ！」

……………あゝあゝ！？

「どいつもこいつも面倒くせえ！」

面倒なのはどっちだよ

「お前！剣道三倍段って知ってっ」

「三倍段？ああ、三京倍段です、ね！」

「カツ！？」

「端的に言うと知ってますよ？まあ、僕はあなたの三京倍強いっ

「て意味です」

すごい沈黙

あれ？空気読めてなかった？いいんだ、噂の雰囲気ブレイカーとは僕の事だ。

「テヘ」

ダメだった

次の日

「はいはい、素振りは十万回。そのあと僕と一騎打ち
負けたら学園の周りを十周 そのあとまた僕と一騎打ち
これの繰り返しですよ」

『コイツ、黒神より鬼だ』

「私も応援します！」

『デレッ』

「……今デレた奴！素振り百万回だあああああ……！！！」

僕、日向くんと一緒に剣道部の始動を始めたとき

16話・三倍段？知ってるに決まってるでしょ（後書き）

ど・う・だ

どうでもないですね、こんな話WWW

では、次回も宜しくお願いします

17話・可愛いワンちゃん（前書き）

動物“が”、大好きなんだよ……な桜華君です

では、どうぞ！

「あい うおんちゅー」

英語は苦手なんですよね。漢文は得意なんですけど。いや、異常を使えば知能チートMAXなんですけどね。それじゃあ面白くないでしょ。

「図書室にでも行こうかな？」

暇つぶしには図書室。あたりまえだ。

一瞬、パソコンを使ってペンタゴンにクラックしようかなと言っ危ない妄想が浮かんで速攻で消えた。そして、図書室に行こうとゆったりだらだら歩いていると。

「ん？ここ理事長室だ。あの絶賛黒目はどうしているのでしょうかね」

ちよこつとのぞくことにした。

「失礼しまゝす」

ドアを開ける。

「ああん？邪魔だ、どけよ」

「名瀬ちゃん。いきなりそれは酷いよ」

制服の下にタイツを着て、顔全部包帯で巻いている（何故かナイフが刺さっている）女の子とこの時期にニット帽、さらに露出委員会もビックリなほどの露出をしている茶髪の女の子

まさか！？理事長あの御老体でこの女の子たちを……ないな。

「すみません、どうぞ」

「ん？お前……神城桜華じゃねえか」

「お！ほんとだー」

「ハテ？ナンノコトヤラワカリカネマスナ」

「……棒読みだぞ」

「見た目と違って愉快的奴なんだねー」

……あなたたちは見た目も何もかも愉快だよ。

「じゃあ、どうぞ」

「おう」

「またねー」

また会う約束なんてこちらからは頼んでないよ……別に良いんですけど。

それから、理事長に歩み寄り。

「さて質問です。あの少女たちはだあれ？」

知ってるけどね？知ってるよ、流石にあの二人は知ってるよ？

「ああ、君ですか。まあ君になら教えてもいいでしょう。『十三
ディン・パーティー
組の十三人』と言うのは知ってますか？一応機密事項なのですが」

「知ってますとも。僕が小さい頃に勧誘してきたのはどこの誰で
しょうか？」

「は、はは。そうでしたね。いや、年には勝てませんよ」

「さらに言うと、あの二人の事も知っていますので。質問したの
は暇つぶしのためですよ。ちやお」

ソファから腰を上げ早々に部屋から出る。

「……………ああ、あと。そんなに殺気を出していたらバレバレで
すよ」

一応理事長の後ろの人に声をかけておく。
あんなにビシバシ殺気あてられてたら、こっちが興奮するだろが。

「失礼しました」

そう言って扉を閉める

t h i r d s i d e

桜華が去った後の理事長室

「宗像くん。殺気だしてましたか？」

自分一人しかない筈の部屋に声をかける

「いいえ。殺そうとするのに何で殺気を出さなきゃいけないんですか」

腰かけていたソファの後ろから、少し薄めの黒髪をした宗像と呼ばれた男が

「じゃあ、あの子は……」

「そうですね。完全に気配を消していたのに、僕を察知したということになります」

「……ふむ なかなかの逸材なようですねやはり」

黒目と白目の比率が逆になっている理事長こと不知火袴

「……（化け物）」

理事長の眼を見ながらそう思った宗像であった

side out

桜華 side

「ふむ。この図書館にはおいてないのだろうか？」

どうもです。

ふむふむ、文学少女おいてないなここ。あの恋愛ストーリーは神だ
と思うんだ。うん。

「むむ！？なんかすごい情報量の本がある気配！」

「このことですか？」

「そうそう、それぞれ……だれでしょう？」

目の前に居るのは、黒髪で鳩眼鏡でおさげな女の子。けど、いもく
ない。どっちかって言つと、かなり可愛い！こういう、文学少女的
な感じの人、いい！

「三年十三組の、上峰書子と申します。仲良くしてね」

「仲良くしてね」

え？なんか知らんけどこれって友達になったとみてもよいのだろう

か？

それにしても先輩か。見えんな。

「この本、みたいですか？」

「何が書いてあるんですか？」

「私が今までに食べた者の全ての情報です」

「ふうん。それはなんというか……満腹キアラ？」

「そうですね。食べ物じゃなくても食べられますけど」

「にや、にやにいい！？」

「ッ！？ど、どうしたんですか？」

「……いや、驚いてみただけです」

「変人ですね」

「そうですね。人かどうかも怪しいですが」

っっていうか人じゃない。

「……やっぱり、変人ですよ」

「……ですね」

「まあ、神城桜華くん。あなたは授業に出ているんでしょう？な

ら、もうすぐ始まりますよ
「

「マジでか！？やっべ、後30秒じゃん！？あ、お話し面白かったですよ。じゃ
「

「……はい」

こういう時の、異常！【素晴らしファンタジアきこの世界】！

そのあとドンガラガッシャアアンという古臭い音を立てて、なんとか授業に間に合った。
みんなの視線が痛かった。

以上、終了

って、訳にもいかないんだなこれが。

「葉桜さん！いちゃいちゃー」

「桜華さん！いちゃいちゃー」

いちゃいちゃしていると

ガウッ ガウッ ガウッ

なんかすごい獰猛そうな
ワンちゃんが吠えてきた。 ん？なにに？

【我の前でいちゃいちゃするな！さもなくば貴様等の内臓を喰いちぎってやろうぞー！】

だそうだ。なんとも傲慢なワンちゃんだな。
まあそれも可愛いんだけどね！

僕は動物が好きだ！好きだ！好きだ！好きだ！好・き・だ！

まあ、葉桜さんの方が好きなんだけど。

ん？あれは……巨犬！？

いや、あのナイスばでー。めだかさんだ！さらに言うとまたボロボロになっている善吉くんがいる。

じゃあこの犬は、あれだ。ウルフ・ハウンド。狼狩り犬だ。ヘタすると雷並みに強いかも。いや、ないな。雷こそ最強の猛獣だ。異論は認めちゃう。

雷（前作を参照とのこと）

なんだ今のは？気にすると負けだな。

「ねえねえ桜華さん。やっぱりめだかさんって……」

「一周回らずとも普通にバカでしょうね」

頭が悪いのと、バカなのとは全然違うんですよ。これが。

「けど、いいなあ、おっぱい……」

「葉桜さん？そのていどの貧乳で悩んではいけませんよ？ほら、不知火さんを見てください？どう見ても小学生にしか見えないでし

よう?」

「……そうですね!」

少しだけ元気が出た様子。やっべ可愛い。

僕、原作が終わったら葉桜さんと結ばれるんだ……。テヘ

「さあ 怖くないぞ」

ズオォオォオォオォオという禍々しそうな擬音が聞こえてくる。

めだかさん、天才がない説は別に良いのですが、自分の力ぐらいは把握しようぜ。ワンちゃん怯えちゃってるじゃない。

「撫でてやろう

ぎゅっとしてやろう

一緒に遊んでやろう!

だからさあ!私に貴様を触らせる!!」

……本気でぎゅっとしたら、骨が粉々に……。割愛。

「えっ オッ俺!?!」

君以外に逃げる場所がどこにある

「めだかさん、相変わらずですね」

そこで助け舟をだそうかと。

「……桜華同級生」

「自分の力は、把握しなきゃだめですよ？」

善吉くんの後ろに隠れているウルちゃん（仮）の方に向かい、だっこする。

あああいて、テケテケとめだかさんの方に行って。

「はい、どうぞ。撫でてぎゅっとして一緒に遊んでください」

つと、その前に。ウルちゃんの間を見る。怯えが抜けていない。む、どうしようか。こういう時の、獣笛！

「ぴいー。おk？」

ウルちゃん（仮）が頷く。

「はい、どーぞ」

「え？あ……」

「くうーん……」

「よし、一件落着。まあ、依頼の方は大変だと思いますけど、あれです。自分らしく頑張ってください。では」

そのあと、めだかさんがぽーっとしていた。ふむ、計算するともう十年以上動物に触れていなかったんだからしゃあないしゃあない。そのあとめだかさんがにこやかに笑ったのを見て、その場を去った。

そうして僕の物語は

「動物つて、いいな」

終わらせねえよ!?

17話：可愛いワンちゃん（後書き）

最後の方しか本編関係ない

原作涙眼

では、次回も宜しく願います

18話・剣道部（仮）（前書き）

笑えねえな

では、どうぞ！

18話：剣道部（仮）

お金がない！いや、私財はあるんですけど、部費がない！

当たり前と言っちゃ当たり前なんだよ。だって、つい最近まで不良のたまり場だったんだよ？

今期の部費もゼロと決まった後の創部ですから、なんもかんもねえっす！

「どうしよう……私財を投下しようか？」

「それはやめといた方がいいぜ。ほら、なんか先生達そういうのうるさいし。他の部活からも変な目で見られる」

話しかけてくるのは日向くん。この人も改心しましたから、前とは比べ物になんねえほど性格がよくなっております。

「せいあーっ！」

「なんで言われた通りできねーんすか!？」

「あア？うつせーよ!！」

「……むっ、困った」

「神城よ。喧嘩止めてくんねーか？練習になんね」

「……むっ、困った」

「まともな奴がいねーのかよ」

失敬な。ここにちゃんといるではないか。

「あ、そこ。喧嘩しているようなので素振り千回追加」

『ぐつ。この鬼め』

「……二千k『イエッサー!』!」

よろしい。……でも、困ったなあ。

「桜華さん桜華さん。こんなのが部活動に配られてますよ?」

葉桜さんがチラシをもってきた。その紙には。

【部活動対抗 水中運動会】

- ・募集要項：部活動であること。以上
- ・優勝した部活動は部費の増額予算枠総取りとする。
- ・種目はその場で決めます
- ・生徒会も参加しちやったりして
- ・ちょ、めだかちゃん書いてる途中……脱ぐなあああ
- ・失礼。会場日時は新設された50メートルプール日曜日だ。是非参加されたし。

・なお、協議中の事故は自己責任だ。

「こ　　れ　　だ！！！」

なんだこれ。僕のチートを存分に生かせるじゃないか。セフィロスは水中でもチート。異論は認めん。セフィロスさんって言うかFF7の方たちの身体能力なめんじゃねえぞ？

もはやあれだよ。重力無視してるよ。主人公のチョコボ頭にいたっては、高度数百メートルから落下しても涼しい顔してたからね？

さらに言うと剣道部の皆も僕の変態的なまでにスパルティックな訓練にもう一カ月以上は付き合ってますからね。そんじょそこのアスリートには負けない仕上がりになっております。

にやり

勝てる、勝てるぞお！

生徒会？なんて敵じゃねえ！まったくもって敵じゃねえ！

競泳部？笑わせる！札東の海で泳いでろ。

柔道部？卑怯なこととして勝つのなら、正々堂々不意をうつてやんよ！

美術部？絵具でプールでも描いてろ！

陸上部？チーターだって水の中じゃあ太刀魚にも勝てねえんだよ

ボクシング部？ボクシングかんけーねーじゃん♪

バスケット部？バスケットがなんだってんだ！

サッカー部？水の中で何を蹴ると？

書道部？筆を持ち込むな！

食物部？何する部活なんだよ！

ラグロス部？……えつとなんつだっけ？

野球部？ここに最強の敵が（笑）

放送部？ノーコメントでお願いします

オーケストラ部？防音設備整えないと風紀委員会に殺されるぞ！

・ ・ ・ ・

敵じゃあ、ねえええええええええええ！
いける！イケるぞおおおおお！

まさしくあれだ！チャアアアンス

「みなさん！これ、参加するぞ！」

「おおおおおおおおおおおおおー！！！！」

イ
ケ
ル

諸君
私は
(r
y

第一次ドキッ 水中美少女決定戦 状況を開始せよ

征くぞ 諸君

・ ・ ・ ・

それから数日、剣道そっちのけで神城財閥所有のプールで特訓（えこれで最終的に水中での運動能力が高い人を選抜することになった。ちよつと大人げなさすぎる気がするが、気のせいだと思いこもうではないか！

我が精鋭たちよ！その力を我に示せええええ！！

「桜華さん。どうですか？」

くふッ！？いかん、鼻血が……。スク水つて反則だろう。鼻血のお陰で頭に上っていた血が抜ける。あれ？なんで僕はあんなに熱くなっていたんだ？

途中で少佐が乗り移ってきたが気のせいだろうか？

「ちよ、やべ。鼻血とまんね。やつべーこれやつべー」

『…………デレ』

「いまでれひゃやひゅ、ふーるおうふふにふっかいひゃ（今デレた奴、プール往復二十回だ）」

『鬼め』

「らんれひゆか（なんですか）？」

『アイマム！曹長！』

違う、少佐だ。いや違う桜華だ。

「ふごふご。ありひやとーございまふ」

「どういたしまして」

ニコツと笑う葉桜さんにまた鼻血が出そうに……。

あ、葉桜さんというんですね？普通にプールに入ったら水が原子までばらばらになって核融合を起こしかねないので、神城財閥研究部が、総力を挙げて開発。もちろん葉桜さんのためだ。超薄めの、形状記憶合金を基にした、ゴム。その手袋をはめている。

本人からしたらつけている感覚がないらしく、相手の体温もほぼ変わらないぐらい分かるみたいだ。さらに言うと強度が半端ない。

ああ、葉桜さん可愛いよ葉桜さん。

え？お前の泳力はどの程度なのかって？

水中で思いつきり水を蹴ったら水が爆ぜた。以上。その時門司先輩と日向くんが巻き込まれて怒られた。ショボン……。

そして訓練を続けること数日。メンバーが決まった。

門司先輩

日向^{みかん}くん

僕（え

ということになった！この布陣、まさに理不尽！……スベッタ。

そして、戦争^{うんとっかい}当日

『さあ 貴様たち 戦争の時間だ』

『働かざるもの喰うべからずというが

これは心理に反している』

『私たちはむしろこう言つべきなのだ』

イチャイチャしたもん勝ち

『働いたものは食ってよい！』

貴様達 欲しい部費^{モノ}は勝って得よ！！』

さあ

泳いで、飛んで、走って、投げて——沈めてやん
よ……………

18話：剣道部（仮）（後書き）

笑えねえな

桜華くん少佐が乗り移りやがった

なのでしばらくはこの漫画は幽霊と戦う感じの絵巻系な感じになります

ならねえよ

では、次回も宜しくお願いします

19話：運動会と書いて戦争と読みます（前書き）

まずは謝罪

すみません。20日以上も更新できなくて。本当は、したかった。けど、ある事件の所為でモチベーションがダダ下がり……。――

僕はまず、ルーズリーフに下書きを書きます

それが消失しました（・|・）

10話分ぐらいのが……消失

僕物語の消失

それに、虚無の方も……。そのあと一晩ときかず、3日ぐらい枕が地味に濡れた。

暗闇の中で

「濡衣さんのターン」

とか意味の分からんことを呟いてた記憶がある

と、まあ、謝罪と言う名の言い訳でした

本当にすみませんでした

それでも見てくださるという方に感謝をしつつ

では、どうしてー！

19話：運動会と書いて戦争と読めます

戦争、めっちゃ楽しみ。

おつとお、いきなり失礼しました。桜華です。ん？久しぶり？何のことですか？一分も経ってないですよ？

第一競技に出るわけですが。僕、門司先輩、日向^{みかん}くんの三人ですね。というよりその三人以外名でません。多分ね。

第一競技は、水中玉入れ。男子はヘルパー付き。
問題ないな。

『部活動対抗 水中運動会！』

『第一種目 水中玉入れ！』

『でわでわっ！これより開始したいと思います！！』

なんだ？この声の人もものすごく幼女臭（いい意味で）がする。
貧乳。低身長。寸胴。この三拍子！

「桜華さん？何を考えているんですか？」

「ん？ちよつと幼ＺＹゲフンゲフンツ！？いえ、ちよつと身体的神秘について考えていました」

「ふうん。ほら、早く行かないと不戦敗になっちゃいますよ？」

「ああ、そうですね。行ってきます」

いそいそと逃げる！

あぶない。葉桜さんの禁句シリーズ！

その？『貧乳』

この状態は僕でもとめられない時が多々あります。ということは誰にも止められません。

「おゝい。遅いぞ」

門司先輩が呼んでいる。まあ、こんな情報は誰でも知っていることですしね。

とりあえずは、最初は投げる。

プールにつかる。ふい、なんか最近プールの仲のほうが落ち着くと言う変な現象が起こっている。人魚化現象と呼ぼう。

あ、えっと、あの人は、そう。鍋島猫美さんだ。

「こんな塩素拾いみたいなゲームで 邪魔つけない浮き具つけとったらどーもならんやろ」

「まずもって沈むことがでけへんねんからな！」

「……………あなたには邪魔つけない浮き具が二つもあんだろ」

ぞわり。そう、感じた。静かなる殺気を感じた。今までにないぐらいの殺気だ。

……誰かとはあえて言わないでおきましょう。あの人の知名度にお

任せします。

「……………適切なハンドのつもりですよ」

善吉君がジト目で猫美さんを見る。

「それに猫美さん　そこを呼んで代表選手を女子で固めてくるのはアンタくらいのもんです」

うん？目つきがよくなっているが、あれは阿久根先輩ですね。

「ククク！まあ　部長職こそ引退したけども！」

「ウチは反則王の称号まで捨てたわけやないんでな！」

（……………何でこの人はこんな堂々と卑怯なんだ…？）

たゆんという擬音を発しながら、某僕のお姫様が嫉妬しそうなあれを弾ませながら、

「構わん　反則も卑怯も　それが貴様の志なら貫くがよい」

この人の専売特許。凜っという効果音を（ryめだかさんが現れた。

「無論　私は私の志を貫くぞ」

「いい戦争をしよう　鍋島三年生！」

手を差し出すめだかさん。鍋島先輩は、まあ、笑いの裏に焦りあり。ってとこですかね。

めだかさんにハンドがない。これは絶対おかしい。言いたかった

ただけだね。まあ、勝つけど（自信满满モード）

「ん？桜華ではないか。貴様には色々と負けてきたからな。今度こそ勝つぞ？」

「今回ばかりは譲れませんからね。最初から全力で行きますよ」

今絶対火花散ってる！そう確信できる！

「なあなあ人吉くん」

「なんですか？」

「あのスーパーでモデルな神城桜華と、スーパーで完璧超人なめだかちゃんはどうい関係なんや？」

「ああ。俺と同じ幼馴染ですよ。めだかちゃんに、負けるってことを教えた奴でもありますね」

「はーん。そりゃ、なんというか、えらいやつだな」

「そつすね。俺の知る限り、あいつとおんなじくらい凄い奴なんてめだかちゃんぐらいしか知りませんし」

「ふうん。随分と神城クンをかうんやな？」

「ははっ！ダチっすからね」

む？なんか今ものすごく幸せな言葉が聞こえた気がする。気のせいではないと信じたい。

『あ あら！そんなことを言っている間にもう時間一杯ですね！』
『みなさん 準備はよろしいでしょうか！位置について よおお
おい！』

『どん！』

周りではヘルパーが邪魔で潜れない人が多発。さらにお手玉が水を吸って重い。

とりあえず、そんなこと関係なしに潜る。浮力がなんだ。そんな力、力でねじ伏せる。

1 , 2 , 3 4 , 5 , 6 , 7 8 , 9 , 10

とりあえずはこんなもんか。そこで視線を横に向ける。めだかさんが潜水していた。

いや、ヘルパーないからと言って、お手玉20個全部持つていくのはどうかと思うよ？

「コポコポ」

ん？ちよつと息が苦しくはないな。

その時、ちよつとめだかさんと眼が合う。

「ニヤっ！」

してやったり顔、ドヤ顔をされた。

負けてられっか！

1 1 , 1 2 , 1 3 , 1 4 , 1 5 , 1 6 , 1 7 , 1 8 . . .
. . . 1 9 , 2 0 !

プールの底に浮力を無視して両足をつける。

「コポポっ！（いっけ！）」

一気に水面に浮上する。

「ぷはっ！日向くん！ちょっとこっちきてください！」

「なんだよ。こっちもお手玉取れなくて急がし……お前全部取ってんじゃねえか」

「これ持つて。絶対に離さないでください？」

お手玉全部日向くんに渡す。

「体を硬直させてください」

「ちょ、なにする気だっ！？」

「投げる気です！」

一旦水中に潜る。

そして、日向くんの両足に標準をセットして、一気に浮き上がる！！

「ちょ、なにする、のうえわああああああああああああああああッ！？？」

そのまま綺麗な弧を描き、かごにダイビングシュートしてくれた日向くん。うん、ウルトラ上手に投げました」

しかし、競技が終わってみれば……かませ犬の柔道部以外のほとんどの部活が20点とってた……僕の頑張りは、一体……。

へんツ！？別にいいんだい！どうせ僕なんか、僕なんかッ！僕ですね。はい、取り乱しませんでした。やっぱりこれぐらい張合いがないと、ね？それにしても。

「今回最大の相手は、競泳部、かな？」

なんと、めだかさんを抜いて一番最初に静かに20点獲得したんだから、凄いよ。

まあ、いいさ。最後に笑うのはこの僕だ！（かませ犬発言乙）

『第二種目は水中二人三脚でーっす！！』

らしい。

これは、日向くんみかんに犠牲になってもらうしか「また僕かよ！先輩はどうしたよオ！？」先輩にそんなことしたら失礼でしょうが。

不知火さんは生徒会と競泳部の走りに期待しているらしい。僕、落ち込む。

いいんだ。真打ち登場とか言わせてやるんだ！

「部費の為だ。日向くんみかんには悪いが、犠牲になってもらうしか…」

「それしか、ないんだな？」

「……ええ」

「なら、僕も男を張ろうじゃねえか！」

み、日向くんみかん……。

「わーかつこいいなー（棒読み）」

「神城、てめえ」

「まあまあ。さあ、始まりますよ」

『位置についてよおおおおい…』

『どんっ!!』

とりあえず、生徒会の犬と猿の仲的な感じの二人に一言。
醜すぎる。以上。

「おいおい、これって僕犠牲にならなくていいパターンの奴か？」

「まあまあ、今からですよ。ぶつちぎりますから」

泳ぐ体勢に入る僕。それを日向くんが必死で止めようとする。

「ちょ、僕がおぼれ死んじまうって！」

「大丈夫です。体は強く打ちつけるでしょうが、10秒ほど息しないください……」

神経集中……スーハー。よしっ!!

「行きますっ！」

「カッコよく言っつけど全然カッコよくねえんだよおおおおお
おおお！」

バツシャバツシャという音を立てながら突き進む。後ろで「ぷるう
あッ！？ほベッ！？ほベッ！？あべしッ！？」などという悲惨の
声とともに水面に打ちつけられている憐れな日向くん。憐れww
けど、あとちよっと！

「せりゃッ！」

よっしゃー、一位ー。ん？なんか空気読めみたいな雰囲気バリサ
ン。

僕は空気読まない子ー。(。D)あーあー聞こえないー。

「て……め……神城お」

「犠牲御苦労でした。休んでいいですよ」

「このくそぼ……け……」

気絶しちゃった。

「葉桜さん。手当お願いします。まあ、あんまり体に負荷がかか
らないようにはしましたけど、ちよつとばかし激しすぎる運動だっ
たようですから」

いや、本気で泳いだと思った？

本気で泳いだら、日向くんが破裂したミカンに……。想像できてし

まう自分が怖い。

「手当て終わったら、葉桜さんも出ますか？」

「え？いいんですか？」

「いいんじゃないですか？」

ほら、葉桜さんも大概身体能力があれだから、これ以上はチートかな？と思つて、ちよつと外れてもらつてました。

まあ、競泳部がいるので別にいいかな？生徒会も凄いいし、はっきり言つて負けそう、とまではいかないけど備えあれば憂いなし、転ばぬ先の葉桜さん。

『えゝ、色々予想外すぎる展開ですけど、どうでしょうか？不知火さん』

『そうだねえ 予想外と言つちやあ予想外だけど、まあ、こういうこともあるんじゃない？』

『なんとも寛容な心をお持ちの不知火さん。でわでわ、次の競技はウナギつかみどりです！参加者の方はお一人だけです』

えつと、最初が20点で次が15点だから35点ゲッツしてんのかあ。これで、次僕が行こうものなら、100点は取れる自信があるよ？

まあ、いいけど。

「さて、と……」

僕の本領は、ここからですね。

「先輩、次僕が行ってもいいだ「私が行きますね！」え？」

え？葉桜さん？え？

「えつと、僕はいいんですけど、にゆるにゆるした奴大丈夫なんですか？」

「私と桜華さんの夜はもつとにゅ」「だあああああああああ
！？」じゃありませんか」

なにをいつてやがるツ！ただでさえ、今規制がかかっている時代なのに！ん？メタ？しらね。

「じゃ、行つてきますね」

「は、はい」

意気揚々と出かけてしまふ葉桜さん。けど、ほんの少しだけ瘴氣が出ていた。

まさかツ！？

「嫉妬？」

周りの女子の胸がどう見ても全員C以上はある件について、葉桜さんの琴線に触れまくっている！

ま、まあ、僕は、大きいのが嫌いってわけではないですが小さい方が……って、何言わせてくれとんのじゃ！？……悪乗りですね。

愛されてるよね？愛されてるよね？愛されてるよね？愛されてるよね？愛されてるよね？愛されてるよね？愛されてるよね？愛されてるよね？愛されてるよね？愛されてるよね？

「ダイジョウブ。これで役に立つたらキット愛し続けてくれる」

『それでは、第三回戦　よおおおおおい』

『どん』

『私の仕事がつ！？』

競技内容は、つかみどり、だけど、どうせ、あとで、たべるん、だから、生きた、まま、つかむ、必要、ない、よね？

「最初は、十匹、かな？」

ガガガガガガガガッ！

指、十本しかないから……。壺、入れて、あと一回……。

ガガガガガガガガッ！

はい、終わり……。

『これはどうしたことかッ！？剣道部マネージャー春咲さん、20点獲得っ！？』

『そうだね、“普通”は指でウナギを貫くなんて出来ないだろうし、ともかくやらないだろうね』

私はすでにこの場に降り立っている。説明など不要……なんてねッ！

「桜華さん！」

きつと今の私には尻尾がついている！ナデテアピール！

桜華さんにはにつこりとほほ笑んで、頭をナデナデしてくれる。

桜華さん、愛してます。

桜華 side

よかったあ、死人でなかった。

いやほら、葉桜さんなら誰にも気づかないように胸がおつきい人を殺すようなことをしそうで……僕の杞憂だったようです。

「次は、なんだろう？」

騎馬戦らしいです。え？なんかいろいろと省いてないかって？手抜きじゃないかって？

何のことやら分かりかねますな。こういつときはこう叫べばいいんですか？

キングクリムゾン！

はいとんだ〜。

キングクリムゾン！

あれ？二度連続？

あれ？めだかさんと競泳部の喜界島さんが取っ組みあってる？あれ？ま、まあいいでしょう。世界の意味だ、とりあえず流してもらいましょうか。

「つとお！」

「ちッ！よけられたか」

「む、あなたは」

「みんな大好き猫美さん！」

「……自分で言うようなことかな？」

その手には見るからに反則的な量の鉢巻きが握られていて、やっぱり反則王なんだなあと思ったり。

けど、強さが反則なのではなく、反則から来る強さなのであれば、まあ、どうとでもなる。

「あ、あれはッ！？」

「……」

「巨乳の女が水着を脱ぎ始めとるッ！？」

「……」

僕以外の男性諸君が猫美さんの言った方を向いたのは仕方のないこ

とだと思う。

「貧乳の幼女が百合っばいことw「なんだとッ!？」

「……」

……… あ、しまった。思わず振り向いてしまった。

え?問題はそっちじゃないって?お前の人生はここを起点にねじ曲がるって?

はっはっはゝ。気にしない

「あれ?鉢巻き取らないんですか?」

「……… 気の毒過ぎてな。勝負は、あとまわ「じゃ、もらいますね?」なッ!?」

よしげとゝ。

なにしかかって?騎馬と騎馬の間を飛んだり跳ねたりして、飛び移っただけですよ?

ひょーいひょーいとね。

ピピイッ

『そしてここでホイッスルッ!』

『部活動対抗水中運動大会!』

『全競技 ここで終了でーす!!』

……… あれ?なんかいろいろと見逃した感がありまくるんだけど………?
いや、原作に憧れるものとしてはやはり見ておかねばならないところを見逃した気がするんだけども!?

競技に熱中し過ぎて、絶対に見逃しているんだけども!?

……金の力、恐るべし……。

けど……。

『優勝は神城桜華率いる剣道部（仮）チーム!』

『おめでとございます!』

やっぱり、お金って、必要ですけど、重要ではないですよね?

さあ、みなさん! 新生剣道部に盛大な拍手を!

『は?』

……KYですみませんでした。

このあと、部費は今年いる分だけもらって、みんなに分配しましたとき。

めでたし、めでたし。

「あ、葉桜さん。生徒会の皆さんと一緒にウナギ食べようって言うてますから。行きましょう?」

「はい。」

ウナギ、全部天然ものだったっていう……。

19話：運動会と書いて戦争と読めます（後書き）

なにこの手抜きww笑っちゃうぜ！w

一時期は終わるかと思っていたためだかボックスも息を吹き返してきたし

楽しみだww

では、次回も宜しくお願いします

閑話：お母さんの日記③（前書き）

間にあつたあああああああああああ！

母の日、残り30分

けど、自分マザコンなので、いつだって心は母の日なのですよー。

では、どうぞ！

閑話：お母さんの日記3

○月×日

桜華と葉桜が中学校に入学。

飛沫ちゃんと蛾ヶ丸くんどっかに行っちゃったけど、大丈夫かしら？

まあ、あの子たちなら弱々しく、強く、逞しく、生きていけるかな？

けど、心配だなあ。

けど、中学校はめだかちゃんたちと一緒にの学校になったし、別れも出会いも、我が子を強くするツ！ってね。

二人とも、中学校入学おめでとう

お母さんは、とっても嬉しいよ

○月□日

桜華と葉桜のモデルとしての人氣が恐ろしすぎる。

ふっふっふ、我が子の可愛らしさを、目に焼き付けるがよいわッ！

後々には、宇宙にでもこの可愛さを宣伝しに行こうかしら？

多分、全宇宙で一番かわいいしかっこいいと思うんだッ！

親バカで結構。可愛いんだから仕方がない。

月×日

……桜華が全身骨折で、病院に送られてきた。

医師の見立てだと、そう長くない、とのことだったけど

全然信じられなかった。だって、私の子供だもん。

私、私の子供たちがいない世界なんて、ただの空間にすぎないわ。

全然、つまらない。

そう思ってたところに、桜華が誕生して、色々あったけど

愛してる。もちろん葉桜も。

骨折は、一日で完治したね？流石私の子ッ！

無事でよかった……二人とも、愛してるよ。

途中、お見舞いに来てくれた球磨川君が、めっさ可愛かった！

ちゅー、えへへー。

月 日

中学時代もいろいろあつて

最後の方もなんかいろいろあつたみたいけど、人生だもんね。

私の子供の人生が、つまらなく終わるなんてこと、あるわけない
ぜ

修学旅行に行つて、帰ってきたらなんか

「お母さん、紅くて強い人、知ってますか？」

つて聞かれたら、すぐに潤ちゃんが思い浮かんだ。

私が起業したときとか、トラブル起こした時にいっつも助けても
らったな。

お年頃も近いし、今度、久しぶりに会ってみよっかな？

□月×日

桜華、葉桜、中学校卒業おめでとうツ！

やばいな。やっぱり泣いちゃったな。

えへへ、はずかしッ！

その後は、めだかちゃんやら善吉君やら瞳さんやらなんやらと一
緒に、パーティー開いた。

楽しかったな！。

うん？球磨川君、何処に行ったんだろ？あ、そういえばあの子今、高二か！。

どうみても、年上には見えなかったけどね！。

うん！桜華も葉桜も、中学校卒業おめでとう！

○月×日

桜華、葉桜、高校に入学！

やばい、制服姿で鼻血が……。葉桜の、素足……。ぷはッ！

今度、夜誘ってみよっかな？うふふ、たあっぷりねえっとり、啼かせて、あげちゃう！

うん、これは決定事項ね。

なにはともあれ、二人とも入学おめでとッ！

○月 日

今日、潤ちゃんと再会した。

忙しい合間を縫って、頼んでみたんだ。そしたら

「ばっか。友達の頼み断るわけねえだろ！」

怒られちゃった。ぶー。

けど、横に橙色の男の子がいて「子供？」って聞いたら

「……ひひひ。そう見えつか？」

橙色の男の子は「げらげら」笑ってるし

まあ、楽しそうで何より！

世界を救ったとか言ってたけど、まあ潤ちゃん主人公体質だから、そのくらいのことはやってそうだよな。

月 日

今日、母の日パーティーが、あった。

そこには、瞳さんもいて、一緒に祝おうとのことだった。

めだかちゃんは、お母さんを亡くしているから、帰ろうとしたけど

そんなこと、私が許すとても？

全子供は、全て私の子供よ。仲間外れなんて許さない。

手抜きなく巻き込む。私のポリシー！

パーティーも、終わりにさしかかって

桜華と葉桜、善吉君とめだかちゃんが、スピーチを……

全、私と瞳さんが、泣きまくった。

その時KOKIAの「ありがとう……」がかかってて、もう、視界がぐちゃぐちゃだった

あれ？私の眼球、いつからアナログに？

……ありがとう、みんな。私、もう……みんな大好き！

月●日

最近、フラスコ計画が活発化してきたみたいなので、止めようかな？って思ってたなら

「僕の計画、邪魔、しないよね？」

全身にねじが刺さった、白髪少女？と出会った。

人を見て、嫌悪感を抱いたのは、初めてかしら？

まあ、帰ってもらったけど。

隣に、不知火半纏が、いた。

ふうん。

世界は、どんどん、面白くなっていくわね

桜華と葉桜なら、どんな辛いことでも、幸せにできると思う。

パタン

「だから、私にいっぱいいろんなものを見せてね？私の、愛しい子供たち？」

愛してるよ。みんな……。

閑話：お母さんの日記3（後書き）

ところでみなさん、今日は母の日です

母の日プレや、母の日孝行、いろいろされた方も多いと思います

一番は、今日も子供が笑っていたこと、これが一番母親にとってはうれしいことかもしれませんね？

僕は男ですから、一生分かることは出来ないでしょうが。

あと、母の日も30分です。

手遅れだと思わず、手始めに何かやってあげましょう

そう、いつもはつんけんしてるけど、ほんの少し、笑顔を向けるだけで

いいのかも、しれませんがね。

では、次回も宜しくお願いします

閑話：後輩との関係（前書き）

あの話が出来て

「桜華君にも、後輩いた方がよくね？」

後輩出現させることにいたしました

では、どうぞ！

閑話：後輩との関係

ピリリリリ

ん？なんだろう、こんな時間というほどのことでもないけど、まあ、寝る前のちょっとウトウトする時間に。

少し不機嫌になっちゃうね。

「はい、もしもし桜華です」

「そこで神城ですと言わないのが先輩クオリティ！」

……こいつか。

「何の御用かな？後輩クン」

「え、え、えー。先輩酷過ぎッ！私、わたしー、先輩とお話したいなーと思って久しぶりにお電話しただけなのにイ」

「酷くない酷くない。それとあんまり大きな声出していただけますかな？玄海サン」

「うはッ！？急によそよそしい！凧系ちゃん寂しいッ！寂しいッ！美しいッ！それこそ凧系ちゃんの真骨頂！ニシッ！」

「あんまり大きな声を出さないでいただけますかな？玄海サン」

「酷い酷い酷い酷いッ！先輩酷いッ！だってさー、中学時代は

いっつも葉桜さんにべったりでさー。凧系ちゃんのこと振り向いてくれないんだもん。ケツ！いいさいいさ、先輩はヤンデレが至高ということはすでに判明しているツ！今から登場すらしていない凧系ちゃんにとっちゃあ、キャラ付け設定付け全部後付け可能なだよツ！今からでも遅くはない。性格の改変なんて簡単だ。ただ脳味噌にそれとなくパターン信号を撃ちこんでやればいいだけのことなんだから！天然ものじゃなくても愛される！それがこの世界！創ろうぜ！ヤンデレをツ！ニシツ！」

……げんかい ないと 玄海凧系。 中学時代、僕の剣道部の後輩だった女性。

生ける機関銃とはこいつのことです。うん？今まで、連絡の片鱗もなかったのに、珍しいこともあるもんです。

「用はなんでしよう？今から葉桜さんと、ハッピータイムに口グインするつもりだったんですけど？」

嘘ですけど。

「ニシツ！いや、先輩あと数力月したら凧系ちゃんの力が必要になりそうな気がして。いや、ほら、凧系の知らせて言葉があるじゃないですか。それみたいなもんでしてね？いや、知らせつて言うより、予感？いや、直感？いや、確信？あと数力月もしたら、先輩の大っきらいな人がやってきて、なんかあの計画が再始動して、いや、再始動以前？まあ、それで後進育成的な感じになって、後輩を生徒会の後輩を育てるっていう誰得な感じになって、それで過負荷なお兄さんのせいで、5人しか残らなくて、その5人のうち企んではないけれど托卵ではいるっていう誰得な言葉遊びを発動して、生徒会を困らせるっていう、まさに凧系得ないとかみたいない感じになる気がするんですツ！」

「話の要点が見えてこない。50点」

「ニシシッ！先輩大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好きッ！風系ちゃん以外を見るだなんて許さないっていうヤンデレ属性創るまでもなく発動しちやいそうですッ！ひやつほおおおおおお！先輩最高ッ！至高ッ！至宝ッ！葉桜さん一人のものにしておくには、世界の半分を葉桜さんが所有していることになるッ！そんなことはダメだッ！資源は平等に、有効に、みんなの手で、枯渇させなければッ！搾りとるッ！絞り取るッ！纈とるッ！先輩最強ッ！先輩ひやつほうッ！先輩×××！」

「好きいつてもダメ。僕、二股とか無理ですから。いや、そういうのマジ無理だわ」

「無理でも何でもするんですよ先輩ッ！世界の為にッ！正義の味方になっちゃえッ！先輩にならできるッ！二股をかけることぐらい出来るッ！さあ、風系ちゃんの股を強引に開き控え目な胸を視姦しながら口をむさぼり、風系ちゃんの全てを味わうのだッ！」

「……恥ずかしげもなく言うなあ。勇気がいるのは最初の一言だけ。
あとは口を開け続けるだけで言葉が発射される、か。
ひきがね ひき だんがん いっほう

「……いや待てよ？こんな会話、葉桜さんにでも聞かれたら、TH
E E N D

読者の皆さま方今までありがとうございました。次回のKOFの
作品に薄くご期待ください

になっちゃううううううううううううううううううううううッ！？

そもそも、さっきから小さな声でしゃべってと言っているのに、何故トーンを下げないッ!? まるでサイレンサーなんて必要ありませんッ! だって、この口にあんなでかいものはいらないうでしょう? みたいな!?

「桜華、さん? 誰と、話していらっしゃるんでしょう?」か?

「おー、あい ちゃんと ひありんぐ!」

いつのまにか、僕の布団に潜り込んでいた葉桜さん。あれ? 手袋なんで外そうとしてるの?

なにになに? ギュってしてほしいと? 甘えんぼさんだなあ?

「あッ! ニシッ! 今の声は葉桜さんの声だ。お久しぶりです葉桜さん。あなたの恋敵こと風系ちゃんですよ。わーわー、わー、わー。おー、ぱちぱちー」

僕から携帯を奪い去る葉桜さん。ああ、 아이폰が。

「解体^{れんあい}すんぞ、こんにやろめッ!」

アイフォンに向かってそう叫ぶ葉桜さん。

か、可愛い……。

「あゝ、いゝけないんだゝいけないんだゝ。そんな汚い言葉遣いじゃ、先輩に見捨てられちゃいますよ? 大丈夫です、風系ちゃん

も先輩を独占するつもりなんてさらさらありませんから？聞くところによると【脅威ッ！？20回戦】まで行ったそうじゃないですか。そんなお強い“力”を持つお方を一人で相手取るなんて無理です無理無理」

「……甘いですね。そんなの嘘っぱち、本当は50「嘘ですよ」

「それで。まだまだ話したいことがあるんですけど」

「おやすみなさい」

「あ、ちょっとせんぱ（ぶっ）」

会話を遮断する。速攻で電源を落とす。

……………ふう、成功だ。

「桜華さん……私のコト、飽きちゃいました？」

寝巻の袖をぎゅっと、小さな手で力いっぱい握りしめながら、クリーム色の瞳を少し紅くさせながら、そう聞いてくる葉桜さん。

そんなこと――

「そんなこと、僕が、安心院さんを好きになるぐらい、あり得ませんよ」

ぎゅっと抱きしめる。

まあ、その後は……自主規制で……。

おやすみ、メロス。

おきろ、セリヌンティウス。

閑話：後輩との関係（後書き）

随分と、ぶつとんだ後輩に仕上がりました

製作時間五分

では、次回も宜しくお願いします

20話：またか……（前書き）

今回もみなさんをごっかりさせるためにやっ
てまいりました（ニコニコ）

では、どうぞ！

20話：またか……

「桜華同級生、総務の席に座るがよい」

「……はい？」

めだかさんの、開口一番がそれだった。

僕としては「あれ？生徒会って、会長、副会長、会計、書記、庶務だけじゃなかったっけ？」という、ある意味というより当り前の事が頭をよぎった。

それに、庶務≡総務じゃないの？

「まあ、考えておいてくれ」

「は、はい……」

いきなりすぎるような気がしなくてもないよ？

いや、入ってもいいんですけど、なんか超自然の意思がそれを拒む、様な気がする。

これが、数日前の事。

ある日、葉桜さんと一緒に廊下を歩いていると、なんか人相の悪い人たちがチエーンやら釘バットやら、訳の分からんわっかやらを持って、階段でたむろっていた。

まあ、別にあれですよ。相手が風紀委員会ってやつですよ。

「それですよ？桜華さん？」

「ん？どうしました？」

「この、人相の悪い人たち誰ですか？」

「ああ、箱庭学園風紀委員会の方たちですよ。ちょっと過激すぎるところが特徴です」

「ふうん。なんか、どうでもいいことしてる人たちみたいですね」

「ですね。正義というものは、曖昧なものなのに、それに個人を埋没されてらっしゃる。なんとも、つまらない人生を歩んでいる方たちですよ」

「そこまで言うつもりなかったのに、つい口が……。時すでに遅しってやつですか。」

風紀委員会の琴線に振れちゃったみたいで。

「何がつまらないって？その身に俺らの正義を刻みこんでやる！」

「……やりすぎの正義には、やりすぎの悪を以って……」

「ああ……」。

「正義にすがりついて成長しない、そののほづが、よっぽど悪ですよ」

「なッ！？俺の木刀！？」

「さあ、悪の正義を見せてあげますよ。その、やりすぎの精神とやらののつとつて、僕を止めてみてください？」

刹那、轟音。

死屍累々。

「ま、正義しかない正義なんて、所詮、正義もある悪にこんなにも簡単に負けてしまう」

「つまらないですね。人間と言うのは、もっと素晴らしい者の筈なのに」

何をしたかって？正当防衛ですよ。

殺してません殺してません、断じて殺してません。全部気絶です。訓練も鍛錬も連携も、全部お粗末でしたね。日向くんでも全員倒せたことでしょう。

「うーん。風紀委員会とはかわりを持たないようによろしくと思いましたが、まあ、あれですね。子供にお説教、しに行きますかね」

どこにいるのか分からないけど、まあ、生徒だし、学園内にいるでしょう。

そのあと、鉄人レースの途中であつた黒神めだかは、この死屍累々の光景に少し違和感を覚えるも、見事時間内に鎖を切ることができた。

場所は移り生徒会室。

「……？なんだこのボール？」

「いな！ただのボールではない。スーパーなボール、つまりスーパーボールだ！」

「（……………はあ。）」

そうですか、としか言いようがないことを言われ、反応に困る三人。

「まあ そんな顔をするでない。私はこれでも真面目な話をしておるのだ」

善吉からスーパーボールを受けとりながら、大真面目と言ったふうに言うめだか。

「風紀委員長 雲仙二年生の使う奇妙な術のことは貴様達も聞いていよう」

「ああ えーっと なんか変な軌道の正体不明な飛び道具とかだっけ？」

「うむ」

そう。めだかが音楽室にて雲仙冥利と、初の邂逅をしたときに、ピンポイントでいくつも攻撃されたのだった。

その威力は絶大で、使われたと見えるスーパーボールも当たった衝撃ではじけ飛んでいると見える。

その理由は、どこにもそのボールが転がっていなかったからだ。

「このスーパーボールがその正体だ！」

「はあっ！？風紀委員長の武器がスーパーボールだったのか！？」

まさか、そんな幼稚なモノだとは思ってもみなかったのだろう。

しかし、スーパーボールと言っても特注品。

「たかがスーパーボールと侮ることなかれ。こいつの反射力・反発力は大したものぞ」

めだかは人差し指と親指の間にスーパーボールを挟み、デコピンの要領で力強くスーパーボールを弾き出す。

ドガガガガと生徒会室を飛び回るスーパーボール。表現的には

跳ね回るだろうか。とにかく、そこら中の壁という壁に跳弾して跳ね回る。その威力はたいしたものどころではなく、木やコンクリートといったものに穴をあけていた。そもそも、指だけの力でここまですでに跳弾させること自体が異常なのだが。

「…な？」

「『な』　じゃねーよ！」

不意に、パチパチパチと生徒会室に響く拍手の音。音のする方向くと、風紀委員会会長、雲仙冥利がドアにもたれかかるようにして立っていた。

「どこにいるかな委員長」

うん？　なんかやけに上機嫌な僕。おかしい、なにかがおかしいぞ？　いや、そうだよ、一般的に見たら全てもおかしいけど……。

「葉桜さんは、女の子友達につかまって、引きずられるようにどっか行っちゃったし」

あれから、葉桜さんにあんなに格好つけて言ったのに。なんでだ、

いつもだ、僕が葉桜さんに格好をつけようとする、いつも邪魔が……。
いいんだい、拗ねてなんかないやい。いいさ、今に見てろ！何も見ることはないけど。

「それにしても、今回の僕はずいぶんとアクティビティ。何というフットワークの軽さ。まるで僕じゃないみたいです」

僕は僕だけど……まさか！？また少佐が……。

「諸君、私は……まあいいか」

今日は、剣道部日向君に任せてきちゃったし。存分に動けると言うことで

ド ツ

校舎が揺れんばかりの爆発音。

「な、なんだーうわー（棒）」

……ふむ、原作、だよな？うるおぼえウロボロ●じゃないのに……。
あれ？ネタ、分かるよね？

「あれは、最終的に連載されなかったよなあ……いや、伏線か？
たしか、話は暴力とか武力どっちが強いとかのオチだったような気がする」

うん、どうでもいいな。

「この、どうでもいいキャラを変えるつもりは毛頭ないですけどね」

お気に入り。うん、どうでもいいからこそ、お気に入り。

「変えるつもりはないけど、代えるつもりはある、ってね」

……まあ、若干壊れたキャラで行きますかね。

「……いひひひひひひ！いや、これは……でえは、殺戮だ。耐えろよ？正義」

うん、これだ。いや、これか？もう、いいか。

「……なんだったの？え？なんだったの？僕の、僕のキャラ作りは？僕のあの、中二臭いセリフは？いやいや、ちょっとぐらい待ってくれてもいいっすよ！普通は！？いや、普通じゃない？いや、そう言ったらそうなんですけど、もうそんなことはどうでもいいとしてですよ？」

僕が生徒会室に着いたところには――全て終わった後だった。

は、はは、これで二回目だコンチクショー！原作何回外せばいいんだよ！なにか？この世界は僕の干渉を拒んでいるとでもいうのか？

唯一は、雲仙委員長が壁にもたれかかるようにして座り込んでいることでしょうか？

「おめーは……」

「はいはい、そーですよ。機会を逃すこと2回。まさにKYの桜華とは僕のことですよ」

そうなんだ。僕が爆発音を聞いてすぐさま走って行ったら、こんなことにはなっただんかいなかったはずなんだ。僕の、僕の楽しみが……。僕が、キャラ作りなんてどうでもいいことに専念していなければ、よかったんだ。

それにしても、戦闘が終わるの速くないですか？そこまで早いかな普通。

「ケ、ケケツ！黒神の、ダチだろ……なんだ？シカエシか？」

「……いえ、なんていうか、もう……萎えました」

人間てやる気が一番大事だと思う。

「それにしても、派手にやりましたね」

壁が吹き飛び、若干、校舎の位置もずれてるんだろうか？まるで戦場だ。日本でお目にかかることができるとは思わなかったけど。

「『^{シンデレラ}灰かぶり』やらなんやら使ったからな……まあ、それでも、黒神の化けの皮をはがすのが精一杯だったかね」

まあ、化けの皮はがしても化物だったがねと雲仙先輩。

「充分でしょう」

この人も、なんか悲惨な状態になっている。第一、^{サイズ}体格が違ったらそれだけでアドバンテージなんですよ。体格が違えば、実力差なんて関係なくなる、場合も多い。木偶の棒は、まあ、木偶ですけど。

「それに、校舎の損壊も学校の費用から出されるんでしょう？あんまり無茶しちやいけませんよ」

「ケケツ、どうであのじーさんは金を腐るほど持ってたから大丈夫だ。それは、テメーのとも一緒だろうが」

いや、不知火財閥と一緒にしたらいけないと思いますよ？レベルが違っんですから。

「はあ……パチンツ」

「ああ？カッコつけ……か……」

「まあ、今回は僕が持つてあげますよ。けど、僕のオトモダチをあんまり虐めないでもらいたいです。あと、葉桜さん泣かせたら、ブッコロス。では、そういうことで」

「化物のダチは、人外かよ……ケケッ」

「瞬間の発光——今回の被害、雲仙の怪我を含む全てが、治っていた」

「葉桜さん、いちゃいちゃー」

「桜華さん、いちゃいちゃー」

うん？……へ？

20話：またか……（後書き）

桜華さんと葉桜さんのいちやいちやは、心のダメージを回復するた
めのry

うん？お前は原作に介入させる気はないのかって？

何を言うか！あるに決ま……てますよね？ね？

自分でも、このまま原作に介入できなかったらどうしようと恐怖し
ています

では、次回も宜しくお願いします

21話：僕の異常（前書き）

地の文……疲れた

では、どうぞ！

21話：僕の異常

とある学園のとある一室、某月某日某曜日。まあ、生徒たちが廊下を普通に歩いていることから平日ということは分かる。

その一室で、二人きりにするにはあまりにも不釣り合いな人間が二人。あと、もう一人余分なのが混じっているが。

片方は得体のしれない雰囲気を漂わせた十分に老人と言えるほどの翁、もう片方は凛々しく美貌見目麗しい、どこぞのお嬢様といった感じだが、傲慢な態度はどこにもなく年上の翁に対して楚々とした態度で臨んでいる。

最後の一人は、銀髪碧眼。どことなくどこもない雰囲気を漂わせ、雲のように自分を掴ませず、二人とはまた違った雰囲気を漂わせている少年だった。

少年と少女は老獪な男性に向かいあうように並んで座っている。

「雲仙くんとの小競り合いは大変でしたね黒神さん。理事会も彼やりすぎの正義には手を焼いていたものですから、正直言つて助かりましたよ」

根も葉もないようなことをまさに白々しく言う老獪な男性。この男性を、不知火袴という。

「箱庭学園理事長として正式にお礼を言わせてください」

湯呑みを持ちながら、真意のつかめない表情をする袴。

「例には全く及びませんよ、不知火理事長。それより私としてはお孫さんの制御をお願いしたいものですな」

袴と同じように湯呑みを持っている少女。まだ15歳のはずなのだが体の発育が著しい。彼女の名を黒神めだかという。

「恥ずかしながら彼女にはしてやられっぱなしでしてね」

そして最後の一人

「アチツ！？ちょ、理事長。お茶が熱いですよ。アチチ」

主人公にはあまりにも向いていない少年、この物語の二人目の主人公。神城桜華。

「……まあ、彼は置いておいて。ははは、無茶を言わないでくださいよ黒神さん。袖ちゃんをコントロールできる人間なんて精々、君の幼なじみの人吉くんくらいでしょう」

「……（憐れむ視線）……確かに」

「二人して僕を無視しますか…そうですか」

一人でいじけだす桜華。二人の憐れみの視線が痛いので顔も上げることができない。しかし、実際は、

「（やった！これ、あれですよね。原作ですよね。きたこれ）」

落ち込むふりをして蔭でガッツポーズを作っている桜華。

「さて…それでは早速本題に入りましょうか。目安箱に投書して君に足を運んでもらい、桜華君と一緒に連れてきてもらったのは他でもありません」

「いきなり首にチョップ喰らって気絶させられたんですけどねー」

横目でちらりとめだかを見やる桜華。それにたいしてめだかは悪びれる様子もなく

「桜華同級生が悪い」

「……ぐす」

今は慰めてくれる葉桜もない。ということは桜華の傷口は広がる一方。

「理事長、話を進めましょう」

「そ、そうですね。……黒神めだかさん、それと神城桜華くん。君たちに折り入ってお願いしたいことがありますね」

しわがれた臉を、威厳のある雰囲気を漂わせ、見開く。

「それは怖いすな。あなたはあのお孫さんの御祖父でいらっしやる。どんな無理難題をふっかけられることやら」

軽く目を伏せながら、「冗談交じりに答える。

「僕はそう言われることをあらかじめ予測していました。……なんて」

こいつに関してはノーコメントで。

「まあそう構えなくてくださいよ。なあに、簡単なお願いなんです」

ほっほっほと笑いながら顎に蓄えた白い髭を撫でる袴。簡単とい
って簡単ではないのが、頼みごとクオリティ。

「実は雲仙くんは風紀委員長としての活動とは別に、私の主宰す
るプロジェクトに参加してくれていましたね。ただ彼は今度のこと
でしばらく静養しなければなりません。そこで黒神さんと桜華くん
に彼の代役を務めていただきたいのです」

「……………プロジェクト…ですか？」

「ええ」

にこつと人のよさそうな笑みを浮かべて、眼を細める。

「私は便宜上、それを『フラスコ計画』と呼んでいます」

「（名前がいかかわし過ぎる件について）」

このことについて桜華は原作の本当の片隅の、小さな小さな残照
の様な記憶をもっている。なので、めだかよりは精神的に余裕があ
るだろう。

しかし、絶対的余裕でもないのに余裕を持つことは、油断以外の
ほかならない。

「黒神さん。それと桜華くん。君たちはどうして自分が優秀なの
か——疑問に思ったことはありませんか？」

袴の袖に手をいれながら、依然として笑ったまま質問を繰り返す袴。

「……………質問の意味をはかりかねますね。そもそも私は自分を優秀だなどと、うぬぼれたことを思ってはおりません」

少しの沈黙の後めだかが少し不機嫌になりながら答えを返す。

「僕がいつも疑問に思うのは、うん、やはり葉桜さんの可愛さですね。あそこまで可愛いと逆に恐怖を感じます」

こいつに関してはノーコメントで。

「いや、やはり、真面目に答えます。自分に疑問なんて持った時点で、その人は優秀なんかじゃありませんよ。一点の曇りなく自分を信じ切れる人こそが、優秀なんです」

彼の瞳に鋭い光が宿る。それは袴ではなく、袴の後ろに注がれているような。

「ははは、謙遜することも謙譲することもありませつみよ。一君たちは明らかに以上なんですから（……………）！」

元から細い目をほんの少しだけ開いて確信を突くような口調で二人に言い放つ。

「足捌きで分身する。それを全て撃ち落とす。新聞の内容を細大漏らさず記憶する。全身骨折を一日とかからず回復させる。フル馬拉ソンを二時間フラットで駆け抜ける。軍隊以上にハードな訓練を

軽くこなす。書の道を三カ月で極める。剣の道を三カ月で極める。十代において赤帯を巻く。十代以前に世界チャンプになる。獰猛な獣をひとにらみで屈服させる。獣と意思疎通をヒトと同じように図れる。関数計算を暗算でする。見えないものを見れる。水の上に立つ。本気で泳ぐと水が爆ぜる。校舎を素手で破壊する。鉄パイプで殴られ平然としている。どれひとつとっても、人間には到底不可能な行いです」

淡々と。まるで死刑宣告でもするかのような重いノリで言葉を並べて行く袴。

「これは才能とか資質とかそういう低次元の話をしているのではありませんよ。人体では物理的に！筋肉量的に脳構造的に解剖学的に不可能なのです！！そのありえない不可能なことを、しかし当然のように実行する君たちは異常であるとしか言えない！そう！君たちの成すことは偉業ではなく異常です！！」

若干興奮気味になりながらも言いたいことを言う袴。一方桜華は……

「（うわ。潤さんに言ったら絶対殺されますよ。『不可能不可能言ってんじゃねえ！ちっとは一生懸命生きろよ！お前の脳みそは空っぽですか？プロテインでもぶちこんでやろうかこのくそ爺！』とかいいながら……）」

まあ、事後報告とていうと、あれから哀川潤ともだちになった桜華。否、強制的になった桜華。

はい、回想ドン！

『はい、うちの可愛いプリーティー最高な息子と娘だよ！』

『ほほう……ん？お前……？』

『……ぼ、ぼんじゅーる』

『ひひひ……よろしくよろしく。まあ、あたしとお友達になりやがれよ』

『……い、いえす』

『オーケーオーケー。明日への道しるべ。けど明日になるころには消えてる水性マジック みたいなの！』

最後によくわからない超比喩を言った。桜華が物思いにふけっていた間に話は少しかり進んでいたように。

「では黒神さんと桜華くん。ここでひとつ老人の実験に付き合ってくださいませんか？」

カランとサイコロが8個入ったグラスを二つ二人の前に置いた袴。

「これを、投げればよいので？」

「ええ」

また一つ、気色の悪い笑みを浮かべた袴。

「……デジャヴ」

そう言いながらもグラスに入ったサイコロに手を伸ばした桜華。めだかのそれに習うように手を伸ばす。

持ったサイコロを、そのまま軽く何の気もなしに思いも願いも感情も込められることなく、狙いもつけずに思惑も図らずに投げられたサイコロは、まるでそうなるべきだったと言わんばかりに8個全てが積まれる。

「すみません。昔からこうなんです。私がサイコロをまとめて振ると、なぜか、こんな風に積み重なってしまうのです」

申し訳ない、と一つ嘆息。

「……………いえ、それでいいんです。それでこそ…君を誘う価値がある！」

ちらり、と袴が桜華の方を見やる。袴も桜華の試験の結果を知っているのです、めだかの方よりは興味が薄かったのだ。しかし…………

「（サイコロが、無い？）……………どうしたのですか？桜華くん。サイコロは…………？」

「あれですよ」

桜華が指さす先には、何かが粉々に砕かれたかのような粉が、ハつ。

「…………ッ！？まさか」

「はい、投げたら一つが二つ。二つが四つといった具合に粉々になって行きました」

フツと机の上の、元サイコロたちを吹き飛ばす。まさに 零。

「まあ、いいでしょう。僕も生物です。進化ぐらいしますよ……それが、プラス方向かマイナス方向かは、知りませんが」

自分のことを、人間とは例えなかった桜華。

——僕は、人間じゃない。

桜華の中にある、桜華の代償。転生により、自分は人間じゃなくなった。一度目の転生では、生きるのに必死過ぎて気付かなかった。しかし、治安もなにもかも、あの時代の数百倍。そんな世界は、桜華にしてみれば簡単に生きることができ過ぎる世界でもあった。簡単に生きることができると言うことは、その分違うことに回せるということ。桜華は、自分について考えた。

一回目の転生の時は、どんなに人から離れていても人だといいつた。

今回の転生では、あっさりと自分が人間から外れた存在だと認めた。

「……ハッ。つまんね」

自分にしか聞こえないように悪態をついた桜華。しかし、桜華はつまらないことを、辛いことを、面白おかしく変えてきた。

おもしろき こともなき世を おもしろく。

「……面白くないなら、自分で面白くしなきゃ、ですよ？ 潤さん……」

彼の心の中でも、 人類最強 は大きな存在になっていた。いつ

か彼女も橙色から聞かれた。

『生きていることが——つまらないのか？』

あんたほどの力があれば、世の中なんて簡単だろうと。

彼女も答えた。簡単過ぎて、レベルが酷く低くて、この世界全ての全てがつまらないと。苛々すると。

『だからしょーがねえから、あたしが盛り上げてやってんじゃねえか……はははっ！ その甲斐あって、あたしの場合、楽しくて楽しくてたまらねえぜ！』

世界はくだらなくはない。世界は本当に素晴らしい！高らかに声を上げた。

「よし、頑張れ僕。……っっていうより、葉桜さんがいれば超ハッピーなんですけどね！」

高らかに宣言した桜華。もちろん二人にも聞こえるように。二人は、まあ、うん、スルーだ。と、いうよりもほとんど話が終わっていたのか、めだかが席を離れる。

「私は見知らぬ他人の役に立つために生まれてきました。私のやさやかな能力の裏打ちはそれで十分です。そして、天才などいないというのが私の持論であり、そのプロジェクトはそんな私が協力できる類の計画ではないでしょう」

今度はめだかのターン。

「お話自体は興味深く聞かせていただきましたが。雲仙二年生を

リタイアさせてしまったことは別の形で償わせてください。では失礼します。ほら、桜華同級生も行くぞ」

「はいはい。理事長、一言言います。完璧って、なんですか？」

ばたん、と扉を閉める音。残された袴たちは

「フウ……やれやれ、こんなことなら内容を伏せたまま協力してもらうべきでしたかねえ」

湯呑みを口に運びながら、別に本当に困った様子もなくやれやれ、という。

「しかし強い子だ。強い強い。強過ぎて、弱点が丸わかりですね
ずずずず

「で、君達はどう思いました？」

袴の後ろに現れた六人の異形。

「僕には理事長が言うほど大した奴らには見えませんでしたけどね。サイコロ占いの結果には驚かされましたが。彼ら、僕達がここにいるのにも気づいた様子はありませんでしたし」

穏やかな雰囲気。それに不釣り合いな日本刀を腰にぶら下げた黒髪の少年。

三年十三組。『ラストカーペット
枯れた樹海』宗像形

「いやあ、俺の見たところ気付いた上で無視してたっつー感じだ

ぜえ、ありや。とりあえず五回くらい殺してみようとしたけど全部失敗しちゃったもん」

肌が浅黒い大男の「もんのどこに需要があると言うのか？」

三年十三組『ハートラッピング棘毛布』高千穂仕種。

「いずれにしてもあの子が雲仙くんに勝てたのはただのまぐれだと私は思うよ。まあでも、私は好きだよ、ああいう子」

天井にぶら下がるようにして現れた胸元を露出した少女。もう春も終わっているというのにまだ毛糸のニット帽という、寒いのが暑いのかよくわからないファッションをしている。

二年十三組『ベストベイン骨折り指切り』古賀いたみ

「私は意見を有しない。思うことなど何もない」

黒マントに顔包帯という、キャラ作り感マックスの男性か女性かもわからない人物。

二年十三組『ブラックホワイ黒い包帯』名瀬天歌

「いいんじゃない？あれなら人数合わせぐらいにはなるでしょ。結局、ボクと王土がいればそれでフラスコ計画はなりたつんだし」

他のメンツに比べると迫力に欠けるが、キャラの勢いなら負けていない。

三年十三組『ラビットラビリン狭き門』行橋未造

そして

「うむ、あれだけの美貌だ。俺の視界に入ること許してやって

もよかるう」

不遜、俺様、自重しない、そんな感じの男。

三年十三組『クリエイト創帝』都城王土

彼らはフラスコ計画の最重要人物。モルモット歴代生徒たちの中でもさらに異形、最高にして最低の登場人物。

「『サートイン・パーティー十三組の十三人』」

彼らは、そう呼ばれていた。

「おお、お茶の温度がいい具合に。ずず……今度はぬるい」

全員が声をする方を向いてみると、今さっきめだかとともに部屋を出たはずの桜華本人がお茶をすすりながらそこにいた。

「ん？不思議ですか？今さっきおまえは部屋から出ただろう、って？」

そう、あれは幻覚でも何でもなく、視覚情報として完璧に脳に情報を送られていた。

「分からないことがあると、人は頑張りますからね。精々考えてください。その、完璧を作り出せるという根拠に基づいて」

「……桜華くん、どうやったのですか？」

袴が若干焦り気味に桜華に問う。桜華は「ええ、教えましょう」と隠す様子もなく教える。

「種は簡単。僕の異常によるものです。僕の異常、能力の性質的には、都城先輩と行橋先輩を足して二で割ったような感じです」

【平伏せ】
「

「ははー、この通り許してください。みたいなの？あははは！」

王土の言葉にわざと従い、頭を深く下げながら笑い声を上げる桜華。

「ライダーキック！」

いたみが突如コンクリの壁をもぶち抜く蹴りを桜華に放つ。それを桜華は笑いながら、笑ったままだった。いたみは「殺った」と確かに足の裏に桜華を蹴った感触があった。

「古賀ちゃん、なにしてんだ？っていかどこ蹴ってんだ？」

「え？あれ？あれ？」

確かに蹴り抜いた感触はあった。しかし、今自分の下にあるのは無機質な床だけで、人体など転がっていない。

「避けられた？」

「ちげーよ。お前がいきなり見当違いのところを蹴ったんだ」

と仕種はいたみの横に微笑しながら立っている桜華を睨みながら言う。

「けど、ちゃんと蹴った感触が……」

そう、あの感触は紛れもない現実であつた。そこで桜華の言つていた王土の能力と似ているというところから、自分の肉体が操作されたのかと思うが、それだと蹴り抜いた感触のことが説明つかない。

「????」

ますます混乱するいたみ。刹那、桜華を数百発の弾丸が襲う。宗像だ。彼の手には二丁拳銃が握られている。弾丸の嵐が数秒続き、やむと、そこには桜華の姿はなかった。

「混乱するのは分かりますが、銃は怖いですよ。銃は」

いたみが登場したように天井に張り付いている。

「
ファンタジア
素晴らしきこの世界
」

幻想曲第一番：幻妖、と小さな声で呟いた。

「お勉強の時間です。自分の部屋でラジオを聞いていると、急にさおやの掛け声が。窓から外を見てみると、竿屋の人がやっていた。どういふことかわかりますか？」

「ラジオの受信電波にその竿屋のが割り込んできた。ってどこか？」

名瀬がつまらなさそうに答える。

「正解です。なら、お気づきになりましたか？」

「電波って……まさか」

「……あ、待ち合わせの時間だ。遅れたら、やばい！で、ではこのへんで！」

ドアをボタンと閉じて部屋を後にした。残されたメンツは、まるであやかしに化かされたかのような感じだ。

「……名瀬さん。教えていただけますか？」

「ああ……奴の能力は、王土先輩と同じ電波による人身干渉みてーだな」

「ほう……似たような能力者がいたとはな」

別に驚いた様子もなく聞き流す王土。

「けど……あいつは、電波を視覚情報に変換しているみてーだ」

「うん？分かんないよ名瀬ちゃん」

いたみがあたまをうんうん捻りながら名瀬に質問をする。

「俺達……私たちはまず網膜で情報を受け取って、電気信号に変えて脳で認識して、初めて何かを見た　ってなるんだよ」

「……なるほど、そういうことかい」

仕種が得心いったようにうなづく。

「ようするに、あいつの電波で俺たちの脳神経の視覚を司ってる所に、直接、視覚情報として電波をぶちこんできてるってこった」

「そう……それで、俺たち……私達の脳みそは ありもしない現実、まさに幻想を見せられてたってことだよ」

しかし、ここで疑問に思うものが二人。

「けど、私はちゃんと蹴った感触があったよ？」

「僕も、銃で撃ち抜いた感触はあったけどね」

いたみと宗像、直接手を下した二人である。あの感触は紛れもない現実、のはず。

「知ってるか？二人とも」

名瀬が真剣な表情になって言う。

「昔ある実験が行われた。脳心理学だ。ある囚人に目隠しをして、音以外、そいつに情報を与えなかった。その状態で耳元で 今から当てるのは熱せられた鉄の棒だ って何度もつぶやくんだ」

いたみの耳に同じように囁く。

「本物はただの平凡な鉄の棒だ。当ててもひんやり気持ちいい、な。けど、それが何百度にも熱せられた鉄の棒だと思い込まされていた囚人にそれを当てたらどうなったと思う？」

「当てた部分が、火傷したんだよ」

ひゅう、と仕種が口笛を吹く。

「それといっしょだ。いや、もっと性質の悪い」

「ようするに、あの幻想には触れていると感ずることもできるし——あちらからのショックだって等しく感ずることができる」

「たしかに、恐ろしい能力だ。しかし、私はその難解な能力を、化学的に数分で解明できたあなた方を評価しますよ」

と袴は笑う。

「さあて、面白くなってきました」

袴がお目目を黒白させているところ。

「さう、に、い、い」「セーフ！僕セーフ！」あ、桜華さん

「ふう、ふう、ふう。さてと、買い物行きましょうか？」

「はい！」

葉桜とデートの開始だった。

おもしろき こともなき世を おもしろく 桜華座右の銘。

21話：僕の異常（後書き）

戯言とかもつめっちゃくちゃに混ぜてやんよ！

はい、桜華くん的能力でした。

まあ、妨害電波とでも思っておいてください

まあ、彼の能力には応用が利きますのでまだまだあります

では、次回も宜しくお願いします

22話・拒絶（前書き）

桜華くんの過負荷のマイナス進化をご覧ください

では、どうぞ！

22話：拒絶

次の日の朝。いつものように目を覚まし、僕はベッドから体を上げる。

「うん。異常なし」

まあ、当たり前だった。

「今日も今日とて、箱庭学園は平和ですね」

嘘ですごめんなさい。なんぞこれ？

「なんだこれ？僕のクラスに、人がいっぱい？」

定期報告。いや、異常報告？そんなことはどうでもいいんだよ。

「13組生が、登校？」

待てよ、よく思い出せ。確かこれには理由があったはずだ。思い

出せよ馬鹿。多分今はフラスコ計画編って奴だった。

で、フラスコ計画は、たしか、十三組の十三人つてのがいて……それに参加できたら、アリエナイほどの優遇措置が取られるんだっ
たっけ？

「なるほ。それでか」

……あれ？待てよ？たしか、それって雲仙先輩の空席を狙っての
ことで、第一候補生たるめだかさんを潰そうと学園に一斉登校して
きたんだよな（いつもは二トなのにな）。

あれ？それって、僕も狙われるんじゃない？

「ふう……何人目ですかコンチクショウ」

僕はたった今襲ってきた十三組生を見下ろしながら、その足で生徒会室へと向かう。その間も何人かの生徒に襲われるが、右手に構えた竹刀で払いながら突き進む。

何故、こんなにも焦っているのかというと……

「ああ、葉桜さん……どこに行っただんですかも」

葉桜さんとはぐれてしまったからである。なんか訳の分からない異常に飛ばされてしまったんですよ。多分、テレポーターかと思えますけど。

「ああもう！じれったい！」

別に葉桜さんは普通の異常（この表現はおかしいような気もするが）なんかに負けるわけでもないですが、いかんせんここは箱庭学園万が一が起こる万が一の場所。

僕の異常で学園全体を電磁波で覆って探索しているけど、変な電波信号だらけ（十三組生のせいと思われる）で、要領を得ない情報しか得られない。

マイナス進化をした過負荷を使ってもいいけど、あれは、あまり使いたくない。僕が僕じゃないみたいに思えるから……。

「と、とりあえず、落ち着こう……」

口に出さなかったら、今度は足が震えだした。葉桜さんが、葉桜さんに、葉桜さんを……何かあったら、世界を殺してやる。

「めだかさん！」

生徒会室のドアを勢いよく開く。力加減が余りつかなかったのか、ドアノブを握りつぶしてしまった。

「どうした？桜華同級生」

そこには研究者のようなコスプレをしためだかさん。そして少し顔を赤らめた善吉君の姿が。

「いや、そっちがどうした……ってそれどころではなく。葉桜さん見ませんでした？」

「ん？いや、知らんが。どうかしたのか？」

「そういえば、お前らが一緒にいないなんて珍しいな」

「いや、それが……かくかくしかじか……」

かくかくしかじか便利！ってそれどころではなく。

「私達もフラスコ計画を潰しに行くところだ」

「できれば一分以内をお願いします！」

「いやムリだろ！」

無理は承知の上！ってこんなコントしてる場合でもない。

「僕、葉桜さんを探すので、これで」

生徒会室からフラフラしながら転がるように飛び出る。もう冷静なんてものじゃない。全てが凍りついてしまった。

足を滑らせて転ぶ。すぐさま立ち上がるがまた転ぶ。まるで地に足がついていないみたいだ。

「何でだよ……なんで葉桜さんが危ない目に会ったんだよ。意味分かんねえよ。訳分かんねえよ。知るかよそんなこと。格好つけんなよ。可哀想にするなよ。無駄なんだよ。舐めてんじゃねえよ」

「神城桜華だな」

その声に対し、ぎこちなく振りかえる。見るからに校則違反の格好。門司先輩とは違う感じだ。

多分、十三組生。

気にしないように横を通り過ぎようとした。けど、ダメだった。止められた。肩を掴まれた。投げ飛ばされた。背中を壁に打ち付けた。絶息した。息を吸い込んだ。痛かった。

「ふん。所詮はこんなものか」

鼻で笑ったあの人。どこかに去ろうとするその人。どうしてもよかった。

どうしてもよかった、はずだった。

「待てよ……こんなもんってどんなもんだよ。そのちっぽけな定規で何が測れたっていうんだよ。人間なめんなよ」

思考が凍りついて動かない。けど、体はふわふわと頼りなさ気に動く。竹刀を構えて、とんとと一歩で間合いを踏みきる。それについてこれなかったのか少し身を引くだけで、避ける動作はなかった。

「クタバレ」

竹刀を勢いよく振る。肋骨が折れたのか、ぼきつと乾いた音が廊下に響き渡る。そのまま振り抜き窓の外へ。

「知らねえんだよ。人間が人間を測るなんて、阿呆か……現実も見れない妄想狂が」

アイツが落ちて行った窓の外を見た。よく見なれた、クリーム色の髪の毛が揺れるのを見る。

男と女数名に囲まれていた。喜ばしいはずなのに、手足がしびれ

たように動かなくなった。

動かない。まったくもってこれっぽっちも手足が動かない。能力も行使できない。

「葉桜さん……」

小さな声しか漏らすことが出来ない。何でだ？なんで、何もできない？ふざけるな。

葉桜さんは、なんとか戦っている。未知の能力に苦戦しながらも、多数相手に舞うように戦っている。

けど、ダメだ。消耗戦だと、体格差で絶対負ける。過負荷を使おうにも、葉桜さんのは間違えば相手が即死。無闇に使えない。

「なんでだよ。動けよ……」

「ウゴカナイー！ツテカ？」

ぎこちなく振りかえると、そこにはやはり十三組生。

「【ただ一つ変わらない粘着力^{ネバー・ガム}】はどうよ！ツテカ！俺の異常は対象者と接地部分を、圧倒的力で接着することツテカ！」

「な、何でこんなことを……？」

声もぎこちなく震える。一秒あれば助けに行ける距離で、助けに行けない。最愛の人が苦しんでいるのに、助けられるのに助けられない。

「あいつを人質にしておまえを倒すって手段ッテカ？理解できたか？神城桜華」

【ああ、無情】
ゼロ

体の自由が取り戻される。同時にテカテカ五月蠅い男を√2秒でタコにしてやった。

「葉桜さん！」

その声が聞こえたのかこちらを一瞬振り向く葉桜さん。

けど、それが、いけなかった。

大きく振りかぶった男の腕が、葉桜さんの右半身を、打ち据えた。まるで彼方へと飛んで行かんばかりに加速しながら学校の壁に叩きつけられる、葉桜さん……。

「あは。あは。あはははははは！」

葉桜さんを殴った十三組生に向かって手を翳す。

拒絕拒絕拒絕拒絕拒絕拒絕拒絕拒絕拒絕拒絕拒絕拒絕拒絕拒絕拒絕。

僕のマイナスは、
拒絶だよ？

痛みが消えることを拒絶してやる。

お前との距離を拒絶してやる。

僕への能力を拒絶してやる。

僕の攻撃を避けることを拒絶してやる。

お前の存在を拒絶してやる。

なにかも、全て、拒絶してやんよ。

「葉桜さん……」

壁に激突して、口から血を吐いて倒れている葉桜さん。

「あ、ヒューヒュー、お、桜華さ、ん……や、やられちゃいました」

「あ、ああ、あああ。」

「だ、大丈夫ですよ。これくらい、病院に行けば、すぐに……」

「……寝てください。次に目を覚ましたら、全部終わってますから」

精一杯、笑う。

「は、い……。そ、させて、いただき、ま、す……」

精一杯、笑った。

葉桜さんも、精一杯、笑いかけてくれた。

十分だった。

「いい、だよな」

来たのは時計台。葉桜さんは、保健委員に預けた。

右手には、正宗を構えている。

「……天才を作り出す？ 完璧な人間を？ 夢？ 希望？ 多くの人の願い？ 生徒への実験？」

そんなもん、知ったこっちゃないです。

脚を屈めて跳躍する。そうして正宗を下に向けて、全体重を込めて落下する。

「——自分が見えてないようなニート野郎が、葉桜さんを傷つけてんじゃねえッ!!」

正宗が地面を突き破る。数メートル突き破ったのちに金属らしきものにぶつかる。地下一階フロアの天井だ。

[illegible]

がぎういんと、鈍い音を上げて天井に穴が開く。

床に降り立つと聞こえてくる声。

「見る目があるのはお前だけじゃねーんだよ黒神！俺にも、なんとなくわかりかけてきたぜ？お前の完全さの秘密って奴がな」

「完全な奴なんていない。いるわけがない」

「……桜華同級生？」

「酸素が生成できるわけでもなければ、太陽光を発することができるわけでもない。完全に完璧な奴なんているわけがない。創れるわけがない」

「いきなり現れて偉そうだな？」

「……知らねえよ。ぼつと出野郎。潰すなんてなまぬるいことしないよ。現存する全てのデータおよびその成果もろとも全て、拒絶してやる」

「
.....
殺^{リク}戮^クつてやんよ
」

22話：拒絶（後書き）

最初の方で出てきた能力。あれは、この能力に至るまでの過程だと思ってください。

球磨川君の大嘘憑きへの進化みたいなものだと考えてくだしゃあ。

人間、ある程度の致命傷を負うと神経をシャットダウンするそうです。

それを拒絶してやると、痛みは際限なく増加します。

死すらも拒絶する能力。

ちなみに、葉桜さんの両親はいまだに東京湾の底で魚の餌として、未来永劫消えることのない痛みを与えられながら、死すらも拒絶されて生き続けています。

拒絶と言うのは、恐ろしいものですね

では、次回も宜しくお願いします

23話：カッコつけ・括弧つけ（前書き）

O r z ↑ 土下座

すみません。遅れました。理由はニコ動です。

……………（・・・；）

い、いやああああああああああ。見捨てちゃダメえええええ
！！

こんな感じで、駄作者ですけど、この作品を愛しております。ええ、
愛してるんです。今吐き気を催した人、トイレで吐いてきなさい。
パソコンや携帯を汚すんじゃないやありませんのことよ。

とりあえず、今回は胸やけがするような感じで桜華くんがカッコつ
けます。

では、どうぞ！

23話：カッコつけ・括弧つけ

仰々しく啖呵を切ったのはいいんですけど、どうしようかね？

「桜華同級生？　このような場所に、何故？」

「何故かと聞かれれば何でも答えますよ。ああ、気にしないでください。僕はあなた達の隣で好き勝手暴れさせていただきますので」

その結果、ちょっとグロテスクで18禁描写が出てきても、お気になさらぬよう、と付け加えるのも忘れない。文句を言われたらたまったもんじゃありませんね。

「？　そういえば、葉桜同級生は？」

ぴくり、と僕の肩が震える。
じわり、と僕の心が震える。

「たしか、13組生に襲われたときに見つからなかったとか言っ
てなかったか？」

「今は保健室で寝ていますよ」

「……それって」

「あー、善吉くん。それ以上言うのは無粋ですよ。こんなどこに
でもありふれた一辺倒なもやしが、誰かに見せるためでもなくカッ

「コつけてるんです」

目を覚ました時に、彼女の周りがいつも通りでいてほしいから。目を覚ました時に、彼女自身がいつも通りの笑顔を向けてきてほしいから。

だから、僕は、今から多くの人間の理想夢希望を、全部叩き壊す。完全な人間を作るっていうのは、たしかに素晴らしいことかもしれない。それでこの学園の生徒が犠牲になるのは、いけないことだけだ。

けど、いくら素晴らしくても、僕はム力ついた。イラッときたんだ。

気に入らない奴はぶっ飛ばす。ム力つく奴もぶっ飛ばす。

その相手が、善行慈愛の聖人君主だろうと、周りの誰しもからも好かれる偶像的存在だとしても、可愛くても綺麗でも、美しくても優しくても。

周りからどんな目で見られていようが関係ない。

僕は、ソイツにム力ついた。だから、大した理想も掲げることなく、雑草を踏みしだくかの如く薙ぎ倒す。

ただ、それだけだ。

「で？ どっちが俺と戦うってーの？ 俺としちゃ、どっちでもいいけどな」

「先輩。僕はあなたに興味はありません。やるならどうぞご勝手

に。僕はそのまま地下13階まで下りてスパコンぶっ壊してさよならするんで。ああ、どうしても止めるっていうのならいいですよ、話は別です。宣言通り殺戮られる覚悟があるのなら来てください」

「待て、桜華同級生。高千穂三年生とは、私が先客だ」

そう言って一歩前に出るめだかさん。

「それに、この男の異常は反射神経だ。^{アブノーマル}その穴を今から探そうとしているわけで、今のところ貴様に出番はないぞ？」

「穴？ ああ、簡単ですよそんなの」

「言ってくれるじゃねーの神城！ 俺の反射神経を簡単だと言ったのは、後にも先にもお前ただ一人だろうぜ！」

何が愉快なのか高らかと叫ぶ高千穂先輩。

いや、すでに反射神経と言う時点で穴だらけなんだって。

「……まあ、ここが開けた、そうですね、運動場あたりだったら分からなかったかも知れませんが。穴のうちの一つは、ここが通路だと言うことでしょうね。まあ、僕はめだかさんのいやらしいボディを興味関心まるでゼロの表情で見守っているんで、いろいろ試してください」

けど、めだかさんも僕の友達だ。

大怪我しそうになったら（まあこの人の場合大怪我が大怪我じゃない）、助けようと思います。上から目線お疲れさまと、誰か僕に声をかけてください。

「な、なんかビックリ展開メガモリみてえになってんだけど、めだかちゃん、アレだ！ 分身！ あれならそいつの反射神経に対抗できる！！」

そんなことを大声で言う善吉くん。

僕はそこらへんの壁に背中を預けてそれを傍観している。

「分身？ 何言ってるんだあいつ？」

分身、ね。フェイントの中にフェイントを織り交ぜて何重もの虚像を幾重にも発生させるやつですよ。

けど、僕は見極めるのが面倒だったから全部打ち落としてしましたが、相手が反射神経ともなると、意味がないんですよ。

だって、ホンモノは一つしかないんですから。もし、全てが現像だったなら分身でもよかったんでしょね。隙間なく全方向からの一斉攻撃。それも正解の一つです。

「……………ま、愛すべき幼なじみからの折角の提案だ。とりあえず試してみるとするか」

そう言いながら靴をカツカツと履き直す。

「おいおい、お前らマジで言ってるのか？ 分身とか！ どの風魔一族だよテメーは！」

たしか、甲賀卍谷…………。

「甲賀卍谷だ」

あつてた！

そう言つとめだかさんが10人に分身する。それをみて高千穂先輩は「!?!」と驚愕の表情を浮かべる。

めだかさんマジ主人公パネエッス。
けど、無駄なのならば意味がない。

高千穂先輩の説明はハシヨろう!

「なるほど、びっくりしたぜ。だが、俺がするのは反応じゃねえ、反射だよ。どれが本体かわかるのは直前で構いやしねーんだ! 純粹に五感と神経がダイレクトに接続してるんだから、錯覚とか! フェイントとか! 脳が現象をどうとらえるかなんて——関係ねーの。」

ゴギン、と乾いた音が辺りに響き渡る。

「bぎつあb1b痛ツ!?! b y c d v j h k あ」

声にならない叫び声を上げ、いつもは見せない、苦しそうな表情を見せるめだかさん。

それに善吉くんは駆け寄ろうとするが、めだかさんに「来るなああああああああ!」と止められてしまう。

「めだかさん、手伝いましょうか?」

「ハア、ハア、一対一の戦いだ、邪魔をするな!」

右腕を押さえながら、壮絶な表情でこちらを睨んでくるめだかさん。

まあ、戦わなければよろしいということ？ 僕も、こんな切った張ったの茶番劇に付き合っただけであられるほど人間はできてない。むしろ、人でなしだ。

「じゃあ、僕は先に行ってますけど、追いついてくださいね？ ほら、こういうダンジョンってパーティで乗り込まないと制圧できないポイントとかがありそうですから」

「ゲーム脳お疲れ様。で？ 誰の横を通って先に行くんだ？」

やはり、高千穂先輩は腕組みしたまま仁王立ちをしている。

「……横を？ 何を馬鹿なことを。正面切ってぶっ飛ばしてあげますよ」

正宗を構える。

「物騒だねえ」しかし、そんなナガモノ、こんな狭いところでどうするつもりだ？」

ああ、ダメだな。刀の価値が分からないとか悲惨過ぎる。

「ん？ この豆腐みたいな壁がどうかしたんですか？」

正宗を横に軽く振るう。そうすると何か切った感触はあまりなく、そのままバターのようにながれ、一線壁に走る。

「なッ……！？」

「ほら。僕は先に行かなければならないんです。止めなければい

けないあなたと行かなければいけない僕。はたして、どちらの方が上でしょう」

「待て、桜華同級生。これは、一対一の」

「第二の幼なじみとして言わせてもらいますと、めだかさん。僕は歩いて行くとしていただけです。その過程で、邪魔者^{ザンノウ}が生えているのなら踏みしだいてでも、何の感想もなくただ当たり前のように、ここを歩いて行くだけです。だからめだかさん、これは戦いじやありません。ただのお散歩ついでのなにかしらすよ」

「桜華、同級生」

「それに、そのメモリを奪えたんです。ここで戦う必要もないでしょうに」

「!!」

「…嘘だろ、あいつ、自分の腕をへし折られながら」
「USBメモリを奪いやがった」

そんなことを言いあいながらめだかさんは胸の谷間へとそのUSBメモリを…べ、別にいやらしい視線で見ているわけではありませんよ!? いやアッ!? 葉桜さんだけに言っちゃだめですよ? いや、マジに。

「とはいえ、先程の様には勝ち誇れん。頭脳派を謳う貴様のことだ。どうせこれで私の秘密とやらは理解したのであるうつ?」

「…あ。実にテレビアンだ。つまり、お前は俺の逆なんだな」

一呼吸置いて、

「お前、反射神経がないんだ」

それが、どうしたって話だよクソツタレ。

「腕をつかまれても腕を引っ張られても腕を折られても！ てめえはそれに逆らうことなく、データを狙った。それこそ俺のキックにも全く反応しなかったよなあ！ そんなことは普通の人間には普通に通に不可能だぜ！」

だから、普通じゃないから生徒会長やってんだろクソツタレ。

「訓練の所為かなのか生まれつきなのか。お前にはあるべき反射神経が一切ない。肉体を完全に手動で操作してる」

……疲れた。

「道理で俺の異常性をあっさり見抜いてくれるわけだぜ。ベクトルは逆でも俺とお前絶対値が同じなんだ。俺が自動操縦ならお前は自由操縦オートパイロットマニアルマニュアルってことだ！！」

ドヤ顔はいい。さっさと説明を終わらせてチョーダイ。

否、必殺！ キングクリムゾン！！

「ないよりある方がいいに決まってる！ ない方がいいのは女の胸ぐらいなもんだぜ！！」

……べ、別に仲間意識とか、もってませんよ？ いや、本当だし。

む、無駄な説明とかもない方がいいかもだね！

「……………優劣はともかく、決着はもうついたはずだぞ。データが手に入った以上、私に貴様と戦う理由はない」

「いや、メンゴメンゴ。それ、実は偽物なのよ。こっちが本物！俺の研究が16ギガとかにおさまるわけねーじゃん」

……………啞然ですよ、コンチクシヨウ。

もういいや。行こう。

「一步。二歩。三歩」

「ああ？ お前、何して」

正宗を、横一線、振り抜いた。

「なッ」

「学生だから殺されないと思った？ どうせそんなモノは脅しだとも思った？ 僕がどこにでもいるもやしみたいな優男だからそんなモノは使えないとも思った？」

……………そんなこと、

「『甘エよ』」

「は、ははは！　おもしれえなアおい！　まるで宗像じゃねえかよ！　いいぜえ、だったら俺もこう返してやる。どうせお前は俺にそれを当てることはできないと思ってる！」

「……………手加減してやる。死なない程度になあ！！」

触れれば切れる。当たれば死ぬ。避けられたとしても、待っているのは、敗北だ。

一歩踏み込み、斬り上げる。それを先輩は軽く後ろに後退するこ
とでやりすごすという、最短の安全通路を通り反撃を仕掛けてくる。
右足からのミドルキック。それを剣の腹で受け、押し返す。それ
すらも過敏に反射神経が作動し、ほんの少し後退する。

「どうしたオラア！　そんなもんかよオイ！」

先輩が懐に潜り込んできて、ラッシュを仕掛けてくる。

「ああ、そうかい。本気を出してもいいんですか」

反射？ ああ、凄いつすね（笑）。いや、本当に。

けど、知ってますか？

攻撃つてのは、避けられるから避けられるんです。避けられない攻撃つてのは、避けられないんですよ。

例えば、この通路を綺麗に覆うような攻撃とか。

そして、知ってますか？

人間つてのは、避けられない攻撃は、反射的にガードを行うんですよ。

「『縮地・居合』」

通路に、斬撃の壁が通り過ぎていった。

「なッ……ア……」

「……よかったですね。運良^{うん}くあなたのところだけ、攻撃が来なかったみたいです」

ガード体勢をとった高千穂先輩の横を通り過ぎながら、そんな言葉^{ことば}を吐き捨てる。

後ろの壁には、丁度人型に壁が残っている。

「カッコよかったですか？ コンチクシヨウ……」

また、そんな暴言を吐き捨てて、ゆっくりと、その場を立ち去った。

23話：カッコつけ・括弧つけ（後書き）

orz
↑土下座

ひ、久々に書いたら桜華くんがよく分からなくなつた。

こ、こんな感じで飄々とした感じでしたよね？　ね？

葉桜さんのことだけにはヤンデレになる愛らしい男の子でしたよね？

とりあえず、カッコつけさせました。

これからも、どうか、よろしくおねがいします！

感想ご批判お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2234r/>

僕の異世界物語～僕と異常と過負荷と普通と～

2011年8月11日20時44分発行